独物語～ゆきのフォックス～

フリューゲル

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

比企谷八幡が雪ノ下雪乃の嘘に気付いてしまった、八月。

誰もが誰かに憧れ、理想を押し付ける。それは、八幡も例外ではない。

故に八幡はまちがえ、雪乃は嘘をついたのだ。

そして九月、色褪せてしまった生活の中で、雪乃は一匹の狐に憑かれたのだ。美しく、白々しい、真っ白な狐に……。

青春は、ひとりきりではいられない？

※物語シリーズと俺ガイルのクロスです。

時系列は猫物語（白）、俺ガイル五巻終了後となります。

目次

ゆきのフォックス　其之壱 …… 1
ゆきのフォックス　其之弐 …… 6
ゆきのフォックス　其之惨 …… 11
ゆきのフォックス　其之肆 …… 19
ゆきのフォックス　其之伍 …… 25
ゆきのフォックス　其之陸 …… 33
ゆきのフォックス　其之漆 …… 43
ゆきのフォックス　其之捌 …… 53
ゆきのフォックス　其之玖 …… 63
幕間　ひたぎチャット …… 72
ゆきのフォックス　其之拾 …… 81
ゆきのフォックス　其之拾壱 …… 93
ゆきのフォックス　其之拾弐 …… 105
ゆきのフォックス　其之拾惨 …… 114
ゆきのフォックス　其之拾漆 …… 121
ゆきのフォックス　其之拾伍 …… 127
ゆきのフォックス　其之拾陸 …… 139
ゆきのフォックス　其之拾陀 …… 148
ゆきのフォックス　其之拾捌 …… 157
終章　ゆきのフォックス …… 169

ゆきのフォックス　其之壱

「『走れメロス』を読んだ私の感想」

『走れメロス』の最大の教訓は、いくら友人とはいえ、都合良く使われるときは、使われるということである。メロスの身代わりとなったセリヌンティウスは、その後三日間に渡り、死の恐怖と戦うことになった。それは如何なる罪だろうか。いやセリヌンティウスは何もしていない。罪を犯したのはメロスであり、必死になって走り続けたのは、自らの都合だ、言ってしまえば当然のことである。

この話を美談としてよく使われているが、真相は全くの逆だ。セリヌンティウスの友情を、親切心を、覚悟をメロスが使ったのだ。自らが負うべきものを、セリヌンティウスに押しつけたのだ。真に相手のことを思うならば、そもそも巻き込まない。擦り付けられる程度の友情だからこそ、この物語は成立したのだ。

偉大なる太宰先生はもしかしたら、セリヌンティウスのような、都合の良い友人を作れと言いたかったのかもしれない。

追伸　妹の結婚式なんて存在しない。存在しないのだ。

「私も新学期そうそうから、呼び出しはしたくなかったのだがな……。世の中には、言わなければいけないことが多々あってだな」

俺が提出した読書感想文を、一字一句違わず読み上げ、机の上に大雑把に置いた後、平塚先生はそんなことを言った。

季節は九月。夏休みも明け、様々な理由で憂鬱になっている俺とは違い、クラスの奴らはいつもと変わらず騒がしい。日焼けがどうだの、海に行っただとかをいつまでも話しやがって。あいつら何でそんなに外出してるんだ。夏休みって基本家にいるものじゃないのか。

新学期が始まってから一週間、ぎりぎりになって終わらせ、滑り込むように提出した宿題も、特に問題はないのかと安心しきっていた所で、昼休みに呼び出しを受けた。上げて落とすとは、平塚先生もなかなかやる。

「今回は多少控え目であることが、それでも酷いことには、変わりない。弁明があるなら言ってみろ」

「あ、あれですよ。世の中この話を美談で語ることが多いから、そこに一石を投じると言いますか……」

「一石を投じたいなら、然るべき所に提出しろ」

平塚先生は机の引き出しから書類を出すと、こちらへ見せてくる。えっ、もう一回書かなきゃいけないの。

あからさまに嫌な顔をしていたのか、わざわざ書類をこちらに渡してくる。

「こちらとしては残念だが、再提出をさせることはない。安心しろ、これは感想文とは別件だ」

「部活動申請書？」

渡された書類をよく見てみると。すでに部活動名に、奉仕部の名前が書かれている。部長の欄には、女子特有の丸文字ではない、丁寧な楷書で雪ノ下の名前が書かれている。いかにも雪乃下らしく、飾っている形が一つもない綺麗な字だった。

「奉仕部の部員が三名になったが、副部長をまだ決めてないことを上から言われてな。比企谷か由比ヶ浜のどちらかにやってもらわなけ

ればならない。まぁ、社会に出たら、意味の無い肩書きなど幾らでもある。これも社会勉強だと思え」

「うげぇ……」

だから社会人にはなりたくないんだよ。役職をもらってしまったら、死ぬほど残業するんだろ。そのくせ給料は変わらないし、責任も負わされる。良いことなんて、ほとんどないな。……やはり俺には専業主夫になるしかないな。働くこと、ダメ、絶対。

副部長といっても、おそらくやることは今までと変わらないとだろう。そもそも申請関連ならば、雪ノ下が知らないうちにこなすだろう。由比ヶ浜なら、副部長の肩書とか好きそうだ、部活の時に話をしてみるか。

それで平塚先生の用事は終わったらしい。平塚先生は机の上に置いてあった、ビニール袋から焼肉弁当とコーラを取り出し始まる。……男前すぎて、自然と涙がこぼれてくる。

壁に掛かっていた時計を見ると、昼休み後の五限までにはまだ時間がある。まぁ教室で寝ていれば、簡単に潰せる程度の時間だ。

ちなみに、ぼっちで最も必要なスキルは、体内時計のみで起きることである。これがなければ移動教室や体育の時に遅刻することになる。つまりぼっちは、自己管理の能力が高いということである。故に、ぼっちとは世界で最も、己と戦っている生き物と言えるだろう。……あまり敵がいないしな。

「比企谷君。携帯電話を落としたよ」

職員室を出る直前で、知らない声が聞こえた。というか今、俺の名

前言ったのか。見知らぬ他人に声をかけられるとは、ステルスヒッキーの名が廃るな。麻雀をやったら、簡単に振り込みそうだ。

振り返ると、やはり見知らぬ女子が俺のスマホを持っている。というかスゲーこっちの目を見ている。何なの？　好きになりそうだから、やめて下さい。

肩まで軽くかかる位の、ふっくらとしたショートカットに、整った顔立ち。雪ノ下とは正反対で、見るからにこちらを和ませるような雰囲気を持っている。全く着崩していない制服もその要因の一つだろう。何より、服の上からでもはっきりとその大きさが分かる胸が素晴らしい。巨乳というと、多少形が悪いイメージがついていたが、むしろ印象としては全く逆であった。もしかしたら、この世にブラジャーなんて必要ないんじゃないのだろうか。どうしても必要な時には、この僕が支えれば問題な・・・・・・。

・・・・・とてつもない変態の電波を、受信してしまったらしい。一瞬意識が飛んでしまっていた。

「あ、ありがとうございましゅ」

スマホを渡される時に、一瞬だけ手に振れてしまい、驚いた拍子に噛んでしまった。本気で恥ずかしくて、顔を見れない。

「今度は気を付けてね」

その人は優しく言うと、平塚先生の所へ向かっていってしまった。向こうが全く気にしていないことが、余計に悲しい。

「おぉ、羽川か。借家の方は見つかったのか？」

「はい。なんとか落ち着くことができました。何日間か休んでしまって、申し訳ございません」

そんな会話を聞きながら、俺は職員室を後にしたのだった。どうやら、恋というのは簡単には生まれないらしい。

ゆきのフォックス　其之弐

九月に入ったからといって、奉仕部の活動内容が特に変わるわけではない。俺と雪乃下は読書をし、由比ヶ浜は携帯をいじりながら、時折雪ノ下に話かけている。その度に雪ノ下は一言、二言返事をしているものの、その手に持った本を閉じる素振りをみせなかった。

約一ヶ月、留守にしていた部室は思ったよりも広く、物寂しさを感じさせる。一学期のように、三人で同じ机を共有しているはずなのに、俺たちを隔てている距離は、それまでよりもずっと遠くに感じる。

窓から入ってくる夕陽が、部室を茜色に染めていく。普段、日が当たるのを避けて、窓から離れて座っている俺であるが、既に太陽が沈みかけている為に、窓際から離れていても嫌でも太陽の光に晒されてしまう。幾ら目が腐っていると、皮肉混じりで評価される俺でも、日光を受けたからといって、ダメージを負うわけではない。俺は吸血鬼ではないのだから。つーか吸血鬼になったら、朝のプリキュアが凄い見辛くなるだろうが。

対して雪ノ下は窓に背を向け、太陽を背中にした形で座っている。夕陽を浴びた雪ノ下の髪は、いつもの艶やかな黒髪から狐色へと変化をしている。雪ノ下のその姿は、背中から差す光もあって神聖さすら感じさせる。

いや、人は完全ではなく、神様でもないのだから、誰かに神聖さなど求めてはいけない。そのようにして俺は、これまでも、そして今もまちがえ続けているのだ。

既に季節が秋に入ったのだろうか、窓から入ってくる風は思いの外涼しく、半袖の夏服には少し肌寒かった。というか夕陽を浴びているのに、涼しいと感じるのは、どこか背反しているように思える。夕陽

に涼しいという意味はないが、どこか暖かい意味をこちらで解釈してしまうからだろうか。

由比ヶ浜も俺と同じく少し寒かったのか、小さなくしゃみを一つした。

「なんか八月に比べると、一気に寒くなったねー」

「まぁ、秋だからな……」

「そうね……」

由比ヶ浜が投げかけた言葉が、上滑りをしていく。由比ヶ浜は多少うろたえた後、「窓締めていい？」と一言確認をとり、俺と雪ノ下が頷くのを見ると、静かに窓を閉めた。

窓を閉めると、遠くに聞こえていた運動部の掛け声が消え、教室の中がさらに静かになる。雪ノ下が紙をめくる音だけが響き、よく分からない緊張感がさらに増していく。

静かになりすぎて、逆に集中できなくなってしまった。気分転換に宿題をやろうと、重い通学バックを漁ると、昼休みに平塚先生に渡された申請届けが目に入った。

「平塚先生から、奉仕部の副部長を決めて欲しいと言われてだが……」

「そういえば、決めていなかったわね。でも比企谷君はどうせやらないのでしょう？　役職なんて、専業主夫希望のあなたには必要ないのだから」

「何を言うか。役職だけもらって、ただで給料貰うなんて実に俺好み

だ」

「それは、只の給料泥棒じゃないのかしら？」

そう言われるとそうだった。流石に全く働かないで、給料を貰うのは気が引ける。それはむしろ、ヒモの所行である。俺は家事くらいはやるからな。働きたくはないが、専業主夫という仕事には就きたい俺である。矛盾をしているとは、言ってはいけない。

「ヒッキーかあたしが、やるわけだよね。あたしやってもいいよ！ヒッキーどうせやらないでしょ？」

雪ノ下と由比ヶ浜が、俺をどう見ているかが良く分かった。

「期待してもらえなければ、別にいいぞ。特にやることないだろうし」

雪ノ下が、いつの間にか読書の手を止めて、こちらをじっと見ていた。一応奉仕部に関わることだろうか、真剣に俺が副部長になることを検討しているのだろうか。

「あなたはむしろ、期待しない位なら始めからやらせなければいい、という立場だと思ったのだけれども」

「そうだな……。期待をするってことは、相手に自分の望みを押しつけることだからな」

その言葉を言った直後、それが誰に向けて言ったのか分からなくなった。確かに雪ノ下に言ったはずなのに、不思議と自分に言葉が返ってくる。勝手に人に理想を重ねて、それとずれたことに対して、相手に失望している。それは何より、俺が唾棄すべきことではなかったのだろうか。

「でもヒッキーが副部長やってるのって、全然想像できない……」

雪ノ下とのやりとりに、不穏なものを感じたのか、由比ヶ浜が話題を逸らす。

「一応だが、俺小学校の時に学級委員やったことあるぞ」

「う、嘘だよね、ヒッキー？」

「それはあなたの空想ではなくて？」

「お前らな……。というか空想だけだったら、学級委員なんてやってないぞ。」

そう言った後、

「あれは小学校四年の時だな。ちょうどクラスにSさんっていうスゲー可愛い子がいたんだよ。」

「その時点で、結末が見えるわね」

雪乃ノ下が、何か言ったが気にしない。

「その子が丁度、学年の始めに隣の席でな、一学期の学級委員を決めるときに、一緒にやろうって誘われたんだよ。その時は俺も子供だったから、俺のことが好きだけど、その事を言えないからせめて一緒に居たい、と勘違いしていたんだよ」

「それで、今回のオチは？」

「仕事を全部押しつけられた・・・・・・。Ｓさん（仮名）はきっといい悪女になるだろう」

三人の間を沈黙が支配する。由比ヶ浜の同情するような視線が、俺の古傷をさらにえぐる。久しぶりに胃が痛くなった。

「そ、そういえば、そろそろ陽が落ちてきたねー」

流石にいたたまれなくなったのか、由比ヶ浜がフォローを入れる。

「そうね。そろそろ終わりにしましょうか。副部長の件は急ぎではないでしょうし、また明日にということにしましょう」

雪ノ下はそういうと、持っていた文庫本をバッグにしまい始める。こいつ、帰る準備をするまでが異様に早いな。由比ヶ浜も一瞬ぼうっとした後、雪ノ下に続き帰り支度の用意をする。

「では、さようなら」

「じゃあね、ヒッキー。また明日」

そういって、二人は順々に部室を出ていく。その返事に俺は「おう……」としか言うことができかった。他に言うべき言葉はなかったと考えてみるが、その言葉を見つけることはできなかった。

一人になった部室は、俺が昔から馴染んでいた風景にも関わらず、どこかもの寂しく、俺はすぐに戸締まりだけをして、教室を後にした。

ゆきのフォックス　其之惨

一体いつから、移動教室ではないと錯覚していた？

「なん、だと……!?」

昼休み。いつものように、いつもの如くぼっち飯を堪能し、午後の授業開始五分前に戻ると、黒板に『生物室へ』という文字が書かれていた。無駄に字が綺麗なのが腹が立つ。

教室には案の定、誰一人いない。廊下を通る他のクラスの奴らが俺を見て、「あいつ、一人取り残されてやんの」とか言って、笑っているのが想像できる。なぜなら逆の立場の場合、俺が笑ってやるからだ。

急ぎで準備をし、生物室に向かう。ここで走ると、急いでいることが丸分かりのため、早歩きで行く。ぼっちとはいえ、マナーを守る比企谷八幡である。本当に守っているのは、俺の体裁な気がするが……。

「比企谷君、少し時間をもらってもいいかな」

俺がそろそろ、音を殺して歩く癖を身につけそうな時に、正面から呼びかけられる。この程度で声を掛けられるようでは、殺し屋一家になるのは無理そうだった。

昨日、職員室で会った女子がこちらを手招きしている。顔なじみの無い人に、名前を正しく呼ばれるのは久しぶりだった。これで相手がデスノートを持っていたら、生殺与奪の権を握られたことになる。今度からできる限り、顔を見せずに行動してみよう。

改めて見ると、ネクタイの色が上級生のものであった。つまり俺の

一学年上ということになる。まぁ雰囲気からして、同い年だとは思っていなかったが……。

「どうしたの?、変な顔をして。急いでいるようだし、手短に済ませるね」

「あ、はい」

職員室で会った時と同じく、どもってしまった。

「奉仕部って、今日も活動する予定なのかな?」

「やっていますよ。別に聞かなくても、いつでもやっているんで、用があるなら、適当に来てくれればいいです」

そう言うと先輩は、納得したように頷く。この反応からすると、確認の意味で聞いたのだろう。

「ありがとう。生物だからといって、手を抜かないようにね。教科書はしっかりと持ち歩くこと!」

先輩は丁寧にお辞儀をした後、忠告をし、て教室に戻っていってしまった。

時計を見ると、授業開始まで残り三分である。今からならば、授業にはぎりぎり間に合うだろう。

「あれっ、なんであの人、俺の次の授業知っているんだ?」

手持ちを見ても、表紙に何も書いていない大学ノートと筆記用具しかない。教科書はどうせ実験だろうと判断して、持ってきていない。

実験じゃなかったら寝るだけだ。

よく考えたら、俺が奉仕部ってことも伝えていない。この学校で、奉仕部の存在を知っているだけで希少なのに、俺がいることを知っているなんて、将来ＵＭＡでも見つけそうだな。

そんなことを思いながら、俺は人が少なくなっていった廊下を突き進んだ。

そして放課後、いつもの様に各々過ごしていると、扉をノックする音が聞こえる。

そういえば、二学期に入ってから初めての来客のような気がする。気がするというか、確実にそうだろう。そう思うと、なかなか感慨深くも……ないな。相談事があるということは、要するに厄介事を持ち込まれるということだし。何事平和が一番。ラブ＆ピース！。

「……どうぞ」

雪ノ下が、凛とした声で答える。

「失礼する」と返事をした後、扉が開かれ、男子生徒が部室に入って来た。

男にしては、髪が制服の襟足まで伸びている。どこか寡黙な雰囲気を纏っていて、話しかけるのを躊躇わせる印象をこちらに与える。

なるほど、この人をロールモデルにすればいいのか。ぼっちに寡黙という要素を加えて、孤高の要素を高めれば、俺に話しかける奴はい

なくなる。ちなみに、ぼっちにおける称号で最も評価が低いのが「孤独」、最も評価が高いのが「孤高」である。違いは負の意味でぼっちか、正の意味でぼっちかによる。

「僕は三年生の阿良々木暦だ。漢字は阿吽の阿に、良いを重ねて、若木の木に、季節の暦だ」

なかなか分かりづらい例えをする人だ。由比ヶ浜が「あ、うん？」などと、理解しているのだか、していないのか分からない言葉を発した。

流石に雪ノ下はすぐに、漢字が当てはまたのだろう。特に臆することなく対応をしていく。

「阿良々木先輩ですね。私は、奉仕部の代表の雪ノ下と申します。何かご用でしょうか？」

「あぁ」

阿良々木先輩は肯定する。

「頼みたいことというか、手を貸して欲しいことがあるんだ。羽川に聞いた所、ここはそういう所なのだろう？」

「ええ。しかし、先輩を全面的に助ける訳ではありません。迷える人を案内するのではなく、道を教えるのが、私たちの出来ることです」

「それは承知している。知人の言葉を借りることになるが、人は一人で勝手に助かるだけだからな。それにそこまでの事を頼むつもりはない」

阿良々木先輩は雪ノ下の辛辣な言葉に対して、そう返した。一人勝

手に助かるだけか……。確かにその通りだ。人は究極的には一人なのだから、自分で助からなければならない。誰かに助けてもらう事を期待して、頼って、依存してしまったら、きっと何も成し得なくなってしまうのだろう。人に頼るということは、それほどの危険性がある。だからこそ、自分で助からなければいけないのだ。

「少し調べて欲しいことがあるんだ」

そんな前置きをしてから、

「二年生のあいだで、変なおまじないであったり、人間関係を悪くする噂みたいなものって、流行っていたりしてないか？」

「噂かぁ……？　一学期の時には一回あったけど、あれはもう解決したし……」

由比ヶ浜は素直に、依頼について考えているようだった。こいつは根がいい奴だから、会話の裏表を追求せずに、力になろうとしている。

雪ノ下は、その点について懐疑的である。まぁ他人に使われる訳だから、それは知るべき情報だろう。全てを受け入れていたらキリがないからこそ、やれることに関してはこちらで吟味する必要がある。

「調べることは可能ですが、その理由をお聞きしてもよろしいですか？」

それは俺も気になった。阿良々木先輩は三年生だから、三年生のことを気にするのは分かるが、なぜ二年生なのか、そしてなぜ一年を今回の調査に含めないのか、分からない。

「それはもちろんだ。話が変わって悪いんだが、六月くらいに、中学生

の間でおまじないが流行ったのは知っているか？」

雪ノ下と由比ヶ浜が首を振る。俺も記憶を探ってみると、そういえば小町がそんなことを言っていた。

「中学生の妹が、その話をしていました。別の中学だけど、人間関係を悪くするおまじないが流行ったって。その一環で、お金を取られた中学生もいるとか、なんとか。なんか中学生の元締めのファイヤーシスターズ？が原因を探っていたそうですが」

その瞬間、阿良々木先輩が居心地を悪そうにした。何か不適切なことをいったのだろうか。

「そうだ。幸い生死に関わるようなことは、僕の知る限り一つで、それも既に解決はしているんだが……。さっき君がお金を取られた子がいるって言った通り、この事件というか事態の首謀者は詐欺師で、おまじないを解呪する方法などといって、金銭を要求していたんだ」

そんなことがあったのか。小町の奴、その後何も言わなかったから気にしなかったが、かなりでかい問題になっているじゃねぇか。

「その詐欺師自体夏休みの始めには、この街から出ていったんだが、この前一時帰省みたいな形で、少しだけ戻ってきてな」

「つまり阿良々木先輩は、その詐欺師がまた何か仕掛けを打っていないか調べて欲しい、ということですね」

おそらく阿良々木先輩が続けようとした言葉を、雪ノ下が先んじる。

「しかし、なぜ二年生だけなのでしょうか？　三年生と一年生には、聞

かなくてもよろしいのですか？」

「その二学年は、別の人間に任せている。二年生にしても、知り合いがいないことでもないんだが、立場的に調べさせるのが、難しいというか。できる限り詐欺師には遠ざけたいんだ。あいつとあの詐欺師はふとしたことで繋がりそうでだから、念には念をということで。あぁ、だからと言って、君らに何があっても言っているわけではない。これはどちらかというと相性の問題だ。ここの部活は二年生だけだし、交友関係が広い人もいると羽川に聞いて、頼みに来たという次第だ」

相性というなら、この部活もそこまで良いとは思えないが……言葉にはしないことにする。なんせ三分の二が友達いないからな。

雪ノ下が俺と由比ヶ浜に目配せをする。俺は相談を受けることは問題ない。由比ヶ浜も特に異論はなかったのか、二人で雪ノ下に対して頷く。

「分かりました。お受けします。調べた結果はどのようにして、お知らせすればよろしいでしょうか？」

「一週間後、またここにお邪魔するよ。何も出てこないなら、それが一番都合がいい」

「ではまた来週、お越し下さい」

雪ノ下がそう言うと。

「あぁ。丸投げの形になってしまって、申し訳ない。よろしく頼む」

そんな挨拶をして、阿良々木先輩は教室を後にした。

ゆきのフォックス　其之肆

阿良々木先輩の依頼に対して、俺たちの取り組み方は、各々で調べるということだった。由比ヶ浜の交友関係は広いが、雪乃下の所属している国際教養科までには届かないため、雪乃下が単独で調べる必要が出てきた。

俺については、ほ、ほらあれだよ。由比ヶ浜は友達が多い分主観的に物事をみてしまうから、主観的によるデータの偏りを防ぐために行動する、みたいな。やはり主観と客観、両者合わせて分析しないと。そもそも二人が同じクラスだから、母集団に対して、対象者の偏りが反映されてないから、学年の傾向を果たして限密の調査することが難しい。よって正しい結論に結びつかないというか……。

閑話休題。

この方針について、誰も異論がでることはなく、すんなりと決まった。俺も雪ノ下も、単独で動くことには慣れているし、さっきの話は冗談だとしても、幅広く調べることは必要だ。由比ヶ浜はこのやり方については反対をするかとおもったが、しなかった。ただその案が雪ノ下の口から出て来たときに、本当に少しだけ、泣きそうな表情をしただけだった。雪ノ下は、由比ヶ浜がそんな顔をしたことを知らない。雪ノ下は提案するときに、俺と由比ヶ浜の間の空間を見て話していたから、表情までは把握していないだろう。

本当に効率がいいのは、三人の適材適所で調べる領域を分担することだ。結局三人ばらばらに動いても、結果的に分担することにはなるのだろうが、それでも得られる結果は、最良よりも遙かに劣るだろう。最初から区分を分けると、範囲を指定せずに闇雲に調べるのでは効率が段違いだ。しかし、俺たちはそれを理解しながら、この方法を選択した。俺たちは互いのことを理解していない。だからこそ、最良のや

り方は、最も非効率なのだ。

何事も最初が大事とよく言われる。その通り世の中は初めてのものに、やたらと価値を付けたがる。初詣、初鰹、初牛、初婚。……なんか最後だけ生々しくなってしまった。つまり初めてやることには、次回以降よりも何倍も価値があるということだ。「私、初めてだから……」なんて、女子から恥ずかしそうに言われたら、人類の半数が喜ぶのもの具体例の一つだ。

だからこそ、俺が初めて告白をしたことも、今となっては貴重な甘酸っぱい思い出として、語ることができるだろう。いや、やっぱ無理だ。今軽く思い出しただけでも、吐き気がする。

話が逸れた。つまり今回の調査にしても、俺がいる二年F組を最初にすれば、他の何件かよりもよっぽど価値があることになる。別に他のクラスに行くのが、面倒くさい訳ではない。

ということで授業の合間の休み時間。俺はいつものように机に突っ伏していた。いつもと違うのは、目を醒まして、周りの会話を聞いていることだ。自らの視覚を封じて、聴覚を発達させる、まるで「るろうに剣心」の宇水さんになった気分だ。

由比ヶ浜は、変なおまじないが流行っていないかを、それとなく聞いて回ると言っていたが、俺のアプローチは違う。俺は人間関係に注目する。それまで仲の良いグループが喧嘩しているだとか、どこか距離を取っているとか、陰口を積極的に言っているだとか、そういう事例が多すぎるかどうかをまず確認する。その後、その現象が意図的であるかどうかを調べたほうが合理的だ。

耳を澄ませていても、特にそれらしい会話は聞こえてこない。聞こえてくるのは、「カントリーロード」だけだった。これは俺の脳内から流れてきている……。

まぁそもそも、現状で問題が発生している訳ではないしな。ないものは見つからないということだ。

「ヒッキー。ちゃんと調べてる？」

授業を挟み、次の休み時間の同じようにしていると、後方から声をかけられる。

五分くらい目を閉じていたせいか、やたら日の光が眩しい。目を細めながら振り返ると、由比ヶ浜の顔が近くにあり、目が合う。

「ちょっ！ヒ、ヒッキー。ち、近い……」

「お、おぅ……、悪い」

由比ヶ浜は頬を赤らめながら、俺から距離を取る。ちなみに俺の心臓はバクバクだった。女子とこんなに顔が近くになったのは、戸塚以来だ。……どこかおかしい気がするが、何も思い当たらない。

葉山たちの方に顔を向けると、葉山がサッカー部のマネージャーと話しているとこだった。こういう時に三浦がどこにもいないのが、少し怖い。おそらく真面目な話をしているから、配慮をして席を外していると信じたい。由比ヶ浜は、この間を見計らってこちらに来たのだろう。

「さっきからずっと、突っ伏しているだけじゃん！」

「何を言うか、俺くらいになると一を知り、十を知ることなんて、朝飯前だ。だからこそ、一を一生懸命調べているんだよ」

「だったら十を知って、百を知ってよ！」

由比ヶ浜にうまく返されてしまった。普段こういうやり取りでは、俺が丸め込むことが多いため、割と新鮮な気持ちになる。

「中二とか、ヒッキーしか相手にできないんだから、ヒッキーか聞きにいってよ」

「材木座かぁー。あいつも友達いねぇしな」

高校二年生にも関わらず、由比ヶ浜に中二と呼ばれている人物とは材木座である。

名前だけ見ると、第一次産業に引き取られそうな名前をしているが、実態はただのオタクであり、中二病だ。「私は総てを愛している」とか宣って、何百万の戦死者を率い、破壊の慕情を振りまきながら、万物を灰燼にする、みたいな物語が大好きなのである。やだ、かっこい……。これはどちらかというと、厨二病と書くほうが近いな。

「でも阿良々木先輩って、思ったより怖くなかったね」

「お前、あの人のこと知ってるのか？」

「結構有名だよ、阿良々木先輩。授業さぼったり、テストも欠席したりしてるんだって。それで時々生傷とかが付いてたこともあるから、不良じゃないかって」

あの人そんなことしていたのか。意外と危ないことしているんだ

な。しかし不良なんて言葉も、なかなか聞かないな。どっちかっていうと、今はチャラ男だし。汎用型戸部、みたいな感じで。

「『不動の寡黙』って言われているらしいよ」

あの人、そんな二つ名があるのかよ。

「だから、どこかとの抗争の解決とか、そういうのを想像しちゃった」

「それは漫画の読みすぎだ」

「ヒ、ヒッキーに言われたくないなぁ。小町ちゃんが、ヒッキーが日曜の朝からプリキュア見るのをやめさせたいって言ってたよ」

「バカお前、プリキュアはいいんだよ。誰だってプリキュアを見て育つ訳だ。教育の教科書と言ってもいい。だからこそ、俺はその教科書をいつまでも大切にして、常に宝物として眺めているんだよ」

「ごめん、ヒッキー、まじキモい」

どうにかして、由比ヶ浜にプリキュアの良さを刷り込もうかと考えていると、由比ヶ浜が「じゃあ、また部活でね」と言ってくる。どうやら葉山の用事が済んだらしい、どこに居たのか全く分からなかった三浦が、いつの間にか葉山の近くにいる。あいつ忍者かよ。

由比ヶ浜が去っていった後も、突っ伏して会話を聞いていたが、特に有益な情報は得られなかった。

そんな事を続けて二日、昼休みに、余所のクラス近くの会話も盗み

聞きをしていたが、特に変な噂は流れていなかった。悪口なら多少は聞いたが、意図的なものではなく、仲良しグループの中の一人がいなくなった時に、

「あいつ、うざくね」

という類のものだった。つくづくぼっちでよかったと思う。

放課後、奉仕部の部室へ行くと誰もいなかった。どうやら俺が一番早く着いたらしい。といっても由比ヶ浜は掃除当番だったので、俺よりも遅いのは当然だ。おそらく雪ノ下も同様の理由だろう。

ところが、由比ヶ浜が来て幾ばくかしても、雪ノ下は来ない。由比ヶ浜が雪ノ下にメールで連絡を取ると、

『ごめんなさい。今日は体調不良で学校を休んでいるの』

という返事が来た。

「どうしよう。ゆきのんの家にお見舞い行ったほうがいいかな？」

「やめとけ、あいつは自分の弱っている所を見られるのが嫌なタイプだからな。明日には学校に来るだろう」

そう言って、いつもの様に読書用の本を開いて、どっかりと構える。由比ヶ浜は多少納得いかない顔をしたものの、雪ノ下に返信をするといった後、携帯をずっといじっていた。

ところが雪ノ下は次の日も休み、そして二日後の金曜日も学校を休んだのだった。

ゆきのフォックス　其之伍

流石に三日目も学校を休むとなると、由比ヶ浜がかなり心配をし出した。雪ノ下には、定期的にメールをしているそうだが、雪ノ下は体調が悪いと一点張りらしい。

国語の授業の後、平塚先生に呼び出される。

「雪ノ下が学校を休んでいるのは、知っているだろう？」

「えぇ。あいつが三日間も休んでいるんで、由比ヶ浜が心配をしています」

「君は心配をしていないのか？　その言い方は、いささか冷たく聞こえるぞ」

「別に、心配していない訳ではないです。ただ雪ノ下の場合、殺しても死にそうにないから、心配をするだけ無駄というか……、そんな感じです」

平塚先生は一つため息をつく。その表情を見ると、俺に対してあきれているような様子であった。

「君は、本当に捻くれているな……。自覚がないようだから言っておくが、その感情は歪ながらも、雪ノ下への信頼に他ならないよ」

信頼……か。確かに俺は、雪ノ下に対して一定の評価をしている。あいつは、本来ならば誰もが嘘や欺瞞で覆い隠してしまう事実に、たった一人で向き合っていたのだ。建前や世辞で言葉を飾らずに、正しく生きてきたのが雪ノ下だ。だから彼女は今も一人で生きている。

色々なものを剥き出しでいるからこそ、世の中が生きづらくなってしまう。

だからこそ俺は……。そこで思考は途切れる。

「その雪ノ下の件だが……、見舞いも兼ねて、溜まっているプリントを届けてくれないだろうか？」

「雪ノ下が俺に、見舞いをして欲しいとは思いませんけどね……」

そもそも俺は、雪ノ下の住んでいる場所を知らない。見舞いに行く、行かないではなく、そもそも行くことができないのだ。

「別に君に行けと、行っている訳ではない。由比ヶ浜でも良い。ただ、君たち二人が適していると判断したからこそ、頼んでいるわけだ」

平塚先生は、こちらの目を見て、はっきと伝える。平塚先生は、普段はとっつきやすい人だが、時々こんな風に大人になるから、カッコいいし逆らえない。

「……分かりました。由比ヶ浜に相談してみます」

おそらく、由比ヶ浜は二つ返事で了解するだろう。わざわざ俺が動く必要がないなら、由比ヶ浜に任せるとしよう。

放課後、由比ヶ浜は俺の予想通り、雪ノ下のお見舞いへと行った。奉仕部の活動は、部員の二人が部活を休むのであれば必然的に休止になる。本来なら家に帰って、アニメの再放送を見るはずだったが、珍しく放課後に予定が入った

帰りのＬＨＲが終わると当時に一件のメールが俺の携帯電話へ入った。俺の電話帳の登録人数は五人もいない。小町とアマゾンを除けば、メールをする人間はさらに限られてくる。案の状というか、やはりメールアドレスは知らないアドレスからだった。スパムかと思って開くと、

『雪ノ下陽乃です。今日の午後五時に会いたいのですが、ご都合はよろしいでしょうか？　おそらく比企谷君の場合、空いているでしょうが、念のため確認させていただきます』

アポを取るついでに、罵倒をされた。しかも何で俺のアドレス知ってんだよ。なんか最近俺の個人情報が流出している気がする。顔なじみのない人に声をかけられるし。

本気で断ろうか考えたが、陽乃さんのメールがあまりにも丁寧すぎたのが気になった。遊び心に溢れているアドレスと、本文の文章がかみ合っていない。陽乃さんの性格からすれば由比ヶ浜みたいな、顔文字をふんだんに使ったメールの気もするが……。

雪ノ下が休んでいることも、多少は気になった。メールの通り、どうせ予定は入っていないのだから、放課後の暇つぶしにはちょうどいい。キテレツの再放送だったらいつでも見られる。

こちらから了解の旨と、待ち合わせの指定をすると、すぐに返信が来た。どうやら大丈夫だったらしい。大学生も割と暇なんだなと思ったが、よく考えれば、大学はまだ夏休みだ。流石人生のモラトリアム期間である。

そういうわけで、俺は学校から少し離れた、座席の大部分が喫煙で

きる喫茶店に向かっている。できる限り人に見られたくない為に、高校生が近づかない店を選んだわけである。

五時丁度に喫茶店へ行くと、陽乃さんは既に入り口から一番遠い席にいた。時間つぶしに本を読んでいるようで、俺が近づいても全く気づく素振りを見せない。

陽乃さんはいつも笑っている印象が強いた為あまり思わないが、こんな風に集中して本を読んでいるとやはり、雪ノ下と姉妹だということを感じさせる。

俺が席に座ると、さすがに気づいたのか顔を上げてこちらを見る。

「やぁ、比企谷君。こんにちは」

既に注文したのか、ブレンドコーヒーが陽乃さんの手元に置いてある。雪ノ下は紅茶を好んでいるが、陽乃さんはコーヒーのほうが好きなのだろうか。中身を覗いて見ると、ブラックだった。実に陽乃さんに、似合っている。

「どうも……。わざわざ呼び出すなんて、どうかしたんですか？」

すぐに、注文を取りにきたので、同じくブレンドコーヒーを頼む。店内に漂っている煙草の香りが鼻腔を軽く刺激して、少し気持ちが悪い。て自分で場所をしていなんだが、あまり長居したい場所ではなかった。

「いやいや、比企谷君。私を見てどこか変な所はない？」

そう言われて、陽乃さんをまじまじと見る。前に会った時のような露出が高い服装ではなく、清楚なサマードレスを着ていた。化粧がい

つもより薄い気がするが、それを言って良いのだろうか。

「ごめん……あまり腐った目で見られると、気持ち悪いから止めてくれないかな」

「あんたが、見ろって言ったんだろうが！」

「その目の腐り具合は、どうやったって直せないから言っちゃいけなかったね……」

「何で俺、わざわざ呼ばれたのに罵倒されているんですかね……」

「ごめん、ごめん。目が腐っている部分以外は冗談だから、安心していいよ」

フォローでさらに追い打ちをかけられた。しかもフォローになってねぇし。しかし、おかしな所なら、一つだけ思い当たっている。

「俺からすると、変な部分がなくなったって感じなんですけどね。いつもの強化外骨格はどこかに落としたんですか？」

メールの時点で既に違和感があったが、直に会って見るとすぐに分かった、俺との距離感然り、化粧の仕方然りと陽乃さんが持っている人間関係における処世術が全く使われていなかった。

なにより、以前は常に絶やされなかった人懐っこい笑顔が、雪ノ下の様に落ち着いた表情へと変わっている。

「そうなの。一昨日くらいからかな。愛想笑いが上手くいかなくてね。変だなって思いながら過ごしたんだけど、気づくと薄化粧になっているし、正論をずばずば言うようになったりしてね。友達から訝し

がられているの。まるで狐に憑かれたみたいだって」

そう言って、陽乃さんは、スプーンでコーヒーをかき混ぜながら、不機嫌そうに口をすぼめる。

「神様のイタズラじゃないですか？　あまり八方美人になるなっていう」

「そうかもね。ちょうどこうなる前の晩に、夢を見たの」

「まさか本当に神様のお告げあったって、言うんじゃないですよね。どんな受胎告知ですか」

「お告げって訳じゃないけどね。真っ白で、雪の様な狐においかけられた夢を見ただけ。最終的に捕まった所で目を覚ましたんだけれど」

……狐か。稲荷信仰なんてあるくらいだから、神様であってもおかしくない。

「そして、朝起きたらこうなっていたの。不思議だと思わない？」

何か嫌な予感がする。あの陽乃さんが、ただ俺に愚痴を聞かせたいだけな訳がない。少なくとも、俺に何かさせる為に呼んだのだろう。

「でね、私はこの件に、雪乃ちゃんが関係していると睨んでいるの。雪乃ちゃん、一昨日から休んでいるんでしょう？」

どうして知っているんですか、という言葉を飲み込む。そのことは追求しても意味がない。問題は雪ノ下のことだ。言われてみれば、確かにそうだ。片や妹が体調を崩し、片や姉が不可思議なことに巻き込まれている。これは偶然か……？

「だったら陽乃さんが雪ノ下の見舞いに、行ってみればいいじゃないですか？」

雪ノ下ならば、今の陽乃さんの状態を見ても、そこまで違和感名なく対応できるだろう。

しかし、陽乃さんは大きな溜息をつく。

「いやいや。比企谷君なら私の言いたいことが、分かると思うんだけどね」

分かる。だが、なぜ俺がやらなければいけないのかが、分からない。

「葉山には、頼まないんですか？」

「隼人はダメかな。あの子は道徳的に縛られすぎて、こういう時には向かない。だからこそ隼人は雪乃ちゃんには近づけないし、近づいても燃えつきちゃう」

イカロスの羽の様にね。陽乃さんはそうつけ加えた。

葉山。葉山隼人。二年Ｆ組のトップカーストに位置する、サーカー部のイケメン。確かにあいつは集団の中心にいるせいで、誰よりも道徳という社会の規則に縛られている。みんなが幸福になる方法を信じて疑わない故に、とれる行動に限りがある。

「だからね。私を助けるつもりは、あまりなくても良いから、雪乃ちゃんの手伝いをするつもりで、軽く受けてくれないかな」

そう言って陽乃さんは、困ったように微笑んだ。その笑顔はいつも

陽乃さんが見せる完璧な笑顔とは違ったが、驚くほど綺麗だった。成る程、魅了されるというのはこういうことか。

その後、陽乃さんと別れ、帰り道を一人で歩く。時計は既に六時半を示している。夕食の時間に入っているせいか、いろいろな料理の香りが路上を埋め尽くして、どこかカオスを醸し出していた。

陽乃さんとはその後、狐のことについては話さずに、宮沢賢治や中原中也の話をしていただけだった。だから俺は、陽乃さんの依頼に返事をせずに帰ったし、陽乃さんも答えを求めなった。。

どうしようかと、考えていると携帯電話が震える。確認をすると由比ヶ浜からメールが来ていた。

内容はシンプルに一文と写真が一枚。

『どうしよう。ゆきのんが狐耳になっちゃった!』

添付された写真を見ると、狐耳が生えた雪ノ下が、恥ずかしそうに頬を赤らめ、少し上目遣いをしていた。

何これ?。すげぇ萌える。

ゆきのフォックス　其之陸

雪ノ下の件については、明日由比ヶ浜と、雪ノ下のマンションを訪問することで落ち着いた。事態が常識ことになると、由比ヶ浜一人に任せるのは荷が重いからだ。結局、陽乃さんの狙い通りに動いている所が、とこか仕組まれている気がしてならない。

にしても、狐耳か……。陽乃さんは夢で、白い狐に追いかけられたと言っていたが、やはり雪ノ下の体調不良と、陽乃さんの外面の喪失は関係しているのだろうか。

そんな事を考えながら歩いていたら、腕が軽く何かと衝突する。どうやら誰かにぶつかったらしい。

「すいません」

そう言って、衝撃の方向に顔を向けると、随分とエキセントリックな格好をしたお姉さんが、こちらを見ていた。

小柄な体格にも関わらず、明らかに何サイズか上のサイズの服を着ているとともに、野球帽を横にしてかぶっている。アメリカにいるストリートギャングみたいな格好だなと思う。しかしこの人は、だらしないという印象を全くこちらに与えない。整った顔立ちをしているのもあるが、何よりその超然めいた雰囲気が、そのファッションを当たり前のものとして、こちらに認識させる。

「いやいや、謝る必要はないよ。比企谷八幡くん。君が今直面している問題の事を考えれば、前方不注意になっても仕方がない」

一瞬、聞き間違えたかと思ったが、そんなことはない。確かにこの人は俺の名前を言った、それに今直面している問題とも。

「あ、あなたは、誰ですか？」

思わず声が震えてしまう。本当はさっきの発言について聞きたかったが、その衝動を押さえて尋ねる。

「そうだね。君は私のことを知らないのだから、名前を尋ねるのは当然だ。……初めまして、私は臥煙伊豆湖という」

その言い方は、まるで俺のことを知っているような言い方だった。しかし臥煙伊豆湖なんて、聞いたこともない名前だ。俺の人間関係の中だったら、聞いたことある名前の方が少ないけれども。

「では臥煙さんはどうして、俺の名前を知っているんですか？」

そう聞くと臥煙さんは、まるでそのことが、宇宙の真理であるのように応えた。

「どうして？　変な事を聞くねー君は。私は何でも知っている。猫に魅せられたあの子は、何でもは知らないと言っているけれど、私は何でも知っている」

「何でも、ですか？」

「その通り。君が入学式の日に、同じクラスの由比ヶ浜ちゃんの飼い犬を、身を挺して車から助けた事も知っているし、その車に今は同じ奉仕部の、雪ノ下雪乃ちゃんが乗っていたことも知っている。そしてそのことについて、雪ノ下ちゃんが嘘を吐いていたことに、君が幻滅していることもね」

本来だったら、見ず知らずの人の言葉なんて信用しない。親父の教

えで、美人のお姉さんに声を掛けられたらまず疑えと言われているからだ。それなのに、臥煙さんの言っていることを信じなければならない。それは、その情報は多くても奉仕部の三人しか知っていない。

あなたは何者なんですか、と言おうとした所に、臥煙さんがさらに言う。

「まぁこれは、名刺変わりと思ってくれていいよ、八幡くん。別に君をとって食おうとしている訳ではない」

そう言いながら臥煙さんは、道路に面している公園へ脚を向けた。

「立ち話もなんだろう？　ベンチに座って話でもしよう」

俺はその提案に断ることができず、臥煙さんの後を着いていった。

臥煙さんと入った公園は、滑り台とブランコにベンチが数台あるだけの、小さな公園だった。てっきり、ベンチに座るのかと思っていたが、臥煙さんはなぜか、公園の隅にこじんまりと設置されていた、ブランコに座った。ブランコなんて小学生以来だから、どこか気恥ずかしい。

臥煙さんは、ブランコで遊ぶことに全く抵抗はないのか、ブランコを漕ぎなら、星空を見上げていた。俺も同じように空を見上げてみたが、繁華街の光に浸食されているせいか、数えられる位しか、星を見ることができなかった。

「では、君の質問に答えようか」

そもそも疑問を声に出していないのだが……。それもこの人が知っていることの一つなのだろうか。

「私が何者かということだが……、私は怪異の専門家だよ」

「怪異……ですか」

怪異。怪しくて、異形もの。

俺が上手く理解していないことを察したのか、臥煙さんが続ける。

「私の未熟な後輩は妖怪変化のオーソリティーと名乗っていたし、暴力的な後輩は陰陽師と名乗っている。良く嘘を吐く後輩は、怪異など信じないスタンスだったけれどね。まぁ、そういうものだと思ってくれていい」

そう言われてようやく理解する。では雪ノ下や陽乃さんは、その怪異とやらに遭ったということだろうか。わざわざ専門家が会いに来る用件なんて、俺の周りではこのことしかない。

臥煙さんはいつの間にか、ブランコを漕ぐのを止め、腿に肘をついていた。

「どうして、俺の所に来たんですか?」

「君にアドバイスでもと思ったんだよ。現在君が直面している問題は、君一人ではなかなか解決が難しいからね。持たざるものに救いを、君たち奉仕部の考え方に則ったということさ」

「まだ俺が何かすると、決まった訳じゃないですよ」

臥煙さんがあまりにも、断定的に話すので思わず反論してしまう。

すると臥煙さんは、嫌みったらしい笑顔を浮かべた。

「私が気に食わないからといって、嘘はいけないな、八幡くん。君は雪乃ちゃんと陽乃ちゃんに起こっている現象を、見逃すことはできないよ」

「ど、どうしてそんなことが、言えるんですか？」

そう尋ねると、臥煙さんは間違って石を飲んでしまったような顔をして、大げさに驚いてみせた。

「どうして、だって？　それは君が一番良く知っているだろう、八幡くん。君が、すぐ目の前で困っている人を、見逃せるわけがないだろう」

「見逃せますよ。今までもそうやって、生きてきましたし」

「だから、嘘はいけないよ。いや不必要に自分を卑下してはいけないよ、と言うべきか」

そんなことはない。俺は自分のことを、正しく評価している。ずっと独りぼっちで居たんだ。誰も俺の事を見ないから、俺自身で自分を見つめてあげるしかなかったのだ。

「自分の人生を見つめ直してごらん。君は赤の他人の飼い犬を、自分が怪我するのにも関わらず助けただろう？　おそらく今後会うことがないだろう、小学生の為にわざわざ一芝居打ってまで、その子の取り巻く状況を変えようとしただろう？　そんなことが出来る君がどうして、半年同じ部活で過ごした仲間を見捨てるんだい？」

「それは、ただ身体が動いたからというか……」

「身体が動いた、そのことがどうしようもない程に、君の性格を表しているじゃないか。君は自分では、どうしても否定するだろうから、私が言ってあげよう」

頭がくらくらする。まるでボディーブローを何発か受けたみたいだ。公園を包んでいる闇がだんだん消えていって、視界が臥煙さんに絞られていく。

「八幡くん、君はお人好しだよ。それも人並み以上にね。君の場合、目的の設定は善良と言って良い程に正しい。ただ君は手段が他人と異なっているから、捻くれていると評価されているだけだ」

臥煙さんは優しく、包み込むように、話を続ける。

「だから別に雪乃ちゃんを助けることを、恥ずかしがらなくて良いんだよ。それは正しいのだから」

なんだ一体。この人は一体何がしたいんだ。

「おっと、話が逸れてしまったね。青少年に教えを説くなんて私も歳を取ったもんだ」

そこでようやく、金縛りが解けたかのように、身体の重荷な無くなり、視界が広がった。

「話を戻すよ。まぁアドバイスと言っても、人を紹介するだけだ」

「人ですか……」

「君も知っている人間だから安心して良い。人格面も……、まぁ基本的に大丈夫だろう」

臥煙さんは人格面の部分だけ、なぜか逡巡してから言った。

「阿良々木暦くんのことだよ。私は彼とは友達だからこよみんと呼んでいるけれどね。彼に手を貸してもらいなさい。それが君にとって最も冴えたやり方だ」

阿良々木先輩か……。あの人とは、そこまで話したわけではないが、同じ高校の人が、こんなおかしなことに足を突っ込んでいるなんて思いもしなかった。

「先輩も、臥煙さんと同じ専門家なんですか？」

「こよみんは、専門家ではないよ。専門家にするならば未熟すぎるし、本来はむしろ逆の立場にあるような人間だ」

「では何で、阿良々木先輩に任せるんですか？」

「理由は二つある。君たちの都合と、こよみんの都合。どちらから聞きたい？」

そう言って、臥煙さんはにっと笑う。どちらから聞いても、変わらない気がする。そもそも、この人が本当の事を言うとも限らない。何でも知っているからといって、常に正しいことを言うとは思えない。

「阿良々木先輩の都合からお願いします」

「これについてはシンプルだ。蛇に対抗する手段を確保させるためだよ。狐は蛇も食べるからね」

抽象的すぎて、何を言っているか分からない。これは臥煙さんが意図的に、ぼかしているのだろう。

「では、君たちの都合を話すとしよう。こちらはこよみんの事情よりも多少複雑だ」

そもそも俺たちに関わる理由があるのだろうか？　怪異なんてものに巻き込まれる以上に、考慮する事案が見当たらない。

「あまり専門家が上手く立ち回り過ぎると、君たちが怪異に引かれる可能性が出てくるのさ。……噂になってしまうからね」

臥煙さんは最後の部分だけを、俺の耳元で囁いた。吐息が耳にかかり、くすぐったい。

急いで距離を取り、抗議の意味も込めて睨みつけても、臥煙さんは茶化した笑顔を崩すことはなかった。

「噂になんて、なるんですか？」

「ことわざであるだろう。壁に耳あり、障子に目あり、とね。人の口に戸は立てられぬ、という言葉もある。つまり私たち専門家が、鮮やかに解決をしてしまえば、その話は必ず噂となって流れしまうんだ。怪異譚なんて、言ってしまえば人の噂の集まりさ。退治したというオチもついている物語は、怪異譚として完結している。噂としてはもってこいだ」

「だから、噂が噂を呼ぶということですか」

「そうそして、噂にはおかしなことが、つきものだ」

だから阿良々木先輩が手伝うと。上手く物語として語られないように、専門家ではない阿良々木先輩に役割が与えられたのか。

「だからといって、こよみんの手助けに期待するなとは、言っている訳じゃないよ。あぁ見えて彼は様々な怪異に出会っているし、オブザーバーもいる。きっと上手くやってくれるだろう」

その後、臥煙さんは話すべき事は、話したのかすぐにどこかへ行ってしまった。最後まで本当に良く分からない人だった。

一人になって、どっと疲れが出て来た。あの人とは、二度と会話をしたくない。

疲れた足を引きずりながら、家に戻ると、小町がソファーに寝ころんでいた。どうやら両親共にまだ帰ってきていないらしい。こんな時間まで働くなんて、本当に俺の親なのかと心配になる。立派な社畜じゃねぇか。

「お兄ちゃんお帰りー。なんか随分疲れてるね」

小町の声が身体に染み渡り、癒される。

「お兄ちゃんは今日だけで、一生分話したんだ。もう休んでもいいだろう？　疲れたよ、パトラッシュ……」

「だ、ダメだよ、お兄ちゃん！　今お兄ちゃんが死んだら、誰が小町を養うの？」

今の八幡的にポイントが低いぞ、とつっこむのも面倒で、俺はソファーの空いたスペースに倒れ込み、眠りについた。

ゆきのフォックス　其之漆

郊外のショッピングセンターで由比ヶ浜と合流してから、徒歩で十数分の所に雪ノ下のマンションはあった。

いかにも高級そうなマンションで、エントランスにはしっかりとした造りの、オートロックが設置されていた。重厚な扉は鎮座しているだけ、庶民の俺には威圧的に感じる。

由比ヶ浜がインターホンで呼び出すと、数秒して自動で扉が開く。何回か既に訪ねて慣れているのか、由比ヶ浜はエレベーターまで真っ直ぐに向かって、乗り込み、迷わず十五回のパネルを押した。

怪異の話は、まだ由比ヶ浜には話をしていない。これは、雪ノ下の問題なのだから、その話はまず雪ノ下に伝えるのが筋だろう。

エレベーターを降り通路を進むと、一つだけ表札が出ていないドアの前で、由比ヶ浜が立ち止まる。おそらくここが雪ノ下の部屋なのだろう。

インターホンを押すと、「はい……」と警戒した雪ノ下の声が、電子音となって発せられた。

「ゆきのん……。あたし、結衣とヒッキーだよ」

由比ヶ浜が言うと、「……少し待っててて」と返ってくる。

玄関扉が少し開き、雪ノ下が顔を覗かせる。雪ノ下の私服は夏休みに見ているが、部屋着を見るのは初めて新鮮だった。ただ、狐耳を隠しているのか、深めを白いサファリハットをかぶっていて、頭を隠し

ていた。

「いらっしゃい、由比ヶ浜さん。あと・・・・ひ、ひ、引き立て君？」

「なんで数日会ってないだけで、俺の名前忘れてんだよ……」

「ごめんなさい。あまりにも影が薄くて、つい指摘したくなったの」

「どうしてお前姉妹は、俺に謝るとみせかけて暴言を吐いてくるんだ……・」

スペックは同じくらいだと常々思っていたが、性格も割と似ているじゃねぇか。

廊下を進むと、明らかに十五畳以上あるリビングに出る。リビングからは別の部屋に繋がるとおぼしきドアが三つあった。俗に言う3ＬＤＫというやつか。二十年前のサラリーマンが見たら、むせび泣くような豪華さだな。

よく考えれば、女子の部屋に入るのは初めてだった。となると、この一歩は人類にとっては小さな一歩だが、俺にとっては偉大な一歩になるわけか。いやここは、どちらかというか雪ノ下の家であるからノーカンだ。……いや、そもそも女子の家に入るのも初めてじゃねぇか。どっちも変わらねぇ……。

しかしこの広い部屋を、雪ノ下は独りで過ごしていたのか……。四人家族が暖かく暮らす位の大きさなのに、この部屋には、雪ノ下しか住んでいない。

ソファーに雪ノ下と由比ヶ浜が座り、俺はフローリングに敷かれていた絨毯に腰を下ろした。俺の家みたいな中流家庭の絨毯とは違い、

質が高いのか、ふかふかで座り心地がいい。

「思ったより、元気そうだな」

「別にどこか、体調が悪いわけでもないもの。ただ学校に行くのが難しかっただけだわ」

それもそうだった。おかしい所はあっても、悪い所はないわけか。

「ゆきのん。狐の耳は治った？」

「残念ながら、昨日のままよ。でも大丈夫、由比ヶ浜さんの心配する所ではないわ」

「大丈夫って、どうにかできる検討でもついてるのかよ」

思わず声を荒らげてしまう。こんなおかしなことに巻き込まれて、それでも大丈夫なわけがない。

「別に、日常生活に支障はないもの。外出するにしても、今のように帽子をかぶれば問題ないわ」

「でも、ゆきのん。学校はどうするの？」

「そちらにしても、学校に申請をして、校内の着帽の許可を得るつもりよ」

雪ノ下の言っていることは、現状の問題にどう対応するかどうかだけで、解決策にはまるで言及していない。

「じゃあ、耳がそのままだったら、どうするんだよ」

「その場合は、私の父が懇意にしている病院に、頼る予定よ」

そう言って、雪ノ下は窓から見える、様々な色が混在した市街地に視線を移した。雪ノ下の横顔は、いつもと同じく、澄ました表情をしているように見える。

「……私たちにできることって、何かないかな？　小さなことでも、大丈夫だから」

「取り急ぎ、必要なことはないから安心して。特別何か必要な時には、頼るから」

雪ノ下がそう言うと、由比ヶ浜は目を潤ませて、泣きそうな表情になる。

「違うの……、ゆきのん。別に特別とか、必要とか、そういうことじゃないの……」

由比ヶ浜は雪ノ下に訴えかけるが、雪ノ下は由比ヶ浜が何を言いたいのかが理解していないらしい。雪ノ下の目には困惑の色が浮かんでいる。

俺も由比ヶ浜が何を言いたいのかが、分からない。

「あたしは小さなことでも、ゆきのんと共有をしたいんだ。嬉しいことや楽しいことは、二人で分かち合って、嫌なことや悲しいことは、二人で分担できればいいなって思ってる」

それは不可能だ。誰かの感情に、完全に同調することなんてできない。だからみんな、誰かの気持ちなんか分からないくせに、分かった

振りをして、嘘を吐きながら生きている。そして俺と雪ノ下は、そのように振る舞うことができなかった。

「それは……、難しいわね。私は人の心の機微に疎いから、喜びも悲しみも一人分しか知らないわ」

雪ノ下も俺と同じことを思ったのだろうか、そのようなことを言う。

本当に誰かの感情を理解できるなら、俺も雪ノ下、そして由比ヶ浜だって、ここにはいない。雪ノ下は女子の嫉妬にかられることもなかったし、由比ヶ浜だって、人間関係に気を遣いながら、高校生活を過ごしていなかったはずだ。

「そ、そういうことじゃ、なくって……。うー、何て言えばいいか分かんない！」

その時俺は、なんとなくだが由比ヶ浜の言いたいことが分かってしまった。しかし、それを口には出さない。これは由比ヶ浜だからこそ、届けられる言葉だ。

「あたしだって、ゆきのんやヒッキーが何考えてるか、よく分かんないし。あたしがいつも思っていることも、二人はよく知らないと思うけど……」

由比ヶ浜は続ける。

「けど、誰かのことを分かろうとしたり、困っていたら、一緒に居てあげたいとか、そういうのがあたしは大事だと思う」

由比ヶ浜は雪ノ下の手を取り、はっきりと微笑みながら伝える。

「だから、ゆきのんがどれだけ困っているか、あたしはきっと大体でしか分かんないけど、それでもゆきのんの力になりたいの」

由比ヶ浜が言っていることは、話が飛躍いるし、論理的にも反論することは、雪ノ下ならば可能だろう。しかし、雪ノ下は由比ヶ浜の言葉を飲み込んでいるだけだった。

由比ヶ浜は言っている。お互いが完全に理解することは難しくても、それでも近づこうとすることが大切だと。

「ありがとう、由比ヶ浜さん。もう少しだけ……」

そこで雪ノ下の言葉が途切れるとともに、表情が変化をする。

「いやー、やっと出てこられた。やはり人前じゃなきゃ、出てくる意味もないしね」

その言葉が雪ノ下の口から出てきたことに、気づくまでに時間がかかった。そして雪ノ下は、陽乃さんが連想させるような、人懐っこい笑顔を浮かべると。

「いえーい。初めまして。ピース、ピース」

横ピースをしながら、そんなことを言った。

……それは無表情で言わなければ、可愛くないぞ。

雪ノ下が笑顔で、「いえーい」なんて言うものだから、どういう対応

をすればいいか迷ってしまう。

由比ヶ浜を見ると、目の前に起こったことに処理が追いつかないか、

「ゆ、ゆきのんが、あさっての方向に飛んでちゃった！」

なんて意味の分からないことを口走っていた。

「おい、雪ノ下。お前どうした？」

仕方がないので俺が雪ノ下に聞くと、雪ノ下がこちらを向とともに、手を頭に持って行き、帽子を外す。すると。昨日由比ヶ浜がメールで送った写真の通り、雪ノ下の頭から狐の耳が生えていた。

「やっぱ耳は直に空気に当たらないとね。暑苦しくって耐えられないよ」」

生で見ると、狐耳がぴくぴく動いていて、嫌でもそれが生きているということを、こちらに認識させる。

「君は……、あぁ、君が比企谷君か。本当に腐ったミカンみたいな目をしているね」

「おい、人を不良生徒みたいに言うな」

というか、こいつ誰だ。本当に雪ノ下の頭がおかしくなったのか？

「ゆきのん。どしちゃったの？　変なこと言ったなら謝るから……」

由比ヶ浜もようやく、頭が回ってきたらしい、まともなことを言い始めた。

「ふうん、二人か……。人数としは少ないかなー」

雪ノ下は部屋の中の隅々まで視線を向けると、納得したようにして頷く。その表情は、以前の陽乃さんとそっくりで、こうして見ると、あの姉妹は外見も結構似ているなと場違いながら思った。

「お前は、何だ？」

「私？　私はしがない神様だよ。いえーい」

そうして雪ノ下は再び横ピースをした。

週明けの月曜日の放課後。俺と由比ヶ浜は緊張した面もちで阿良々木先輩を待っていた。

結局あの後、「もうちょっとだけ、人を連れてきてね」と言って、雪ノ下は元の人格に戻った。

ただ、それでも雪ノ下の狐耳が元に戻ることはなく、すぐに雪ノ下は、俺を睨みつけながら帽子をかぶり直した。

ことわざの様に、三人集まっても特に知恵が出てきたわけではなかったので、阿良々木先輩が解決の方法を知っていることを伝えると、由比ヶ浜がすぐに力を借りることに同意した。

雪ノ下は賛成こそしなかったものの、反対もしなかったので、月曜

日に阿良々木先輩に相談することで落ち着いた。

そして阿良々木先輩が来ることになっている今日、こうして奉仕部に俺と由比ヶ浜が並んでいる状況だった。

先週と同じように、扉をノックをする音が聞こえる。そういえば、いつも返事は雪ノ下がしていた。

「ど、どうぞ……」

由比ヶ浜が、おっかなびっくりで答える。

「失礼する」

阿良々木先輩は、部室内を見渡すと尋ねる。

「今日は雪ノ下さんは休みなのか？」

「そうです。あと少し質問をしてもいいですか？」

「質問？　別にかまわないが……」

「阿良々木先輩が怪異に良く知っているというのは本当ですか？」

そう言った瞬間、阿良々木先輩は目を細める。

「その話は、誰から情報を貰ったか聞いてもいいか？」

俺が臥煙さんに、阿良々木先輩の手を借りることを、指示されたことを伝えると、阿良々木先輩は納得をする。

「それで、雪ノ下さんは一体どういう症状なんだ？」

症状というと、病気になったみたいだな……と頭の片隅で思いながら、雪ノ下に狐耳が生えてしまったことと、突然雪ノ下がまるで別人のように喋り始めたこと、そして陽乃さんの対人用外面が消えてしまったことを伝えた。

なぜか、阿良々木先輩が狐耳の部分に過剰に反応したが、おそらく気のせいだろう。

「どうですかね。おそらくは狐に関係したものだとは思うんですけれど……」

「狐か……。狐に関する逸話は、かなりあるしな。忍はまだ、睡眠中だしな」

阿良々木先輩がぶつぶつと呟いていると、

「狐憑き。そやつは狐の神に祈り、そして取り憑かれてしまったのじゃ」

そんな美しい声がどこからか聞こえた直後、目も眩むような金髪と、黄金色の輝きをした美しい瞳をもった幼女が、阿良々木先輩の影から飛び出してきた。

ゆきのフォックス　其之捌

春休みに、阿良々木先輩は美しい吸血鬼に襲われてしまったそうだ。襲われたと言っても、取って食われた訳ではなく、阿良々木先輩自身も吸血鬼になってしまったらしい。その春休み、身の毛がよだつ体験を何度もし、何度も死んでは生き返るという地獄を経験して、なんとか人間に戻ることができたそうだ。

「だからと言って、完全な人間に戻れたわけじゃない。僕は吸血鬼もどきの人間だし、美しい鬼は今はもう、見る影もなくなってしまっている」

その美しき鬼の成れの果てが、現在阿良々木先輩の影に住んでいる幼女、忍野忍だという。

「忍……、まだ昼間だってのに、どうして出てきたんだ？」

「ロリキャラが、全く出ていないことに気付いての。このままだと、お前様のモチベーションが下がると思って、ロリ成分を補給するために儂が出てきたのじゃ」

「二言目から、僕の評判を著しく落とすようなことを、言うんじゃねぇ！」

「そういえば、元ツンデレ娘の『二言目』という曲は大変良かったの」

「それには全面的に同意したい所だが、全く関係ない話をするな」

「今気付いたんじゃが……。元ツンデレ娘というと、何故か元モーニング娘と近い字面を感じさせると思わんかの？」

「お前はもう帰れ！」

吸血鬼の割りに、随分と俗っぽいな……。しかも、思いっきり太陽の光を浴びてるし。まぁ今時の吸血鬼は大体弱点を克服しているしな。

「何この子？　超可愛いー。阿良々木先輩、この子抱いてもいいですか？」

「残念じゃが、儂の肋骨は、我が主様のものじゃ。安易に触らせることはできんの」

由比ヶ浜は阿良々木先輩を、不審そうに見つめている。いつの間にか、由比ヶ浜の手は、携帯電話を手に握りしめていた。一体どこに掛けるつもりだろうか？　まぁ警察だろう。

「い、いや。違うんだこれは。僕は忍の肋骨を、ギロみたいに弾いたりはしていない」

語るに落ちていた。あまりにも変態過ぎて、由比ヶ浜が口を閉じるのを忘れている。

「と、ところで、狐憑きとは、どんな怪異なんだ？」

あからさまに話をすり替えたが、俺も由比ヶ浜も何も言わない。この話題を掘り下げたら、もっとエグいエピソードが出てきてそうで怖かった。

「お前様……。まぁ良い。そもそも儂が出てきたのも、この件を説明するためじゃしの」

そうだった。幼女が出てきて混乱してしまったが、そもそも雪ノ下の件で、阿良々木先輩に相談をしたのだった。まさか雑談から話が進まないとは思ってもみなかった。

「読んで字の如く、狐の取り憑かれることじゃ。だがの、狐に憑依されると一言で言っても、色々あっての」

「それって、お前が吸血鬼の中でも、希少種みたいなものか？」

「少し違うわい。そもそも、江戸の頃は狐憑きとは、精神病の一種とされておっての。真面目な人間が、急に自堕落になったり、暴力的になったりすると、狐が憑いたから変になったと、理由をつけてたのじゃ」

「それは、障り猫の様な話か？　実はそいつの本性だったオチの」

「障り猫とは違うの。狐憑きの場合、本当に憑かれていたことが多いの。狐自体が意思を持つと思われていたからどうかは、分からんが」

どこか安心する。あの人懐っこさが、雪ノ下の本性だとしたら、キャラが崩壊するどころじゃないぞ。

そこで吸血鬼幼女は、咳払いを一つする。

「そして、先にも話したが、怪異の狐にも種類がある。どんな動物も善と悪の性質を持つようにの。東の国では、狐も稲荷信仰に稲荷大明神として、祭り上げられておる一方で。西の国では妖孤として、畏れられていたそうじゃの」

そういえば、おかしくなった雪ノ下は神様と自分で言っていた。

「そこの腐った男が言っていたじゃろ。別の女が、夢の中で白い狐に追われていたと。白狐といっての、稲荷信仰では幸福の象徴となして、崇められておる。おそらく、そいつが憑いたんじゃな。だから物の怪の類ではない、安心せい」

「でも、ゆきのんは今、困ってるよ？」

由比ヶ浜が尋ねる。雪ノ下は現在進行形で問題を抱えている。福をもたらすならば、困るなんてことにはならない。あと腐った男って……、海老名さんが喜びそうな名前だな。

「もう少し待っとれ。ただ神様となった狐が、若い娘に憑いたという寓話も存在する。その場合は、願いを叶える代わりに、稲荷祠の修繕や、供え物をしていうことをしたいたそうだの」

まぁ、ある種の神託じゃ――吸血鬼はそう続ける。

なら、雪ノ下は何を祈り、何を要求されていたのだろう。あいつが神に祈るほどの願いなんて、俺には全く想像できない。

「では、どうして陽乃さんは、性格を奪われたんですか？　雪ノ下に憑いたなら、陽乃さんは関係ないじゃないですか」

見た目は幼女だが、五百年ほど生きているらしいので、タメ口でいいか迷ったが、敬語で話しかける。

「そんなのは簡単じゃろう。その憑かれた奴が、奪うことを祈ったからじゃ」

そうだ、誰かが望んだのだから、結果として陽乃さんに被害が及んだ。そしてそれが、引き起こすとすれば、今のところ雪ノ下だ。しかし、そのことがにわかに信じられない。他人の足を引っ張るなんて、あいつが最も嫌悪していたはずだ。

「それで忍。狐耳を治すには、一体どうしたらいいか分かるか？」

「狐の要求をのんで、達成すればよかろう。さすれば、狐からどこかに行ってくれるぞ。儂の『心渡』で斬るのも手じゃが、……前者のほうが安全じゃろう」

まぁ、実際狐にあって見んと、これ以上は分からんの――そう言って吸血鬼幼女は、あくびをしながら、阿良々木先輩の影に戻っていった。

「悪いが、雪ノ下さんの所に連れて行ってもらってもいいか？」

呆然としている俺と由比ヶ浜に対して、阿良々木先輩はすぐにこちらに、確認を取ってきた。臥煙さんが言っていた通り、場数を踏んでいるせいか、行動が淀みない。

由比ヶ浜は口を閉ざしたまま、うつむいている。どう反応すればいいか分からない、といった所だろう。

要求をのむということは、雪ノ下の願いが叶うということだ。つまりそれは、陽乃さんの外面が奪われたままになることだ。それはきっと、まちがっているだろう。

雪ノ下のマンションの大体の位置を確認すると、阿良々木先輩は、

こちらに向いて尋ねる。

「もう一人だけ、外部アドバイザーみたいな形で、連れて行きたい奴がいるんだがいいか？」

どうやら連れて行きたい人は、以前怪異に行き遭ったらしく、多少精神面で雪ノ下の力になれるかもしれないらしい。

由比ヶ浜がそのことに賛成したので、一応雪ノ下に確認を取ると、意外にも許可が下りた。

その人の家は、学校を挟んで雪ノ下のマンションと正反対にあるらしく、俺たちは校門でその人の到着を待っていた。

「私を呼び出すなんて、いい度胸ね、阿良々木君。一体どうしてくれようかしら？」

いくらかすると、阿良々木先輩に、針のように鋭い声が掛けられる。

声の主に目を向けると、ショートカットの美人が天地魔闘の構えをしていた。すげぇシュールだ……。

その人は、レディースの白いシャツに、鮮やかなカーディガンを羽織り、ベージュのスカート履いているという、大人っぽい格好だった。

美人ではあるが、何よりこの人、スタイルが素晴らしい。スカートの長さは膝上くらいなのだが、ストッキングに包まれた足と腰の位置が、足の長さを際だたせる。ふくらはぎしか見られないが、それでも適度に引き締まっているその足は、俺の目を引きつけて離さない。

胸にしても、特別巨乳ではないが、身体全体のバランスで考えると、

もっとも美しく見えるんじゃないかという位、ちょうどいいおっぱいだった。人間何事もバランスが大事だと、おっぱいに教えられるとは、人生というのは分からない。

カーディガンで身体のラインが隠れているから、正確には分からないが、それでも足の肉付きを見ていると、綺麗なくびれがあることを容易に想像させる。天地魔闘の構えにしても、シュールではあるが、女子でこれほど様になっているのも、この人のスタイルの良さを証明する一つの証拠だろう。

「ヒッキー、見とれすぎ」

由比ヶ浜が、頬を膨らませながらこっちを見ている。こらこら。子供みたいなことをするんじゃない。というか何で俺、こんなに細かく描写をしているのだろう……。まるで変態みたいだ。

「あれ、羽川さんは？　ねぇ阿良々木君、私は羽川さんが居ると聞いたからこそ、神原とイチャつくことを、断腸の思いで延期させて、ここまで足を運んだのよ」

「僕は一言も、羽川が来るとは言ってねぇよ」

「えっ、本当なの、阿良々木君？　私、羽川さんに来ると思って、いつも阿良々木君に会う時の、二倍以上おしゃれしてきたのよ」

「傷つくことを言わないでくれ……」

「だから今日はこれでもう……、あら？」

そこでその人の視線が、由比ヶ浜に止まる。そして早歩きで、由比ヶ浜に近づいた。

「私は戦場々原ひたぎと言うわ。あなたの名前を教えて頂いてもいいかしら？」

由比ヶ浜が一歩後ずさり、どこか怯えているように見える。まぁ美人が近づいてきたら、そりゃ怯える。俺だったら逃げるレベル。

「ゆ、由比ヶ浜結衣です」

「そう……、とても良いお胸ね」

「ふぇっ！」

「違ったわ。とっても良いお名前ね」

あの人絶対間違えて無かったぞ。由比ヶ浜の胸をガン見してたし。というか、今も視線を一切離していない。

由比ヶ浜はなにを隠しているのか分からないが、手で服の上から、胸を隠している。服を着ていてもこの動作は、どこかエロさを感じさせるなと頭の片隅で思う。

「阿良々木君、私とってもやる気が出たわ。なんでも言って頂戴。阿良々木君が死にかける位までなら、何でもやるわ」

「何でお前、恋人の僕よりも可愛い女子をみる方がやる気が出るんだよ！」

もしかしたらと思っていたが、やはり、この二人は付き合っていたのか……。リア充爆発しろ！

「やっぱりお二人は、付き合っているんですね！」

由比ヶ浜は、さっきセクハラを受けたこと、一切気にする様子で、目を輝かせている。いいのか、それで。戦場々原先輩、お前の胸見てるとき、目が真剣だったんだぞ。

「いいことを聞いたわね。後学の為に私と阿良々木君のこと、何でも聞いてもいいわよ。一から十まで答えてあげる」

「じゃあ、じゃあ！　お二人はどういう形で付き合ったんですか？」

「それを説明するには、私たちの出会いを説明する必要があるわ。確か……、階段で滑って落ちそうになった私を、阿良々木君が受け止めてくれたのよね」

「うわぁ！　ロマンチックですね！」

「そのお礼に私は、阿良々木君の口内をホッチキスで綴じてあげたわ」

「うわぁ……、猟奇的だ……」

ロマンチックの欠片もなかった。阿良々木先輩は自分の事が語られるのが嫌なのか、そっぽを向いて恥ずかしそうにしている。普通に傷害事件がこの二人の間で起きていたのに、恥ずかしいで済むのだろうか……？

「おい、戦場々原。その話はいいから、とっとと本題に入るぞ」

「む、分かったわ。私と阿良々木君が、初めてベロチューした時の話をすればいいんでしょう」

「誰が恋バナの本題に入れと言った！」

流石に冗談はここまでなのか、阿良々木先輩も戦場々原先輩も、茶化すことなく雪ノ下の事情について話す。流石に以心伝心というか、冗談と本気の線引きが、はっきりしている。

「分かったわ。では、雪ノ下さんのお家に行きましょうか」

戦場々原先輩の一言で、この四人で、雪ノ下のマンションに行くことが決定した。

なぜか戦場々原先輩を先頭に進んでいるのは、突っ込んでもいいのだろうか？

ゆきのフォックス　其之玖

戦場々原先輩を先頭に、俺たちは行進を始めたが歩き始めたが、戦場々原先輩は開始三分で、

「私、雪ノ下さんのお家が分からないわ」

と言い始めた。

「やっぱ知らねぇのかよ！」

阿良々木先輩がつっこんでくれて助かった。戦場々原先輩につっこみを入れるのは、正直怖い。十倍ぐらいになって返ってきそうだ。

結局、俺と由比ヶ浜が先導する形で、雪ノ下のマンションへ向かうことになった。この無駄な三分は一体何だったのだろう。

「阿良々木君、また誰かを助けようとしているのね」

「悪いかよ。困っている人がいたら、そりゃ助けるだろ」

「悪いとは言ってないわ。むしろ良いわ。私の彼氏が正義マンなんて、自慢できるじゃない」

「スパイダーマンならともかく、正義マンの響きは。あまり格好よくはないんじゃないか……」

「でもね、阿良々木君。誰でも助けるのは、この際何も言わないから、何でも背負うのは、やめて頂戴」

「背負うって何だよ？　僕は別に、そんなことはしていないぞ」

「責任を感じるな、と言っているのよ。怪異なんて基本的には、本人が望むからこそ現れるのよ。……だから、どんな結末だろうと、その結末は当事者が受け止めるべきなの」

「……分かっている」

「ならいいわ。それに、阿良々木君のそんな部分も、私は好ましく思っているから、二律背反というか、二兎追うものは一兎も得ず、みたいな」

あのカップル、後方でイチャつき始めたぞ。俺があの二人の前に居なくてよかった。声だけ聞いていても、軽く胸焼しそうになるのに、映像で見たら、死にたくなりそうだ。

俺の右斜め前を歩いていた由比ヶ浜が、歩く速度を緩める。俺はそのままの速さで歩いていたので、すぐに由比ヶ浜が隣に並ぶ。肩の辺りに由比ヶ浜の頭があり、なんだかむず痒い。隣に並んだことで、前を歩いていたときは見られなかった豊満な胸……ではなく、表情をのぞき見ることができた

「あの二人、凄く仲が良いね。……羨ましい」

「お前、あのやり取りを見て、羨ましいか？」

正直、阿良々木先輩が振り回されているようにしか、見えないのだが……。

由比ヶ浜はこちらを向かずに、遠くを見ながら話を続ける。

「だって、お互いが凄い信頼しているのが、分かるもん。好きな人が自

分のことをそう思ってくれるって、凄く嬉しいと思う」

そう言う由比ヶ浜は、口を尖らせて、どこか拗ねているように見える。

「あたしの好きな人たちはまだ、あたしのことを完全に信頼してくれてないから……」

雪ノ下が狐の件で由比ヶ浜を頼ったのは、少なくとも狐が憑いてから二日は経っている。おそらく由比ヶ浜は、すぐに声を掛けて欲しかったはずだ。

「だから早く、あたしのことを信頼して欲しいんだ」

由比ヶ浜は少し前に進み、俺の正面に立つと、晴れた秋空の様な笑顔で、そんなことを呟いた。しかし由比ヶ浜だったら、雪ノ下が心を開ききるまでに、時間はかからないだろう。こいつは良い意味で馬鹿だから、いつの間にか体の力を抜いてしまう。

「そうだな……」

「ねっ、ヒッキー！」

あの、由比ヶ浜さん……。少し目が怖いんですけど……。

阿良々木先輩と戦場々原先輩を、雪ノ下の元へと連れて行くと、すぐに人格が狐へと切り替わった。千年パズルよりも変わるのが早くねぇか？

「五人……？　いや人じゃないし、四人か。ちょっと少ないけど、しょうがないかな？」

狐は少し考えた素振りをしたが、すぐに納得したのか、視線をこちらに向ける。

「おい、狐。言われた通りに連れてきたが、なんか神託でもあるのか？」

「『狐』だなんて、酷いなぁ。それは私が君たちのことを、『人間』と呼ぶのと同じだよ。私のことは……、そうだね、白狐さんとでも呼んでよん」

正直、狐に色を加えただけなので、大して呼び方は変わってないが、狐と呼ぶのも変な気分なので呼ばせてもらう。『狐さん』の名前は、なぜか人類的に最悪なネーミングな気がする。

「ねぇ白狐さん。私は多忙の身の中、わざわざこの時間を作って来たのよ。いなり寿司が欲しいなんて、くだらないことを言ったら、その場で祓うわよ」

戦場々原先輩が、目を怪しく光らせるとともに、胸ポケットに刺してあるボールペンを手に取る。一瞬阿良々木先輩が飛び跳ねたのは、何故だろう。

「いなり寿司かー、それもいいね。お供え物にはやっぱり、いなり寿司だよね。でも本題は別なんだよ」

「別に、あなたと世間話をするつもりはないのよ。とっとその本題とやらに入りなさい」

いつの間にか、戦場々原先輩が話しを仕切っていた。別に話をしてくれるなら助かるが、何かこれでいいのかという気持ちになる。

「そうだね。私もその為に、この子に憑いたわけだし」

白狐さんが背筋を正して、それまで浮かべていた完璧な笑顔を消して、真剣な顔つきになる。それだけで、今までの俺が知っている、雪ノ下の表情に戻った。

「私はね、この町で死んでしまった稲荷信仰を、生き返らせたいんだ」

それは、吸血鬼幼女からの情報と対して変わらなかった。「神は死んだ」と言った哲学者は誰だっただろうか、思い出せない。ただ、信仰は中世よりも誰かの心の指針にはなっていない。子供がサンタクロースの正体を知るように、神様はいつの間にか人々の心の中心から、片隅の置かれてしまっている。神が死んでしまった世界で信仰を取り戻すには、相当の労力が必要になるだろう。

「信仰を生き返らせるっていっても、具体的には、僕たちが何をすれば、生き返ったことになるんだ？」

「んー、そうだねー。どうしようか？」

「決めてねぇのかよ。それじゃあ、やりようがねぇだろ」

神様のくせに、適当すぎるだろ。

白狐さんは、唇に指を当てながら考えると、何か閃いたのか、澄んだ表情でこちらを見てくる。そんな目で俺を見るんじゃない。わっち、わっちにされるだろうが。……あれは狼だったな。

「例えば、死にたいなーって思ったり、鬼籍に入りたいなーって思ったり、自分の弔鐘を鳴らしたいなーって思ったときに、稲荷神社を訪ねて救いを求める、みたいな」

「その三つ、全部意味同じだからな。人間関係の悩みとか、恋の悩みでもいいだろ」

「まぁそれでも、いいかな。要するに、初詣や合格祈願、初恋成就みたいな祈りの対象を、私の神社にして欲しいわけ」

適当な話し方をしている割には、難しいことを言ってくる。人が祈るためには、祠や境内の整備は必須だ。荘厳さ、威厳さを出すならば、それなりの空間づくりをしなければならない。神に祈るならば、祈りを届けられるような雰囲気が必要になる。教会にステンドグラスがあり、教会カンタータが流れるのもその一環だ。白狐さんの神社がどこにあるかは知らないが、廃れているということは、設備が良いとは思えない。

「私としては、良い感情と悪い感情、どっちでも良いだけど……。ただ神様だから、良い感情の方が集めやすいかなーって思うんだよ」

「そうすれば、ゆきのんは元に戻るの？」

「契約完了、ということで私は満足して帰って、この子は願いが叶う。正にＷＩＮ－ＷＩＮの関係だよね！」

その契約を果たすということは、陽乃さんの外面が戻らないことを意味する。陽乃さんは普段、俺たちのことを茶化してはいるが、ずるもしていないし、悪いこともしていない。だったらそれは、見過ごしていいことではない。

「ゆきのんは、白狐さんに何を願ったの？」

由比ヶ浜は、俺が聞きづらいことを、怖々と質問する。

「この子のお姉さん、陽乃ちゃんだっけ？　陽乃ちゃんの様になりたい。それがこの子が私に願ったことだよ」

その言葉は、どこかで俺が予想していたが、何よりも聞きたくなかった言葉だった。

「なぁ白狐さん。一つ聞いてもいいか？」

「なんでも聞いて、吸血鬼さん。お姉さんが何でも答えてあげる」

白狐さんの出自は知らないが、それでもお姉さんは、サバを読みすぎだろ。せめてお婆ちゃんと言うべきだ。

なぜか阿良々木先輩の影から、視線を感じる。しかも視線のくせして、頬にチクチク刺さって痛い。視線に物理的威力あるわけないし気のせいだろう。うん、気のせいだ……。

「どうして白狐さんは、陽乃さんの人格を奪うことができたんだ？神様と言ったって、他人に干渉するのは難しいだろう？」

「そんなのは、簡単だよ。余所から形の無いものを借りるなんて、狐からすれば朝飯前ってわけ」

虎の威を借る狐――誰でも知っている有名なことわざだ。なら雪ノ下は適材適所、然るべき所に祈ったわけか。

「他に質問はない？　だったら私はこれで、退散させてもらうから。

じゃぁねー」

白狐さんはそう言うと、目をつむりながら、こちらに手を振る。すぐに笑顔が消えて、いつも通りの雪ノ下の表情に戻る。雪ノ下はすぐに視線を巡らせて、辺りの状況を確認しているようだった。

「さて、ようやく私の目的を果たせる時が。来たようね」

冒険の途中で、仲間を裏切った先生キャラみたいな台詞を戦場々原先輩が言った。

「だから、阿良々木君、由比ヶ浜さん。あと、ひ、ひ……そこの腐った死体、悪いけれども少し席を外して貰えないかしら」

「あんた今、俺の名前を思い出すのを、完全に諦めただろ」

「少し静かにして貰えないかしら、ヒレカツ君。私は雪ノ下さんに話があるの」

常々思うが、俺の名前をしっかり言ってくれる人が、一体どれくらい居るのだろうか。なまえをよんで。

「あの、戦場々原先輩。私はまだ、状況が全く把握していないのですが」

雪ノ下がおずおずと、戦場々原先輩に尋ねる。というか白狐さんが消えてから、展開が早すぎるだろ。雪ノ下がついていけてねぇぞ

「大丈夫よ、雪ノ下さん。先ほどの話は後で阿良々木君が、手取り足取り教えてくれるから安心して頂戴。だから今は、私たちのキャラクターが被っていることについて、対策を講じるのが先よ」

「戦場ヶ原、お前はそんなくだらない用事で、ここまで来たのか？」

「冗談よ、冗談、ガハラジョークよ。でも話をしたいのは本当なの」

「でも、先に雪ノ下さんに、今の話を伝える方が先じゃないか？」

俺も阿良々木先輩と同じ意見だった。雪ノ下の体感は分からないが、意識が飛んでいても可笑しくない。だったら、空白期間を埋めるのは大切だ、

戦場々原先輩は、阿良々木先輩の方を見ながら、スカートのポケットに手を入れる。スカートの構造は、男子にとっては神秘だと、場違いなことを考えていたのも束の間。戦場々原先輩の手には青紫のホッチキスがあった。

「早く出て行ってくれないと、お口にホッチキスを綴じちゃうゾ☆」

戦場々原先輩はウインクをしながら、ホッチキスを構えていた。その先には阿良々木先輩の口がある。

その瞬間、阿良々木先輩と由比ヶ浜が、玄関めがけてダッシュする様子が視界に入った。目に入ったのは一瞬で、俺もすぐに玄関に向かう。こんなに真剣に走るのは、夕暮れの土手で、青春ごっこをした以来だった。もちろんこの遊びは一人でやった。

「キャラが更正前に戻っている！」

阿良々木先輩が走りながら、叫んでいた。

なんなんだ、あの先輩、まじで怖ええ。

幕間　ひたぎチャット

雪ノ下雪乃と戦場ヶ原ひたぎは初対面である。名前くらいなら、それぞれ聞き覚えはあるかもしれないが、それだけである。だから互いのことを良く知らないのは、当たり前であり、雪乃が何を話せばいいか、分からなくいまま困惑しているのも、当然の帰結である。

比企谷八幡たちが去った後、ひたぎは玄関へ向かい、サムターンン式の鍵を閉めて、ご丁寧にU字ロックまで掛けた。

「あの……、いくらなんでも、厳重すぎませんか？」

ひたぎが一体、何を警戒しているかのが、分からないが一応聞いておく。そう聞いている今も、ドアノブを回しながら、鍵が掛かっていることを確認している。

「阿良々木君が、入って来ないようにしているのよ。彼は一応吸血鬼なのだから、その気になれば、霧になって入ることも可能だわ」

「それでしたら、ロックを掛けても、意味がないと思います」

それもそうね――そう言ってひたぎは、U字ロックを元に戻す。それだけかと思ったが、鍵まで開けていた。極端から極端に走る人だと、雪乃は思ったがそれは口に出さない。

ひたぎが天板がガラスで出来ているテーブルにそばに腰掛けたので、雪乃もそれに倣う。

そうしていると、客に対してお茶を出してないことに気付いて、雪乃が腰を上げかける。しかしひたぎが、

「気を遣わなくても結構よ。由比ヶ浜さんと比企谷君は分からないけれど、私と阿良々木くんは、この後すぐに帰るつもりだから」

と言うので、再び絨毯の上に座る。

自分が他人よりも容姿に恵まれていると、普段から自覚をしている雪乃だが、だからと言って他人への評価が不当に低いわけではない。綺麗なものを美しいと思えるし、優れている人間を優秀だと過不足なく評価ができるくらいには、真っ当な感性を持っている。

そのため戦場ヶ原ひたぎが、一般的に美人に分類される外見だということも、一目見て思った。そして隙が無いというのが、ひたぎの佇まいをみた雪乃の第一印象であった。

隙が無いというよりも、芯がぶれないと言ったほうが的確かもしれない――対面に鎮座するひたぎを眺めながら、雪乃はそんなことを思う。ひたぎは、自分が何を優先すべきかがはっきりしている。

絨毯にお尻をつけ、足を外に出すという、所謂女の子座りをしているが、背筋は真っ直ぐに伸びていて、視線の高さはちょうど雪乃と同じぐらいだった。ひたぎに対して雪乃は正座を崩した横座りだった。

座高が同じ位なのだろうか、お互いお尻をペタンと絨毯に付けているのに目線が合っている。先程立っているときにすでに分かっていたが、雪乃よりひたぎの方が背が高い。雪乃は女子の平均身長くらいなので、ひたぎの方が女子の中では大きいほうなのだろう。

ただ、身長に差があるのにも関わらず、目線が合うということは座高が同じなのだろう。そしてそれは、足の長さに違いがあることを意味する。

つまり、ひたぎの方が足が長い――そのことについて雪乃は、素直に羨ましいと思う。胸だって、慎ましい雪乃に比べると、ひたぎの胸は随分豊かだ。そのことについてもやはり、羨望の眼差しを向けてしまう。女子であるなら誰だって、スタイルが良いとうことには、憧れを持ってしまう。雪乃にしても、その例外ではない。

「さて、それでは何から話しましょうか？」

雪乃はそれに答えない。こんなものは懸詞のようなものであるし、こちらに返答を求めているものではないからだ。

「別にあなたが怪異に遭ったからといって、私に被害があるわけもないし、別に積極的に解決しようとも思わないの」

「では、私に何のご用があるのでしょうか？」

「まぁ、先輩からの助言と思ってくれていいわ。あなたが狐に憑かれたように、私は蟹に行き遭ったわけ……」

蟹に行き遭うとは、どういうことだろうかと雪乃は首を傾げる。怪異とはある種、妖怪やお化けみたいなものだと雪乃は認識しているが、蟹の妖怪に心当たりはなかった。

『さるかに合戦』であれば知っていたが、あの作品は、蟹は被害を受けていたので、おそらく違うだろう。

「だからと言って、狐を祓うのに役に立つ情報を、私が持っているわけではないの。その点は承知しておいて」

「いくら何でも、そこまで頼るつもりはありません」

「……そう。なら、先ほどの白狐さんの話も、私が語る必要はないわね。まぁ、あなたは知っているようだし」

その言葉に、雪乃は息を呑む。嘘を吐いているわけではなかったが、それでもまだ明かしていない情報を言い当てられるのは、どこか落ち着かない。

ただ、状況を掴めていない、というのは本当だった。そもそも白狐が表に出て来てしまえば、雪乃は何も出来ない。ある種夢を見ているような状態であるため、知っているだけであって、触れば霧散してしまう程度だ。

「しかし、どうして話の内容を覚えていると分かったのですか？」

「別に確信はなかったわ。ただ、あなたは自分で祈りを捧げたわけなのだから、白狐さんが出ているときでも、意識はあってもおかしくないと思ったわけ。怪異は自ら願うからこそ、現れるものだし」

由比ヶ浜結衣は、雪乃を被害者だと思っている節があるが、雪乃はそうは思っていない。雪乃と陽乃に起きた事件は、実行犯は白狐であっても、発端は雪乃である。

住宅街の外れに、まるで打ち捨てられたかのように、誰にも気付かれずひっそりと佇んでいた稲荷神社を発見し、ふとした気まぐれで、神に祈ったのは雪乃だ。

ならば被害者は雪ノ下陽乃であり、加害者は雪ノ下雪乃とも言えるだろう。

「まぁ、その点は由比ヶ浜さんや比企谷君には黙っていたほうが良いかもしれないわね」

しかしそれは、嘘を吐くことと同じかもしれないと、雪乃は思う。先ほどは話す時間がなかったと言えなくもないが、隠し通すことは嘘と同義だろう。

「それは、少し考えさせて頂きます」

ただの先延ばしかもしれない――雪乃は自虐的に考えるが、ひたぎは「そう……」と、平坦に返すだけだった。

「黙っておくなら、私の名前を使いなさい。私から聞いたことにすれば、あの子たちも納得いくでしょう」

その点には素直感謝する。

「しかし、どうして戦場ヶ原先輩は、私へ良くしてくれているのでしょうか。僭越ながら、私たちは初対面です。そこまでして頂く理由がありません」

「あなたがとても可愛らしいというのは、ダメ？」

うふふ、とひたぎが上品に口を手で隠しなが笑う。

「ダメです」

「そう、なら本当のことを言うわ」

これが異性同士なら、このまま恋に発展するかもしれないわね――そんなことをひたぎは付け足す。異性同士ならただの臭い台詞で終わると雪乃は思ったが、恋愛に関してなら、ひたぎの方が経験があるので、自分の考えが正しいとは限らない。零と一では、限りなく差が

存在する。

「あなたが、私の友人に似ているからよ」

そう言われても、雪乃は特に何も言えない。似ていると言ったところで、顔が似ているのか、それとも性格が似ているのかが、分からない。

「似ているのは、性格だけれどね。羽川翼さんというの。羽川さんは自覚がないようだけれど、彼女有名だから、雪ノ下さんも知っているでしょう？」

当然雪乃は知っている。雪乃が二年生の中でもかなりの優等生であるが、羽川翼は学校一の優等生だ。そもそも、朝礼であれだけ表彰されているのだから、同じ学校にいて知らない方がおかしいだろう。

普段から学年一位を取っている雪乃であるが、それでも羽川翼の成績には及ばない。学年一位なのは当然として、五教科六百満点のテストで六百点を平然と取るような人間なのだ。雪乃自身、翼よりも優れているとか、劣っているとか、そうステージで競う人間ではないと思っている。

「私は、羽川先輩と似ているとは思っていません」

「いいえ、良く似ているわ。羽川さんはなかなか人に頼らないし、あなたもきっと、人に頼らないわ」

「別に頼らないわけでは、ありません。ただ私が招いたものについては、自分で行うようにしているだけです」

雪乃は誰かの手を借りることを、否定しているわけではない。分業

や集団での作業の効率性を認めているし、互いの弱点を補うことで、世の中が上手く循環していることも、知識として持っている

「その点が似ているのよ。問題に直面しているくせに、誰かに助けを求めることをしないの。あなたも、羽川さんも。弱さを許容できないというか、原因を自分に求めすぎていると言えばいいのかしら」

そのことに関して、否定できずにいると、ひたぎはさらに続ける。

「だから一つ言わせてもらうけれども、無理に助けを求めろとは言わないから、差し伸べられる手ぐらいは素直に掴みなさい」

「すでに由比ヶ浜さんや、比企谷君には頼っています」

「それでは足りないのよ。助けられるなら、しっかりと助けられなさい」

しっかりと助けられる――雪乃はひたぎの言葉を反芻するが、意味を理解することができなかった。

「これは私の考えなのだけれど、何か危機に面したとき、助けてくれる人は意外とたくさんいるの。その時にその手を取るにしても、振り払って自分の力で解決しようともかまわないと私は思うわ。それこそ自分の問題だもの、そのくらいは選択ではできるでしょ。だからこそ、誰かに助けられるのなら、誰に助けられるかが重要になるの」

ひたぎはこれを伝えにきたのだろう。ならば雪乃はしっかりと聞いて、噛みしめようと思う。この先輩は見ず知らずの後輩に、これを伝えるために来てくれたのだから。

「私が怪異に遭って、そのあと二年程悩まされていたの。その間、私が

拒絶をしなければ、私を助けてくれようとした人は、何人かいたわ」

二年という数字とは、どれくらい長いものなのか。雪乃が白狐に憑かれてから、まだ一週間も経っていない。それでも短い人生のなかでも、これほど長いと感じる時間は経験したことがない。それが二年ともなると、全く想像がつかない。

「その人たちに頼っても、阿良々木君のように上手くは解決できなかったと思うけれど、それでもどこかで解決するのではないかと私は考えているわ。だけれど、私は阿良々木君に助けてもらって、本当に良かったと思っているの」

ひたぎはそう言いながら、ガラスのテーブルを優しく撫でる。その手つきだけで、今ひたぎが誰のことを想っているかが、思いつく。

「誰かの手を借りていれば、もしかしたら早く怪異の悩みから解放されていたかもしれない。でもね、たとえ一年早く重さを取り戻してことができたとしても、私は今年の五月に阿良々木君に助けられて良かったと、今でも思っているわ。阿良々木君と出会うことができて本当に良かったの」

そう言って、ひたぎは大きく息を吐く。その頬は多少赤みがかっていて、気恥ずかしいことを言っていたことが見て取れた。正直目の前で、こういう表情をされると、こちらも当てられてしまう。

「あの……、のろけられても困ります」

「いや、別に阿良々木君のことを自慢したいわけではないわ。ただ、あなたがもし誰かを頼るのであれば、しっかりと心を預けられる人に自分の意思で頼りなさい。結局どこかで解決するのだから、良かったと思うような選択をしなさい」

言い終わるとともに、ひたぎは立ち上がる。それにつられて雪乃も立ち上がり、窓の外を眺めると、日は落ち掛けていた。

夕焼け空に染まっていた町並みは、いつの間にかほの暗い闇と室内から漏れ出す光のコントラストに様変わりしていた。いつの間にか、日が落ちるのが早くなっいることに気付く。もう夏は過ぎ去って、秋へと季節が移り変わっている。

「そろそろ、日が暮れることだし、帰らせてもらうわ」

「そうですか。色々教えていただき、ありがとうございました」

ひたぎが玄関を開けると同時に、雪乃が頭を下げて礼を言う。そのためひたぎの表情を伺いしることは出来なかったが、最後にひたぎは、

「まぁ、がんばりなさい」

そう言ってドアを閉めた。

雪乃は結衣に、今日は帰った方が良いとメールで伝えると、寝室へ向かい、ベッドに倒れ込む

今日はもう少しだけ、戦場ヶ原先輩の言葉を染み込ませよう――そう思いながら雪乃は、ベッドの柔らかさに身体を預けた。

ゆきのフォックス　其之拾

雪ノ下の部屋から、転がり落ちるような気持ちで脱出したのは良かったが、戦場ヶ原先輩の話が終わるまで、廊下で待っているわけにもいかない。教会にでも行って、生きていることに感謝でもすればいいのだろうか？　それか懺悔でもするか？

「んー、どうしようか？」

由比ヶ浜が当惑しながら聞いてくる。

「どうすると言ってもなー。廊下で高校生三人がたむろしているのも、迷惑だからな。とりあえず、ロビーに戻るか」

その案には、由比ヶ浜も阿良々木先輩も同意してくれたので、ひとまずロビーに戻る。

性能が良いのか、あまり振動のしないエレベーターを下り、ロビーへ着いたはいいが、ベンチのような気の利いたものはなく、あまり居心地が良くはなかった。

ロビーというと、どうしても、ホテルを想像してしまったのがいけなかった。マンションのロビーなのだから、腰を落ち着ける場所として造られているわけもなく、休憩スペースがなかった。

「だったら、喫茶店に行こう。戦場ヶ原には終わったら連絡をするように、メールをしておく」

どの道、高校生三人が高級マンションに居ても、好奇の目にさらされるだけだろう。ここでは、怪異についても話をしにくいことを考えると、移動した方が賢明だ。

そう決めると、由比ヶ浜が近くのカフェの場所を言う。女子が好きそうな、スイーツが美味しいカフェらしい。距離的にも徒歩で五分程度ならば、時間を潰すにはちょうどいい。

入ったときとは、別のドアから外に出る。入るときは、わざわざ住人の許可を取らなければいけないのに、出ていくときは簡単なのは、どこか人間関係を思わせる。

さんざん苦労して入った、トップカーストのグループから、すぐに追い出されるなんて良くあることだ。

日本人は行事を先取りする傾向がある。一月の始めにバレンタインのコーナーが造られ始め、八月にランドセルがデパート並び、十月には目映いほどのイルミネーションが街を彩り始める。

文化祭にしても、当日よりも前日までの準備の方が楽しいという輩は一定数存在する。また、サッカー日本代表の試合で、ワールドカップの本戦よりも、アジア予選の方が盛り上がれるのも、その一つかも知れない。……それはこの前の場合だけだろう。

何事も行事を行う場合、顕在的機能と潜在的機能が存在する見かけの効果と、裏の効果だ。バレンタインの純愛の裏には、企業の金儲けがあるわけだし、修学旅行にしろ、旅行を楽しむよりは、集団内の帰属意識を高める効果のほうが大きい。良く言うだろ、どこへ行くのではなく、誰と行くのかだ。

だから社員旅行で楽しめないなんて、もってのほかだ。観光地に行き、ご当地の温泉や施設を楽しむためではなく、上司や先輩、同僚と

の絆を強めるために社員旅行に行くのだ。専務や部長だらけの部屋に放り込まれても、文句を言ってはいけない。それが社会人の務めなのだから。愛想笑いをして、不味い酒を飲みながら、妙なテンションになりながら宴会芸をすることだって、立派な仕事なんだよ。……はぁ、社員旅行なんて無くならねぇかな……。

話を戻すが、現在は九月の半ばである。だと言うのに、由比ヶ浜に連れて来られた喫茶店には、ハロウィンの装飾として、明るいオレンジ色のジャックランタンや可愛らしい白の幽霊が所狭しと、飾ってある。だだ先の例の通り、この装飾がきっとどこかで世界の為になっていると思って、広い心で、無邪気な子供を見るように眺めてやるのが、健全なる男子というものだ。

……由比ヶ浜のチョイスだということを、考えておくべきだった。店内には女子大生や女子高生、またはカップルしかいない。男二人の女一人の組み合わせは、俺たちしかないだろう。

何席かは、すでに空席だったので、先にコーヒーを頼みにいく。ブレンドコーヒーにミルクと砂糖を大量に入れようと思っていると、キャラメルなんとかだの、シェイクなんとかなど、わけの分からない外来語がメニューの上で踊っている。

なんだ、これは？　分かりにくいぞ、消えてなくなれ。……思わず滅尽滅相ォォ!!したくなってしまった。最近の女子高生はこんな呪文で、コーヒーを錬成しているのか。俺も、

「Ａｔｚｉｌｕｔｈ」

って言ってみようかな。やだ……、流出しちゃう。

「ヒッキー、店員さんの前で一人で笑わないで、キモい……」

「キモいって何だ、俺はただメニューを選んでいるだけだぞ。というか良く分からんから、由比ヶ浜と同じものでいいから、コーヒー注文してくれ」

「それって男子が、女子にやって貰うことじゃないよね……」

横にずれて、由比ヶ浜に順番を譲る。由比ヶ浜は渋々ながらも、注文をしてくれた。あの長い呪文を全く噛まずに言えるあたり、由比ヶ浜の女子高生スキルが伺える。

席に戻り、コーヒーが来たと思ったが、カボチャのタルトが二つほど、カフェラテと一緒に並ばれる。

「俺はデザートまで、一緒に頼んではないんだが……」

「えっ、あたし、一つしか頼んでないよ？」

「それは僕が頼んだ分だ」

マジかよ。この人全然、甘い物を食べるようには、見えないんだが。

「阿良々木先輩って、デザート好きなんですか？」

「前はあんまり、好きじゃなかったんだけどな。受験勉強を本格的にやり始めたら、糖分を取りたくて仕方がないんだ」

「ですよねー。甘い物は、生活に必要ですよねー」

「お前な、あんまり甘い物ばかり食っていると、太るぞ」

「ふ、太るって……。だ、大丈夫、晩ご飯の代わりにすれば。それに阿良々木先輩だって同じ物食べてるし……、大丈夫だよ！」

男と女の場合、基礎代謝が違うから、同じものを食べても太り方に違いが出ると思うのだが。というか、デザートを主食にするな、ひだまりの中でスケッチしたくなるだろうが。

「僕は太らない体質だから、いくら食べても太らないぞ」

「えっ！」

由比ヶ浜は、タルトへ伸ばしかけていたフォークを取り落とし、錆び付いたロボットのように、鈍い動きで顔を上げる。裏切りはここにて露見をし、事態は終局へと向かっていく。

「ど、どういうことですか？　食べても太らないなんて、少女漫画だけですよね？」

「いや、僕って吸血鬼だからさ。常に身体が最適になるように調整されるから、何を食べても太ったり痩せたりしないんだ」

なんだ、その全て女子が遠いの夢中で見た理想郷。迂闊に言ったら刺されかねない発言だな。

「何それ？　こ、こんな不条理があたしの目の前にあるなんて……」

苦しそうに、呻きながらもタルトをつついて食べる由比ヶ浜。デザートってもっと美味そうに食べるものだろ。

「そんなに嫌そうに喰うなよ……」

「……だ、大丈夫、阿良々木先輩が太らないなら、あ、あたしだって太らないよ」

太るに決まってんだろ。

阿良々木先輩は、由比ヶ浜を軽く傷つけたことに狼狽えたが、一息ついてから話を始める。

「白狐さんの対処についてだけれど、これからどうする？」

「信仰を取り戻す……ですよね。どうすればできるのか、という話ですか？」

「学校のみんなに言って、お参りしてもらう？」

それも一つの方策だが、決定力に欠けるだろう。かと言って、正しい方法なんて分からない。俺は宗教には詳しいわけではないし、特定の宗派に属しているわけでもない。それこそ高校受験の時に、小町と神社にお参りにいったくらいだ。

「ただ、白狐さんの願いを叶えることは、陽乃さんが元に戻らないだろ……」

「そっか……、だったら、白狐さんに帰ってもらうようにお願いする？」

「それも一つの方法だろう。今は忍が寝ているから分からないが、雪ノ下さんとそのお姉さんの両方を助けられるか、今日の夜にでも相談をするよ」

「だったら、あたしたちも何か方法がないか探してみますね。ヒッ

キーはそれでいい？」

「あぁ、今日だけじゃ結論はでないだろ」

ただ一つ思ってしまう。雪ノ下と陽乃さん、どちらも助けるなんて、都合の良く解決できるのだろうか。そんな都合の良い結末を、それこそ神様が許してくれるのだろうか。

元々神様など信じていない俺たちが、神様の許しを得るなんて、どこか皮肉めいた様に思える。

「あれ、結衣じゃーん。こんなとこで何やってんの？」

俺の思考は、由比ヶ浜に掛けられた親しげな声によってかき消される。声が聞こえた入り口の方へと顔を向けると、同じクラスの三浦がそこにはいた。

「お、マジだ。おーい隼人君、結衣いるべ、結衣」

「ひ、ヒキタニ君が隼人君以外の男の子と一緒にいる！　これは、ハヤ×ヒキの計算式に、あらたな絶対値が……。二人の男の子に攻められながらも、断れないヒキタニ君……、ありだね！」

「姫菜、ここで鼻血出さない。ちゃんと擬態しろし」

どうやらここに来たのは、三浦だけではなかったようだ。戸部に海老名さん、あと葉山もいるのか。こいつら、放課後まで一緒に居るのかよ。放課後まで話す話題がよくあるな。

というか、どこからか腐った視線を感じる。モロボシダンかってぐらいに眼鏡を光らせているが、ただの幻覚だろう。そもそもここは、

喫茶店なんだから、腐ったものがあるわけないだろ、……ねぇ。

「あ、優美子、やっはろー。優美子たちは、どうしたの？」

「俺と隼人君の部活が終わったもんで、こうして時間潰しってわけ」

なんで部活終わったのに、時間潰してんだよ。とっとと帰ればいいだろ。

「つーか戸部、勝手に言うなし。結衣こそ何やってんの？　部活？」

「あははー、まぁそんな感じ」

「……なぁ、お前らの知り合いか？」

阿良々木先輩は、小声でこちらに聞いてくる。

「俺のクラスメイトで、由比ヶ浜の友達、といった感じです」

そう答えると阿良々木先輩は、「そうか」と納得して、タルトを食べることに戻る。なぜか今のやりとりで、海老名さんの口から「ぐはっ」という呻きが漏れる。こうかはばつぐんだ。

どうやら三浦たちは、俺たちの席の近くに座るらしく、空いた席に鞄を置き始めている。

「やぁ、ヒキタニ君」

三浦や海老名さんはカウンターに向かったが、葉山と戸部は荷物晩をしているらしい。

正直こちらは、戦場ヶ原先輩待ちのため、勝手に帰るわけにはいかない。こいつらと話すも内容なんてほとんどないぞ。

由比ヶ浜には悪いが、場を繋いでもらおうかと思って期待の眼差しを向けると、なぜか携帯電話を差し出してくる。

「悪いな、由比ヶ浜。お前の携帯電話をもらっても、小町とメールするしかやることないぞ」

「何言ってんの！　ゆきのんからメール来たの」

由比ヶ浜の携帯電話に写しだされたメールには、

『もう暗くなってきたし、また明日にしましょう。今日は来てくれてありがとう』

どうやら、戦場ヶ原先輩の話が終わったらしい。阿良々木先輩も携帯電話で電話をしている。

よく考えれば、雪ノ下のマンションを出て、三十分は過ぎている。そう考えれば、時間としては適切だろう。

「雪ノ下さんのお見舞いに、行ってきたのか？」

由比ヶ浜との会話が葉山に聞こえたのか、何故か俺に顔を向けて尋ねてくる。

「まぁ、そんなところだ」

「体調は大丈夫なのか？」

「まだおかしいところはあるが、基本的には元気だな」

もともと体調を崩しているわけではなく、憑かれただけだ、嘘は言っていない。

それだけでは納得しないのか、真剣な目つきで続きを促してくる。

「もう六日ぐらい休んでいるだろ。本当に大丈夫なのか」

「だったらお前が、見舞いにでも行って確かめてくればいいだろうが」

「そんな簡単に行けないから、ヒキタニ君に聞いているんだ」

話しているうちに、苛々してくる。だったら俺に聞かなければいいだろう。人脈なら葉山のほうが多いのだから、調べようと思うのなら葉山なら簡単に調べられる。

「簡単だろ。心配なら様子を見に行けばいいし、気にならないなら、放っておけばいい」

「ヒキタニ君は、雪ノ下さんのことが心配なのか？」

「あぁ、心配だよ。あいつが休むと由比ヶ浜の紅茶を煎れる奴がいないんだよ」

「本当にそれだけか……」

「知らねぇよ、俺はお前と違って友達なんていないからな。どの感情が心配なのか、考えたこともねぇ」

「俺は比企谷と違って、その意味を理解しているから、簡単に心配して

いるなんて言えないし、比企谷のようにはなれないんだよ」

葉山は、苦しく、まるで懺悔でもするように、そう漏らした。

そうだな。俺もお前みたいには、なりたくない。

葉山は自分が集団の中心にいて、自分の行動が他人に影響を及ぼすと知っているから、動きに制限が出る。それこそ嘘をついて、見て見ぬ振りをしながら、簡単に傾いてしまう人間関係の均衡を保っている。

ただな、思ったことを思っているだけじゃ、何も及ぼさないんだ。心配をしているんだったら、直接声をかけるか、行動を起こさなければ、心配をしていることには、ならないんだよ。何にしたって、それは同じだ。

俺と雪ノ下は、そうやって声を上げながら生きてきた。だから今、独りでいるんだ。

「マジ混んでるし。ねぇ、隼人ー、なんかハロウィン限定メニューあるから、それ選んできちゃった」

俺と葉山の間に流れ始めた沈黙は、三浦たちの無遠慮な声によって、かき消される。葉山はすぐに表情をいつものとろけるような笑みに戻すと、三浦と話し始める。

いつの間にか、阿良々木先輩はタルトを完食し、カップも空になっていた。

「じゃあ、僕はお邪魔そうだし、失礼する。また明日奉仕部にお邪魔させてもらう」

阿良々木先輩は、俺と由比ヶ浜に挨拶をすると、そのまま店の外へ向かう。

「お、俺も妹と夕飯食う約束があった。じゃあな由比ヶ浜」

阿良々木先輩が逃げたのを、好機と捉え、俺も逃走を開始する。戦争において、退却を見誤らないのが、もっとも重要だと偉い人が言ってた気がする。偉い人が言ったのだから、従うのが筋というものだろう。偉い人って誰だろう。

「あ、ヒッキー、阿良々木先輩！」

由比ヶ浜の声を背中で受け止めながら、ハロウィン一色の喫茶店を後にする。

「き、貴重なインスピレーション機会が……」

何故か海老名さんの悲痛な叫び声が、聞こえてくる。きっと振り向くと表現主義のような、なんとも言えないような顔をしているのだろう。これ以上俺を妄想の中の住人にもしないことも含めて、この退却は適切だっただろう。

ゆきのフォックス　其之拾壱

「ただいまー」

「お兄ちゃん、お帰りなさい。正社員になる？　派遣社員になる？　それとも、ア・ル・バ・イ・ト？」

……家に帰ったと思ったら、非常な現実を妹から突きつけられた。言った本人である小町は、「やだっ、小町的にポイント高い？」なんて呟きながら、両手を頬に当てながら照れた素振りをみせる。たぶん社会的にポイントが高いと思うぞ。

「お兄ちゃん、最近帰ってくるのが遅いねー。社会人になる予習でもしてるの？　それとも、彼女でもできた？」

「お兄ちゃんは、小町がいる限り彼女なんて作りません」

妹がいるのに、彼女を作る時間なんてあるわけないだろ。アニメを見て、本でも読んで、妹と仲良していれば、残りの時間なんて寝るぐらいだ。

「小町としてはー、早くお兄ちゃんの面倒見てくれる人が居てくれるとうれしいなぁーって思うんだけどね。結衣さんとか、雪乃さんとか」

小町が愛猫のカマクラを撫でながら、実の兄の介護を拒否していた。お兄ちゃん、ちょっと泣いてもいいかな？

あと、なぜその二人を例に上げる？

「でもね、ホントにどうしたの？　もう七時半だよ」

小町はカマクラを撫でる手を止めて、こちらを見上げてくる。長年兄妹をやっているだけあって、小町は俺の変化には目敏い。いきなり背中に触れる手がなくなったカマクラを小町の方を向くと、何かを察したのか、どこかへ行ってしまった。

どう言うべきか迷う。小町は雪ノ下に世話になっているし、お見舞いくらいは行かせるべきか。一応、雪ノ下に確認を後でとっておこう。

「雪ノ下が体調を崩していてな、由比ヶ浜と見舞いに行ってたんだよ」

「えっ、雪乃さん具合が悪いの？　雪乃さんは大丈夫なの？」

小町の目尻が下がり、悲しげな表情に変わる。

「そこまで重くはないから、安心しろ。後で、お前がお見舞いに行って良いか聞いとく」

「うん、ありがとお兄ちゃん。でもね、お兄ちゃん、そんなことする勇気はないと思うけど、身体の調子が悪いのに、そこにつけこんだらダメだよ」

「大丈夫だ。これを機に、雪ノ下の弱みを握ることしか俺はしない」

「……ホント、捻てるね。お兄ちゃん」

夕飯を食べ、小町と一緒にテレビを見て、風呂を上がって部屋に戻るときには、すでに時計は、十時を回っていた。

普段なら何か本を読むか、ゲームをして時間を潰すが、雪ノ下の件もある。多少なりとも宗教ついて、調べておかないと、明日は何もできなくなる。

そう思って本棚を眺めてみるが、宗教関連の本なんて、今日日の高校生が持っているはずもなく、すぐに諦める。

近くの寺か、教会に行って、話を聞けばいいのかもしれないが、見知らぬ人間と、宗教について話を咲かせる自信もない。

「八方手詰まりだな……、いや、まだ三方くらいか」

思わず独り言を言いながら、ベッドに倒れ込む。白狐さんが要求してきたことは、俺たちの短い人生経験の外に位置していて、手を伸ばしたことがないからこそ、距離を掴むことができない。

そういえば、雪ノ下に小町のことを確認していなかったな。

ベッドから起き上がり、机の上に置いていた携帯電話をとり、メールの画面を開く。雪ノ下のアドレスは知っているが、今までメールを送ったことはない。

少し悩んだ後に、指を動かし文章を紡いでいく。

『小町がお前のことを心配している。怪異の件は小町に話してもいいか？』

一度内容を見直して、変なところがないのかを確認する。その後、送信のボタンを少しだけ躊躇して、そっと画面を指で押す。無機質な携帯電話の画面は、送信完了のアイコンも出すことなく、ただ明るい

緑色のふきだしを、ホップアップするだけだった。

なんとなく気恥ずかしくなってしまい、思わず本棚のマンガを一冊手に取る。机と一緒に備えられている、木製の椅子に腰掛け、マンガを開く。

ページをめくり、絵と文字をなぞっている手を、ふと止める。

机の片隅に置いていた携帯電話から、着信音が流れている。雪ノ下から返信が来たのかと思ったが、すぐに途切れず、そのまま流れ続ける。

あまり聞いたことがないから、覚えていなかったが、そういえば電話着信の音楽は、こんなものだった。

携帯電話を取り上げ、画面を確認すると、雪ノ下の名前が無機質に表示去れている。

「……もしもし」

『もしもし、比企谷君の携帯で正しいかしら？』

雪ノ下とメールのやりとりをしたことはないし、電話なんてもってのほかだ。電話で聞く雪ノ下の声は、いつもよりも少しだけ高く、聞き取りやすい声だった。

「ああ、比企谷八幡で合っている」

『……そう。先ほどのメールの件だけれども』

「小町はお前の世話になってるし、できればお前のお見舞いくらいは、

させてやりたいんだが……」

雪ノ下が電話越しに考えているのが、息づかいで分かる。そういえば、俺たちがお互いの呼吸が聞こえるほど近くで会話をしたことがない。いつもある程度の距離をクッションにしながら、話をしていた。

俺たち二人は、物理的な距離は遠く離れているのにも関わらず、今まで一番近づいて言葉を交わしている。そう考えると、どこか不思議な気持ちに包まれるとともに、心臓の鼓動が早まっていくのを感じる。

『そうね……。小町さんが心配をしてくれているなら、私も直接お礼を言いたいわ。けれども、怪異のことを話すことはやめておくわ。怪異に行き遭った人は、その後も怪異に惹かれるそうじゃない』

臥煙さんも、似たようなことを言っていたな。噂が噂を呼ぶ。怪異を知ってしまえば、話さずにはいられない。人の口に戸は立てられないように。

「そうだな……。悪かったな」

『いえ、小町さんが心配をしていると聞いて、嬉しかったわ』

そこで会話が途切れ、俺も雪ノ下も黙ってしまう。リビングから漏れてきたテレビの音声が、左耳から良く聞こえてくる。

『……ねえ、由比ヶ浜さんは何か言っていた？』

「心配をしていた以外には、特に何も……」

『あなたにも、由比ヶ浜さんにも迷惑を掛けたわね』

「あいつは別に、迷惑なんて思ってないぞ。ただ、心配をしているだけだ」

「それでも、負担を押しつけたことには、変わりないわ」

『お前だって言っていただろ。自分の痛みは、自分だけのものだって。だからあいつは、勝手に手を出して、自分の意志で背負ったんだよ』

由比ヶ浜は、そういうことを無意識に分かっているやつだ。自分が心配だから、手を貸して、一緒に泣いて、次の日に仲良く笑えるやつなんだ。そこで自分が傷ついても、誰かのせいにしたりしない。

だが、それ以上の言葉は紡がない。雪ノ下ならば、残りは行間で理解できるはずだし、そもそも雪ノ下が自分で気付くべきだ。

再び俺たちの間を沈黙が支配する。どういうわけか、今度はリビングから響く声は、俺の耳には届かなかった。

『……小町さんと、喧嘩をしたことはある？』

少し躊躇した、ささやくような声が、俺の耳に流れてくる。

「めちゃくちゃあるぞ。高校に入ってからはしなくなったが、俺が中学の頃なんて、週に一回は喧嘩してたな」

『どんな風に仲直りをしたの？』

「大体は俺から謝ってたな。喧嘩のきっかけなんて小さなことだったから、俺が謝って、小町もそれに合わせて謝って、喧嘩両成敗みたいな感じだ」

『……そう、やっぱり仲が良いわね』

その声音は柔らかく、電話越しに雪ノ下が優しく微笑んでいるのが想像できた。

「お前は、陽乃さんと喧嘩をしたことがあるのか？」

いつものように、ここで話を終わっても良かったのかもしれない。ただもう少しだけ、雪ノ下と話をしてみたくなった。

『比企谷君と小町さんのように、喧嘩したことはなかったわ。いつも姉さんが私をからかって、それを私が無視していただけよ』

それ光景は、俺が初めて陽乃さんに会ったとき近いものだろう。

ただ、この前に陽乃さんの性格の一片に触れたときに感じたが、陽乃さんは雪ノ下のことを嫌ってないと思う。少し歪んではいるが、それでも姉として、妹のことをしっかりとみている。

『だから、姉さんと仲直りをしたこともないわ。そんな関係が当たり前だったから、喧嘩にもなっていなかったのかもしれないわね』

雪ノ下は、自虐的に呟いた。

深く椅子に腰掛けていたのを、浅めに座る。それまで背中に当たっていた、堅い木の感触が首筋へと移り、視線が天井へと向かう。

「陽乃さんと、怪異について何か話をしたのか？」

『ええ……。ただ、姉さんは私を責めることをしなかったわ』

そういえば陽乃さんは、雪ノ下が原因だと気付いていながら、雪ノ下を手伝って欲しいと言っていた。ならばきっと、そんな対応をしていてもおかしくない。

『だから……、兄妹でしっかりと仲直りがことが、羨ましいと思ったの』

それは、雪ノ下にしては珍しく、羨望の色が混じった言葉だった。

ならば、たまには俺も、柄には無いことを言ってみようと、どういうわけか思った。

椅子から立ち上がり、ベッドの上に腰を下ろす。そして背中を壁にべったり付けて、体育座りをする。そうしてやっと、早まっていた心臓が落ちつき始める。

「……むしろ俺は、お前に憧れていたぞ」

『それはどういうこと？』

雪ノ下の声が、険しいものに変わる。その声に一瞬、身がすくんだが、それでも続ける。

「お前の正しさに、惹かれていたんだよ。だから勝手に理想を重ねて、憧れてたんだ」

『……あ、あなた、自分が何を言っているのか分かっている？』

「……ほっとけ。でもやっぱり、違うんだよな。お前だって、普通の人間なんだよな。普通に怒って、当たり前に笑って、たまに人を羨んで、

時々嘘をつくんだよな。……勝手に神様みたいに、思っちゃいけなかったんだ」

雪ノ下は、俺が何について、言及をしているのか気付いているだろう。

これはある種の懺悔だ。過去をやり直すことはできないから、ここで雪ノ下の許しを得ようとしている。

『そうね、私も隠してはいけなかったし、もっと比企谷君と話し合えばよかった。そうすれば私たちはもう少しだけ、優しい関係になれたかもしれないわね』

「そうかもしれないな」

これはもしかしたらの話だ。覆水は盆に返らないし、起こしてしまったことは、どうしようもない。お互いにそのことを分かっていながらも、話さずにはいられない。

「だからね、比企谷君……。もう一度、私たちの関係を始めましょう？」

雪ノ下が、一度大きく息を吸うのが聞こえる。

「比企谷君。あの時はごめんなさい。謝るのが遅くなったのも、本当に申し訳ないわ」

……その声は、俺が知っている雪ノ下の声で、もっとも真摯だった。

「俺の方こそ悪かった。雪ノ下に俺の理想を勝手に押しつけていた」

雪ノ下の言葉に押されたのか、ずっと言わなければいけないと思っていた言葉は、すんなりと口から出た。

そうして俺と雪ノ下は、ようやく向き合うことができたように思える。

いろいろまちがえて、すれ違って、迷って、ようやく俺たちは、お互いの姿を捉えることができたのだ。

『……私思うのだけれど、たぶん私たちが友達同士であったのなら、こうはならなかったと思わない？』

「そうだな……」

雪ノ下が何を言いたいのかは、とっくに分かっているが、それを指摘しない。というかあいつ、人を誘うのが下手すぎるだろ……。

『だから比企谷君、……私と友達になってはくれないかしら』

それは、俺がずっと誰かに言ってもらいたくて、でも誰にも言ってもらえなかったから、色々な理由をつけて、いつの間にか諦めていた言葉だった。

心臓が早鐘を打っているのが分かる。頬を触ってみると、火傷しそうなくらいに熱かった。鏡を見れば、きっと真っ赤な顔をしているだろう。

「お、俺も……、お前と友達になりたい」

上擦りそうになる声を抑えながら、俺もその言葉を口にする。言葉というのは大事だから、しっかりと雪ノ下に伝わるように言う。

「そう……。これで、私たちは友達ね」

ずっと望んでいたことは思ったよりも簡単で、しかし心の中に温かく、ふわふわしたものが広がっている。

『早速で悪いけれども、一つお願いをしてもいいかしら？』

「できる限り、簡単なやつで頼む」

『ふふっ、あなたの身体一つあれば足りるから、安心しなさい』

一体何をやらされるんだ？　俺を生贄に捧げて、何か召還でもするのか？

『ねぇ、比企谷君。私に憑いた怪異を祓うのに、手を貸してはくれないかしら？』

「……ははっ」

雪ノ下の言葉に思わず、笑ってしまう。

『何がおかしいの？』

「い、いや、やっぱりお前は、雪ノ下だなって思ってな」

『ごめんなさい、あなたが何を言っているのか、全く分からないわ』

相手に全てを任せるわけではなく、本人の問題は、自分で解決させる。それが奉仕部の、いや雪ノ下の考えだった。

誤解をしている部分はあったけれど、それでも、しっかりと雪ノ下を知ることができていたことが、嬉しかったのだ。

色々とまちがえていた俺たちだったが、それでもその中にも、正しいことがあって、俺たちの約半年間は、全てすれ違っていたわけではなくて良かった。

「大丈夫だ。俺の勝手な感想だ」

『そう、ならいいわ。また今度、その感想とやらをしっかり聞かせて頂戴』

……やっぱり間違えたかもしれない。

『……それで、返事はどうなのかしら』

そういえば、まだ言ってなかったな。ここまで雪ノ下に色々言っておきながら、正直に言うのはどこか恥ずかしい。

「それじゃあ、また明日」

きっと雪ノ下なら、この意味を理解してくれるだろう。

『おやすみなさい、比企谷君。また、明日』

雪ノ下は優しく、慈しむような声で挨拶をした後、通話を切った。

俺の意識が眠気によって奪われるまで、その声はしっかりと携帯電話をあてていた、右耳に残り続けていた。

ゆきのフォックス　其之拾弐

翌日の日中、なぜか平塚先生に、職員室へ呼び刺される。

勝手知ったる職員室とまではいかないが、すでに何回も呼び出されると、流石に周りを見渡すくらいの余裕が出てくる。

職員室は、教頭の机を上座にしながら、二つの机が向かい合う長い列が四つ作られている。教員の中では、比較的若い部類にはいるからか、平塚先生のデスクは、入り口に最も近い列に位置をしていた。

視線を巡らし、平塚先生が使っている机を観察すると、授業で配られる小テストや、文房具、メモ帳などが、あちこちに置いてある。教師という仕事柄、プリント類が多くなるのは仕方ないが、まぁなんというか……乱雑だった。机の上を探しても、ペン立てがないのはなぜだろうか？　も、物を取りやすく配置してるんだよな、たぶん……。

ふと隣の机に目を移すと、Ａ４のファイルが数枚と、ペン立てが置いてあり、どこかの机とは対照的に、整然とした机だった。

確かここは、三ヶ月前に結婚した、世界史の時田の机だったな。なるほど、これが持つものと持たざるものの違いということか。俺は世の中は残酷さを、また一つ知ってしまったのか……。なぜ差別が起こるのか、なぜ格差が生まれるか、なぜ結婚できないのか。その答えは、この二つの机に隠されていたのだ。この発見をするのに、尊い犠牲も存在した。だが俺は、この経験をしっかりと生かしていこう。専業主夫になるために、整理整頓だけは欠かさず行うことを平塚先生の前で誓うことが、俺ができるせめてもの、恩返しであろう。そしてそれがきっと、犠牲になった人への、弔いとなることだろう。

ありがとう、平塚先生。ありがとう、時田。俺はこの発見を、世の中の未婚女性のためになることを信じている。

「……比企谷、今おかしなことを考えなかったか」

思わず胸の前で、十字を切っていた。アーメン。

「いえ、何も。『結婚できない女、できる男』のタイトルで、本でも書こうかと思っていただけです」

すると、ただでさえ恐ろしい平塚先生の目つきが、目尻を上げ、さらに険しくなる。おそらく無意識だろうが、指で机をとんとんと叩いているのがとても怖い。

「やはり、今日の比企谷はどこかおかしいな……。授業中にもにやにやと笑っているし、いつもの保身じみた言葉も言わない」

「先生もそんなことを言うんですね。由比ヶ浜にはにやにやしてキモいと言われて、川崎からは全力で引かれて、海老名さんからは葉山への同性愛を疑われ、戸塚には可愛いって言われたんですよ。……ふへへ」

思わず顔が綻んでしまう。

今朝、戸塚と会ったときに、「おはようっ！」と鈴が鳴るような声で挨拶をされたと思ったら、戸塚はじぃーと俺の顔を眺めてきた。それだけで俺の心臓ははち切れんばかりに、リズムを打ち始めた。それから戸塚は三十秒ぐらい経った後、「今日の八幡は、笑顔いっぱいで可愛いね！」と花が咲くような笑顔で告げてきた。幸せって身近な所に落ちているもんだな。

「本当にどうしたんだ、比企谷？　何か良いことでも、あったのか？」

平塚先生の声が、こちらを案ずるものに変わってきたのに気づき、緩んでいた表情を元に戻す。

「良いこと、ですか……。まあ。そんな感じです」

昨夜のことは、ことさら吹聴するつもりもない。良いことだという点にはまちがいはないだろうが。

「ふむ……」、平塚先生は、思案顔になって、なにやら考えているかと思ったが、すぐに表情を柔らげる。

「少しは君も成長したじゃないか。素直に喜べるなんて、そろそろ高二病も卒業かもしれないな」

「あともう半年すれば、高校三年になりますしね。俺も成長しましたし、先生もそろそろ結婚で……ぐぇ」

そこまで言って、腹部に鈍い痛みが走るとともに、続けざまに耳を何かが掠める。視線を横へ向けると、いつの間にか平塚先生の腕が、俺の肩の上を通っている。

視線の先で、雀が木からどこかへ飛び始めたのが見えるが、たぶん何も関係はないだろう。入り口付近で職員室に入ろうとした女子生徒が悲鳴を上げながら引き返したり、近くの教師たちがなぜか、明後日の方向を見ながら仕事をしているのも、おそらくそれも偶然であろう。

「ところで比企谷、『パノプティコン』という言葉を知っているか？」

平塚先生が正拳突きの体勢のまま尋ねてくる。

「なんですかそれ？　フランスの民族料理かなんかですか？」

こちらが返しても、平塚先生は体勢を崩す様子を見せない。腰が入った綺麗な型であるが、腰に負担がかからないか心配である。

「一望監視施設のことだ。イギリスの哲学者のベンサムが発案した刑務所の一種だ。功利主義ぐらいは知っているだろう？」

確か最大多数の最大幸福だったか。社会全体の幸福の数を最大化することを目的とするのだったはずだ。Ｊ．Ｓ．ミルがその後に精神的快楽の質について、論じていたな。

「何でそんな刑務所の話をするんですか？」

そろそろ先生の腕がプルプルし始めている。俺の精神衛生上と先生の肉体的にも、もうやめたらいいと思うのだが……。

「まぁ、聞け。その刑務所は、建物を円形に建設し、その中心に監視棟が設置したのだよ。ドーナツをイメージすると分かりやすいだろう。すると囚人たちの部屋からは看守の姿を見えない、しかし看守からは、二十四時間いつでも見られるような監視棟の作りだった。それにより囚人は常に看守の視線を、意識せざるおえなくなった。囚人からしてみれば、何か不穏なものを企てようにも、いつ看守が見ているか分からないからな。その結果、囚人はどうなったと思う？」

「囚人が真面目な態度になった、ですか？」

「その通り。囚人はいつからか、看守の視線を自らの内側に作ってしまう。その結果、囚人の生活態度を改めるようになる」

なるほど。監視カメラ設置の理論に、似ているものがあるな。

「何が言いたいのか、よく分からないんですが……」

「つまりだ、私が比企谷を常に監視していれば、君のその態度も少しは治るのではないかと、考えたのだよ」

愛が……重い……。というか発想が怖えぇよ。メールもそうだが、将来ストーカーになりそうな発言は、遠慮して頂きたい。

「素直に謝るんで、不穏な発言に許してください」

「ならいい。今後も発言には気をつけろ」

「イエッサー」と答えると、平塚先生は腕を引き、再び座り直す。俺も一息つき、姿勢を直す。

「ところで、雪ノ下の様子はどうだ？　見舞いには行ったのだろう？」

話の内容からして、どうやらこちらが本題だったのだろう。

「体調自体は大分良いですね。ただ、学校に行くには、もう少しかかりそうです」

「ふむ、ならば学校側に、改めて私から報告をしておこう。……それで、雪ノ下はどれくらいで、来られそうだ？」

正直に答えていいか、悩む。怪異の件が解決する見通しは、全く立っていないが、そのまま伝えたら、学校側が何か動く可能性もある。

「まぁ、何とかなると思います。由比ヶ浜も俺も、手助けをするつもり

なので」

すると先生は、にやりと笑う。

「そうか、君も奉仕部の一員として、自覚で出てきたようでなによりだ。……話は以上だ。時間を取らせて悪かったな」

軽く挨拶だけをして、帰ろうかと思ったが、少しだけ驚かせたい気持ちがどこかから沸いてくる。結局この話を誰かにしたかったのかもしれない。

「まぁ……、友達なんで。雪ノ下を助けるのは当たり前じゃないですか」

そう笑顔で言って、回れ右をして出口へと向かう。

振り返った時に一瞬見えた平塚先生は、目を丸くして、口をぽかんと開けていた。どうやら、俺の企みは成功したらしい。

放課後の部室は、初夏の頃に比べると、大分様変わりしていた。

夏にあれほど自己主張の叫びを繰り返していたセミは、秋の夜風とともにどこかへ飛んでいってしまった。その変わりに、夏の間どこに隠れていたのか分からないが、秋の虫たちが夜の合奏に向けて、チロチロと音合わせをしているのが聞こえてくる。

それとともに、雪ノ下が休んでいるのもあって、俺たちの座る位置もいつもとは違ってきている。由比ヶ浜はなぜか、いつも雪ノ下が座っている席へ位置している。いつもの場所に、いるべき人間がいな

いというだけで、視覚に強烈な違和感を覚える。

そして、由比ヶ浜はいつもと同じように、ニコニコと笑っているのにも関わらず、周りの空間がいつもとはまるで違う。

今週は例年よりも気温が高くなり、三十度を越えるかもしれない、と言っていたお天気お姉さんの言葉に偽りはなく、今日の天気は、涼しい気候に慣れ始めていた俺を茹らせていた。それにも関わらず、この部屋で寒さを感じるのはどういうことだろうか。さっきから鳥肌が立ってしょうがない。視線を巡らせ、外の運動部を見てみると、蒸し暑そうに汗を流していた。どうやら、この異常気象はこの部屋だけらしい。

「ねえ、ヒッキー。あたしに何か言うことない？」

由比ヶ浜は先程と同じ言葉を繰り返した。

表情は先程と変わらず、機嫌の良さそうな笑顔を浮かべているのにも関わらず、言葉にどこか圧力を感じる。

肌に寒さを感じているのにも関わらず、冷や汗が一つ机へ滑り落ちた。

きっかけと言えば、やけに機嫌が良いことを、放課後にまで、由比ヶ浜からしつこく聞かれたため、昨夜の雪ノ下とのやりとりの触りだけを話したことだ。話をしている最中に由比ヶ浜は、「ふぅーん」だとか「へぇー」などと軽く相槌を打っていたかと思ったら、「あたしに何か言うことない？」と言ったのだ。

……どんな言葉を由比ヶ浜が求めているか、おおよその検討はついている。ただ、あの時は状況が状況だったのだ。素面の状態であんな

言葉を吐いたのならば、迷わず東尋坊へ向かっている。

なんとか上手な言い回しを考えていると、ドアを短く二回叩く音が聞こえる。

「どうぞ！」

すぐに返事をするとともに、椅子を動かして窓に背を向ける形で座り直す。おそらく阿良々木先輩だろうが、客人に対して背中で返事をするわけにもいかない。

「失礼する……、ってどうしてそんなに膨れてるんだ？」

俺は頬を膨らませていないので、由比ヶ浜の方を見てみると、見事にむくれていた。

……言わなければいけないことは分かっている。ただ、由比ヶ浜の態度に甘えていて、こちらの心づもりができていないだけだ。

「この件が終わるまでには、覚悟を決めるから、それまで待ってろ……」

恥ずかしいので頬をついて、そっぽを向きながらも、一言づつ、丁寧に言う。正直言って、これだけでも顔から火がでそうになる。さっきまで寒かった部室は、季節がまた夏へと戻ったかのように暑い。

だが、これが今の俺の精一だった。我ながらヘタレすぎて、涙が出てくる。

「うんっ！　待ってる」

由比ヶ浜が嬉しそうに返事をするので、さらに恥ずかしくなってしまう。視線の隅で阿良々木先輩が、にやにやと含み笑いをしていた。

それでも後悔はしていない。由比ヶ浜から俺は、色々な物をもらったのだ。雪ノ下と向き合ったように、由比ヶ浜とも、しっかりと言葉を交わさなければならない。くれたものを返し始めるには、少し遅いのかもしれないが、それでも遅すぎることはないだろう。

「話はそろそろいいのか？」

阿良々木先輩の落ち着いた声で、思考を止める。

「雪ノ下さんの解決方法について、集めた情報を擦り合わせよう」

由比ヶ浜は図書館から借りてきたのか、稲荷や宗教、浄土といった語句が入った本を、何冊か取り出し始めている。

「一つ、案があるんですけど、聞いてもらってもいいですか？」

その案は、俺の愚鈍な頭で考えた、ただの冴えないやり方だった。

ゆきのフォックス　其之拾惨

学校から徒歩で十分程、通学路としてよく使われる大通りから入り、細い道を何度か通り抜けた先、近くには青々とした竹林と古びた住宅しか見当たらない所に、件の神社はあった。

外から眺めても、神社の周囲に植えられた松と、小さな鳥居ぐらいしか見つけることができない。ただ、本来鮮やかな朱色で彩られているはずの鳥居は、所々が禿げ上がるとともに、残りの大部分も色あせてしまっている。

率直な感想を言ってしまえば、神様が住んでいるというよりも、妖怪か何かが住んでいた方が納得してしまうほどのみすぼらしさだった。雪ノ下は一体どうやったら、こんな場所に辿り着いたのかと思ってしまう。

「ここが、ゆきのんがお参りした所で合ってるんだよね？」

由比ヶ浜も、俺と似たような感想を抱いたのか、この場所に対してあまり良い印象を持っていないようだった。

俺が提案した策については、細かい部分を詰めなければならなかったものの、思いの外あっさりと、近日中に実行することが決定した。俺が奇策士として活躍する日も近いのかもしれない。

そのため、その詳細を詰めていくために、俺たちは白狐さんの元々の住処へと足を運んだ次第である。

鳥居をくぐり、がたがたしている参道を突き進む。本来ならば真ん中は神様の通り道になるため避けて通らなければならないそうだが、

持ち主がいないのだからこの際関係はないだろう。

境内には、石造りの参道の他には、朽ちかけて、今にも崩れそうな本殿と、設置されてから随分経ったのか、全体的に黒ずんでいる稲荷地蔵があるだけで、人工物は他に何も見当らない。

こうやって境内に入ってしまえば、周囲の音は、秋風が松を揺らす音によってかき消される。これだけ退廃していても、神聖さ生み出す要素はなくなっていないらしい。

このまま本殿を見てみようと思い、足を進めようすると、阿良々木先輩が近くに居ないことに気づく。

「なぁ、由比ヶ浜。阿良々木先輩を知らないか？」

「阿良々木先輩でしょ？　知ってるよ」

……会話がどこか噛み合わない。

由比ヶ浜は、俺の質問の意図が伝わっていないのか、首を傾げながら疑問符を浮かべている。

「そうじゃなくて……、阿良々木先輩が、どこへ行ったか知らないか？」

そう言うと由比ヶ浜は、辺りをきょろきょろと見渡すと鳥居を指さす。俺も目を凝らしてみると、阿良々木先輩は入り口で鳥居を眺めていた。何か思うところがあるのだろうか、そのまま動く気配が全くない。

「仕方ない、俺たちだけで、本殿を見に行くか」

由比ヶ浜が頷くので、本殿へと向かう。

木造の本殿は、雑誌で見るように塗装をされているわけではなく、むき出しのままだった。長年吹きさらされていたからだろうか、ヒノキのような、明るい色合いではなく、朽葉色になっている。まだ木が死んでいないからか、触ってみると若干湿っている。ただ、触ってみても、これが何の木でできているかは、さっぱり分からなかった。

せっかく来たのだから、賽銭でも入れようかと思ったが、賽銭箱も鈴もなく、建物の中が多少みることができるくらいだった。

そういえば神社の場合は、本殿と拝殿で分かれていたんだった。神様を祀るのが本殿で、人が参拝をするのが拝殿だったはずだ。そうすると、そもそもこの場所は、参拝客を対象としたものではないのかもしれない。

なんとなく振り返って、境内全体を見渡す。神社仏閣というと、落葉樹が植えてあり、秋には狂い咲く紅葉で溢れかえっているイメージが強かったが、ここには青々とした松の葉しか見えてこない。

だからきっと、ここは何も変わらないのだろう。春の包み込むような暖かさも、夏の降り注ぐ暑さも、秋の吹きすさぶ涼しさも、冬の突き刺すような寒さでも何も変わらない。百年前も百年後も変わらず在るのを想像すると、自分が遠くへ置き去られるような感覚にかられてしまう。

「特に、何もないね」

由比ヶ浜は俺と同じように辺りを見渡すと、そんなことを呟いた。

「まぁ、廃れていた神社わけだしな。それに主は今、留守しているからな」

主である白狐さんは、人間である雪ノ下に憑いている。いくら信者を増やすにしても、ここを留守にするようでは、何かダメなような気がするが、大丈夫なのだろうか。

ふと、阿良々木先輩が目に入る。今度は、稲荷地蔵の前でぶつぶつと独り言を言っている。

「阿良々木先輩、何やってるんだろうね？」

「……何だろうなぁ。何回か話して分かったが、あの人相当変わってるから、何をしててもおかしくないんだよな……」

「そうなんだよねー。影と話してたり、独り言を言ってたりしてるし。……あんまりヒッキーと変わらないね」

俺と阿良々木先輩を、交互に見ながら、なにやら不穏なことを言ってくる。

阿良々木先輩の独り言は、おそらく影に吸血鬼幼が住んでいるからだろう。創作での二重人格を現実にすると、おそらくこのような感じなのだろう。……あれ？　そうなると俺の方が、重傷じゃないか？

「だ、大丈夫だよ！　ヒッキーだって友達ができたし、真人間への道を歩いていけるよ！」

「友達って言ったって、人数はピッコロ大魔王の片手の本数以下なんだぜ」

あの「五秒で息の根を止めてやる」のシーンは、指が四本のままだったら、相当格好悪かったんだよな。片方の指を一本だけ立てているのは、想像するだけで笑いがこみ上げてくる。

そんな馬鹿な想像をしている内に、阿良々木先輩が俺たちの元へとやってくる。

「そうだっ、阿良々木先輩にも聞いてみよ？　そうすれば、ヒッキーとの違いが出てくるかもっ」

おい、馬鹿、ヤメロ。それはお前以外、誰も得をしない。

「阿良々木せんぱーい。先輩って、どのくらい友達いるんですか？」

その瞬間、時が止まった。

こちらへ向かっていた阿良々木先輩は、由比ヶ浜の言葉によって、足を釘付けにされる。少し離れた所に棒立ちしているのを眺めていると、「だるまさんが転んだ」をやっている気分になる。

由比ヶ浜は、自分の言葉の威力をようやく知ったのか、口角が上がったままの表情で固まっていた。声を掛けたときに伸びた手が、行き場をなくしたままでいる。

さっきまでの吹きかけるような風も、いつの間にか止んでしまっている。そうすると、この場所から雑音が一切なくなり、聖域としてのふさわしい雰囲気になる。

女子の言葉が時を止めるというのは、本当だったのか。そういえば俺も、何回か止められたことがあったな。「はぁ？」とか「何言ってんの？　チョーウケるんですけど」とか「キモっ！」とかな。男はいつ

か魔法使いになると言うが、女子はすでに魔法使いなのかもしれない。魔法少女とかあるし。

「ご、五人くらい……かな」

いち早く時間停止の鎖から抜け出したのか、阿良々木先輩がそんな寂しいことをおっしゃる。

その瞬間、俺の身体の縛りが解けるとともに、頬に何かがつたう。泣いてはいない、涙はすでに枯れている。首を巡らせると、由比ヶ浜の目から涙がこぼれるのが見える。五人という数は、俺からすれば途方もない数字だが、世間からみれば米粒ほどの小ささだろう。

「あ、安心してください……。ヒ、ヒッキーなんて女の子しか友達いないですし！　それに比べると全然問題ないですよ」

「おい、人をさりげなく貶めるな」

友達が女の子しかいないなんて、そんな寂しいことをいうなよ。死にたくなるだろうが。俺だって男の友達くらい……、くらい……。

……笑えよ、ベジータ。

「ああ、そうだな……」

何故か阿良々木先輩も傷ついていた。なんかもう、地雷しか踏んでないな。

「そ、そうだ！　阿良々木先輩は、この神社を見て、どうでしたか？」

「……まぁ、いいか。比企谷、お前の案は、どうやらこの場所には最適

だぞ」

微妙に引きずった表情のまま、阿良々木先輩はそんなことを言った。それとともに、俺の策が実行に移されることが、この瞬間に決定した。

ゆきのフォックス　其之拾漆

秋の日の釣瓶落とし、という言葉がある。秋は陽が暮れるのが早いという意味だが、こうして体験してみると、成る程その通りだなと思う。

翌日の午後七時三十分。空に焼き付いた橙色も、いつの間にか深い闇の色に染まりながら、街へと舞い降りている。少し前のこの時間なら空に明るさが残っていたが、今では黒く塗られたキャンバスに、星の輝きが顔を覗かせている。

空を見上げて夏の大三角形を探してみるが、なかなか見つからない。二周ほど体を回ってみても見つけることができなかったので、真上を仰ぎ見ると、一際輝く一等星が目に入る。織姫と彦星も、随分と高い所に上ったものだ。

まだ陽が落ちてからあまり経っていないからか、見える星が少ない。まだ空気が澄む季節でもないため、もしかしたら真夜中になっても、星空はこのままなのかもしれない。

そのまましばらく、爛々と輝く星空を眺めていたが、首が痛くなり始めたので、視線を元に戻す。しばらく首を傾けていたせいか、少し血が上り頭がふらふらして、近くの電柱が少し曲がって見える。

「少し待たせたか？」

声が聞こえた方に視線を巡らせると、いつも通り学生服を着た阿良々木先輩と、見知らぬ金髪の美女が歩いて来た。

その美女の金髪は目がくらむほど輝いていて、思わず惹きつけられ

てしまう。近くに街灯はあるものの、その金髪の鮮やかさとは比べ物にならない。

「なんじゃ？　ゾンビが米を浴びたような顔をしおって。儂の美しさに見蕩れおったかの？」

「かかっ！」と、その女は凄惨に笑う。

その言葉遣いで、目の前の美女が、あの吸血鬼幼女ということに気付く。つーか変わりすぎだろう。胸とか、おっぱいとか、乳房とか、あと脚。……成長期ってすげぇなあ。

吸血鬼の隣で当たり前のように立っている阿良々木先輩も、いつもと若干雰囲気が違っている。どこか影を帯びているというか、どこか妖しく、見た目はこの前と同じなのにどこか遠くにいるように錯覚させられる。

「僕たちの準備は整ったぞ。もう一度、現地で待機していればいいか？」

「ありがとうございます。先に向かっていて下さい」

「……全く、この儂と我が主様を使いっぱしりにするなど、貴様はどれほどのことをしているのか分かっておるのか？」

吸血鬼は腰に手を当てて、呆れた表情でため息をつく。その立ち居振る舞いの一つ一つが高貴さに溢れているが、その背後には本来あるべき影はない。どんなに美しくても、これは吸血鬼なのだ。ただ、吸血鬼という人の理の外にいるはずなのに、その動作が人間の気品を持っているなんてどこか不思議で矛盾しているように思える。

「分かりませんね。だから、頼めるんじゃないですか？」

「かかっ、それもそうじゃの。儂らにまかせて、後は楽しむことじゃの」

今度は小気味よく笑う。そしてその笑い声を残して、いつの間にか吸血鬼と阿良々木先輩の姿は俺の目の前から消えてしまった。それこそ霧になってしまったかのように、どこかへと消えてしまった。

今までなら、こんな現象を目の当たりにしただけで狼狽えていたが、そういうものが在ると知るだけで意外と受け入れてしまう。案外、人の頭は適当に出来ているのかもしれない。

それから踵を返して、待ち合わせの場所へと向かう。いつもは意識をしなかったが、一歩ずつ影をしっかりと踏み、自分が人間であることを確かめながら足を進める。

あまり早く着くと、二人きりで誰かと話さなければならないため、到着時間には気をつける。早すぎてもいけないし、遅すぎると置いていかれる可能性もある。……めんどくせえなぁ。

待ち合わせの時間ぴったりに集合場所へと向かうと、由比ヶ浜と三浦、海老名さんが先に着いていた。

「あ、ヒッキー。こっち、こっち！」

由比ヶ浜が手招きをしてくる。

女子は三人とも一旦家に帰って着替えたのか、全員私服でいる。由比ヶ浜の私服も露出度が高いと思っていたが、三浦は更に高かった。なんで服を着ているのに、不特定多数の視線からの防御力が低いんだ

よ……。

「なんだ……ヒキオかよ」

三浦は携帯電話をイジっていた手を止め顔を上げたが、すぐに視線が画面へと戻る。

その隣で海老名さんが、眼鏡を光らせて、いやらしい笑顔を浮かべている。おそらく眼鏡は、街灯の光のものだろう、そう信じたい。最近気付いたが、この人が笑顔の時はろくなことを考えていない。藪をつつくと、とんでもないようなものが出てきそうなので、迂闊に話しかけてはいけない。未知の祝福？　そんなものは存在しない。

「ヒキタニ君！」

そんな俺の心情をいざ知らず、海老名さんは俺に話しかけてくる。

「分かってる、私は分かってるよ。夏に持て余したリビドーを発散できなかったんだね。だから葉山君とか戸部君を呼んで、過ぎ去った夏を取り戻そうとしたんだよね？」

一息で思い切り言うと、「ぐへぇ」と人のものとは思えない呻きを発する。怖えぇ、マジで怖えぇ。なんで女子がいるのに、俺がそんなことをすることを思いつくんだよ。

何を言っても無駄なような気がするので、物理的に離れた場所に落ち着ける。由比ヶ浜たちは、三浦が携帯を触っているものの、適度に会話をしながら時間を潰していた。……さすが三浦である、あれ三浦以外がやったら絶対怒るだろうな。

その後、街灯の光に惹かれてきた虫を少しの時間だけ見ていたが、

すぐに葉山と戸部がやってくる。

「ウィース。お、ヒキタニ君いるじゃん。珍しいー」

「ヒキタニ君も来るって、さっき話をしてたよな。……まぁいいや、遅れてごめん！」

戸部は相変わらずうるさく、やかましい。……というか人をＳＲガチャみたいに言うなよ。課金はしてくれないんだろうなぁ……。

葉山と戸部は、部活が終わってからどこかで時間を潰していたのか、制服姿のままだった。制汗スプレーでもかけてきたのか、ほのかに人口的な柑橘系のにおいが漂ってくる。

「隼人ー、ホントに待ったよー。こんな暗いとこに女子を待たせるなんて、信じられなーい」

三浦は、さっきまでつまらなそうに携帯電話をイジっていたとは思えないほど、科をつくりながら葉山に話しかける。猫をかぶるというか、別人格だよな。

「じ、じゃあ優美子、そろそろ行こっか？」

由比ヶ浜の言葉に、「よし、行くか」と何故か葉山が答える。並の男なら三浦は威圧するだろうが、葉山の場合は「そーだね」と言いながら、葉山の隣で笑っているだけだった。……マジで誰だよ。

「ところでさー、今から何しにいくん？」

「そういえば、あーしもよく知らない」

……おい、知らないのかよ。由比ヶ浜の話だと、葉山を通して聞いていると言ってたぞ。

葉山へ抗議の意味でにらみつけるが、葉山の方も肩をすくめていた。どうやら由比ヶ浜の話は本当らしい。

「恋愛成就の神様がいるらしいから、みんなでお参りに行かないかって、話をしただろ」

葉山がご丁寧に説明をしてくれる。

恋愛成就の神様か、世界のどこかにはいるんじゃないか？　あまり働いてはくれないだろうが。

「そーだべ、そーだべ。それに夜のお参りって、どこか肝試して的で面白いべ」

ちなみに、由比ヶ浜には吊り橋効果の話を、それとなく伝えるように言ってある。俺の言ったことをそのまま伝えると、不審に思われるかもしれないので、由比ヶ浜に情動と身体の関係性を懇切丁寧に説明して、アドリブで説明するように言ってある。その方が伝聞調が出るので、頭の中に刷り込みやすいだろう。

そんな話をしながら歩いていく一行を、後ろから眺める。残暑がまだ続いているが、それでも夜になると夜風が冷たく肌を撫で、心地よい気分にさせられる。

これだけ涼しいと、納涼には時季外れかもしれない。まぁそれでも、こいつらには楽しんでいってもらおう。

ゆきのフォックス　其之拾伍

夕方の神社は、それだけで幻想的な雰囲気を感じるが、夜の神社は何か物物しい。空から月の光が射し込んではいるものの、境内全体の包み込む暗闇には押し負けていて、辺りの輪郭がかろうじて見えるだけだった。

境内に置かれた四体の稲荷地蔵も昼間とは違い、少し離れているだけで今にも動きしそうな雰囲気を醸し出している。

視界が悪いせいか、周囲の音がよく聞こえる。昼間は何とも思わなかった風も、夜になると松を揺らしながら不気味な音を奏でている。昨日聞いていたときは雅にも聞こえていた松が揺れる音は、時間が経つとともに不協和音へと変わっていってしまっていた。

「やべぇよ！　マジで先が見えねぇ。ほんとにでここでやんの？　マジで怖ええ……」

戸部がやかましく騒ぎ立てているせいで、俺の恐怖心がどこかに飛んでいってしまった……。

葉山は割と平気そうにしているが、女性陣は三人とも怖がって、微妙に震えている。いつもは気丈な三浦も、少し腰を引きながら葉山の袖を掴んでいた。

「というか、夜に来たのが間違いだったな。せっかく来たんだし、お参りだけはしっかりやろう」

「で、でも、マジでやべーよ、隼人君ぜってえ何か出るって！」

「大丈夫だろ、別に変なことをしなければ、問題はないよ」

葉山がそのまま本殿へ向かうと、残りやつらもしぶしぶ、といった形で葉山についていく。

六人分の土を踏みしめる音が、発したと同時に暗い土へと吸い込まれていく。土の中はすでに秋が到達しているのか、靴を履いているのにも関わらず、冷たさが靴を通して足に訴えてくる。

もともと小さい神社であるため、境内に入ってしまえば本殿までは大して時間がかからない。

本殿に着いたはいいが、鈴も賽銭箱もないため、二礼、二拍手、一礼を本殿へ向けて行うことが決定し、とりあえず二礼だけをする。

葉山たちはその場の雰囲気もあって、綺麗な礼をしているが、ここにいた神様は神様なので、俺は真剣に礼をすることができない。メッカよろしく、雪ノ下のマンションに拝礼したほうがまだ効果がありそうだ。

二拍手の鋭い音が境内に響くと、すぐに沈黙が訪れる。

特に願うこともないし、願った所でろくなことにならないので、夕食はラーメンが食べたいことを祈る。小町が作っておいてくれないかなあ……。

その後、ゆっくりと礼を一つして参拝は終わる。

「いやー、案外簡単だったべ。隼人君は何をお願いしたん？」

「……大したことじゃないさ」

「いやいや、そんなことないって。手を合わせてる時に横目で見たら、隼人君スゲー真剣な顔してたし」

「健康祈願とか、そんな感じだよ……」

「いやいやー。違うっしょ！　優美子も気になるっしょ？」

「……戸部、ウザい」

三浦に注意されると、すぐに戸部は押し黙る。

・

「まあでも、これで目的を果たしたわけだし、帰りにどこかに寄るか？」

葉山は腕時計をこちらに見せてくる。

ぞろぞろと来た道を引き返す葉山たちの、一番後ろにつく。そのときに由比ヶ浜が心配そうな目をしていたので、軽くウインクをしてやる。……思い切りドン引きされたな。

深呼吸を一つする。演技はあまり必要ではないが、それでもあまり不自然では怪しまれるので、気をつけなければいけない。

少し暗くなったので空を見上げると、空にぽつんと浮かんでいる突きが、雲によって隠されていた。突きの光が弱くなったことにより、この辺りが、深い闇に包まれる。

どうやら月の神様は、俺の味方をしてくれるらしい。

葉山たちが稲荷地蔵を過ぎた後、少し後ずさる。そして静かに助走をつけると、思い切り稲荷様と台座の境目を蹴りつける。

足に鋭い衝撃が走るとともに、盛大に音を立てて地蔵が崩れ落ちる。台座の一部がえぐれるとともに、台座に乗っかっていた稲荷様は地面に落ちて胴体と頭、そして四肢が綺麗にバラバラになっていた。

……おい、俺はこんなスーパーサイヤ人みたいな芸当を頼んだわけじゃねぇぞ。

石の固まりが落ちる音というのは、想像以上に大きいらしく、全員が恐ろしい速度で振り返ると、崩れ落ちた地蔵と俺を見比べる。

俺は俺で、想像以上に見事に崩れ落ちてしまったことへの驚きからか、何故かえぐれている部分を丁寧に撫でていた。流石にここまで破壊できるとは思っていなかったので、心苦しい。

「ヒ、ヒキタニ君……、今何したん？」

「いや、少し肩が当たって……」

どう考えても肩が当たっただけじゃ起こらないことが起こったが、それは気にしない。とりあえず、このまま乗り切ることの方が重要だ。

「というか、これやばくない？　何かたたりとかありそう……」

海老名さんが、不安そうに散らばった破片を手にとる。

「これって、そんな簡単に倒れるものじゃないべ」

戸部がそう言いながら、稲荷様の一体にそっと触れる。撫でるように稲荷様の足に触れたのにも関わらず、稲荷様の足は簡単に折れ、胴体が無惨にも地面へ墜落する。

「へっ？」

戸部の驚いた声と、稲荷様が割れる短い音が入り交じる。二体も地蔵が割れてしまったせいか、ほのかにコンクリートの不快な臭いが鼻腔を刺激する。

「ちょっ、戸部、あんた何やってんの？」

流石に焦ったのか、三浦が慌てた声を上げ、四肢がもげている稲荷様に駆け寄る。

「いやいやいや、何もやってないって！　触ったら自然に倒れただんだよ！」

「マジでどうすんの？　こんなことしちゃって大丈夫なの？」

「だから、オレは何もやってないんだって？」

「とりあえず、一旦落ち着こう」

戸部と三浦のやり合いを、葉山が間に入って諌める。

「触ったら壊れるくらいだから、神主さんに話をして、謝れば分かってくれるかもしれない」

その時、境内に一陣の風が吹き付ける。その風は俺を包み込むよう

に撫でつけると、ただひたすらに松を揺らし続ける。

ぼうっと稲荷様のかけらを触っていた海老名さんであったが、不意に立ち上がり松を見上げると、

「ねぇ……、風が止まない」

その言葉にここにいた全員が空を見上げて、松を仰ぎ見る。先程の風は未だに止むことが無く、気味の悪さを境内に満たしていく。

「ちょっと、ちょっと！　おかしくない？」

神社の外、月の光が届かない先で、何かが軋む音が聞こえてくる。一つ、二つ、三つと、方向を変えながらその音が近づくとともに、女の甲高い悲鳴も境内に響き始める。最初は境内の東、ぽつんと松の間隔が開いている所。次は北西、ここからでは本殿を挟んだ先へ。その叫びは止むことがなく、だんだんとその間隔が短くなっていく。

いくら待っても、風が止まらない。女の叫び声は、さらに悲痛さを増しながら、より大きく、より痛みを訴えかけるようにわめき続けている。一瞬だけ近くで聞こえた気がして、全員が一斉に振り返るが、そこには誰もいない。

ついには、俺たちの周囲のあらゆる方向から、声が聞こえてくる。声からして、同じ女のはずなのに、全く同時に左右から聞こえたかと思えば、次には真上から絶叫が降ってくる。

「ねぇ！　どうなっているの、これ？　どうなの？」

三浦がスカートの端を押さえつけながら叫ぶが、すぐに言葉が地面へと吸い込まれていく。

風がさきほどよりも勢いを増してきている。近くの竹林から飛んできたのか、青葉が宙を舞っていた。どこかで風同士がぶつかって上昇しているのか、葉っぱがひらひらと上に向かっている。

「もう、なんだよ！　これ？　謝る、謝るから、許してくれよ！」

戸部のその言葉が通じたのか、さっきまで強烈に吹いていた風がいきなり止み、境内を再び沈黙が訪れる。

「終わったのか……？」

葉山はすぐに辺りを確認しながらつぶやく。

「隼人ー、もう帰ろうよー、怖いー」

三浦はそういって、わざとらしく、大げさに葉山にもたれ掛かる。

俺も怖いー。あいつの変わり身が早すぎるだろ。俺じゃなきゃ見逃しちゃうね。

葉山は三浦のその行為を当たり前に受け止めると、俺たち一人ずつの顔を順々に見渡すと、

「……今日はもう帰ろう。変なことに付き合わせて悪かった」

などと宣った。自然と責任を持っている所が葉山らしい。

「そうだべ、そうだべ。まったく、ヒキタニ君のせいで、大変な目にあったわ」

戸部が恨めしそうな声音で、怨めしそうな視線をよこしてくるが、無視する。

そのまま参道を通って神社から出ようとすると、上空で松の葉が揺れる音が聞こえた。また風でも吹いたのかと思っていると、もの凄い轟音がいきなり響くとともに、地面を通して微細な揺れが足下から伝わってくる。

何事かと思って振り返ると、俺の腹周りほどある松の木が、根本から折れている。枝が地面に叩きつけられせいか、折れて周辺へと飛び散っていた。大木の周りに細かい枝が散乱している様子は、どこか血まみれになった人間の死体を連想してしまう。

……流石にビビった。これは、人が死んでもおかしくないようなものだ。

この事態には、葉山も海老名さんも口を開けて惚けている。

由比ヶ浜も同じく惚けていたが、何かに気付いた様にはっとすると、倒れた松の根本を指さす。

折れて鋭く尖っている幹のすぐ側、周りが暗闇に包まれている空間に誰かが立っている。

そいつは、何もかも雪のように真っ白だった。肩まで伸びた透けるような髪も、こちらをじっと見ているその瞳も、整った美しい顔立ちも、そして身に纏っているその着物も、すべてが白に包まれている。

この暗闇の中で月光に照らされている彼女は、こちらを一瞥すると、丁寧にお辞儀をした。

するとその時に、ピンと立った白い狐耳が目に入る。

そしてお辞儀から体を起こすと、目を細めてこちらに微笑み掛けてくる。その笑顔があまりにも美しくて、俺は思わず見惚れしまった。

「で、出た――！」

戸部が叫びながら逃げ出すと、残りの連中もそれに合わせたかのように、神社の外へ走って逃げる。

俺は未だ、白い女を見続けていたため、一人境内へと取り残される。

境内の中は散らかっているものの、風はやみ、少し前の神秘的な空間へと戻る。

念のために一旦道路に出て、葉山たちが遠くへ行ったことを確認にして、境内に戻る。改めて道路から見ると、神社はまるで、台風が来たかのような有様になっていた。倒れ込んだ松、地面へ落ちてバラバラになった稲荷地蔵、境内に散乱する竹の葉といった具合である。おまけに、妖怪みたいなやつがいるし……。

「お前が来るなんて、俺は聞いてないんだけどな」

「あら、たまたま比企谷君の所だけ、連絡がいって無かったのかしら？」

「どう考えても意図的だろ……。で、お前その白さは何なの？　腹の中と正反対になる薬でも飲んだのか？」

一目見たときには髪の白さに思わず目がいったため、気付くのが遅れてしまったが流石に気付く。狐耳がなければ、雪女でも通るレベル

で似合っていたな。

「髪や瞳などは、白狐さんのおかげよ。阿良々木先輩に聞いた所によると、症状が進行すると身体に変化が起こるらしいの」

雪ノ下は、髪をかきあげながらそう言った。

近くに寄ってみると分かるが、雪ノ下の白い髪は絹のように細く、髪の一本一本が綺麗に舞っている。

「この着物は忍さんに創ってもらったわ。吸血鬼って何でもありなのね」

雪ノ下は両手を広げ、こちらに着物の袖を見せてくる。遠くからでは分からなかったが、雪ノ下の着ている着物には、銀色で花びらの模様が施されている。

「全くな、ありゃ反則だ。俺の策のほとんどが、あの吸血鬼幼女に頼りっきりだし」

発案者が具体策を丸投げしたわけだ。……死にたい。

折れた松に腰掛けて、一息つこうかと思ったが、雪ノ下を見てとりやめる。あの着物で腰掛けたら、せっかくの着物が汚れてしまうだろう。さすがに一人で座っているのも居心地が悪いので、そのまま雪ノ下の近くで立つことにする。

「というかお前、そんな目立つ髪でどうやってここまで来たんだよ？」

その髪で歩いていたら、それこそ都市伝説になって、新たな怪異が誕生しそうな気がする。

「帽子をかぶって、サングラスを掛けてたの。この時間帯だったら、案外目立たないものよ」

「……そんなもんか。芸能人だって案外気付かれないって言うからな」

そういえば、阿良々木先輩が姿を表さない。確かことが終わったら合流する手はずになっていたはずだったが。

「なぁ、雪ノ下。阿良々木先輩を知らないか？」

「私が出てくる前には、見たのだけれど。今は……分からないわ」

「そうか……」

阿良々木先輩のことだろう、きっとどこかで慇懃無礼な少女でも見かけて、追い回しているのだろう。

なんとなく空を見上げると、阿良々木先輩と会った時より見える星の数が増えている。視界の端で、俺と同じように空を見上げている雪ノ下が見て取れた。

「驚いたわ……。この街でも意外と、星が綺麗に見えるものなのね」

「そんなことはないだろ。ここは多少綺麗に見えるが、それこそ夏休みに行ったキャンプ地の方がよっぽど綺麗に見えるだろ」

「それでも、こんなに見えるとは思ってなかったの。この街はいろいろなものが溢れているから、見ることができないと決めつけていたわ。……だから、少し新鮮なの」

そうやって優しく微笑んだ雪ノ下は、そのまま星を見続けている。

それからしばらく、俺たちは静かな天体観測を続けていた。見えている星は少ないものの、雪ノ下が星に関する様々な逸話をひとつひとつ話をしてくれて、全く飽きることはない。

お互いに首が痛くなってきた所でやめる。首を回すと、コキコキと音が鳴る。

「そういえば、小町さんには何て言って、でてきたの？」

「小町には、『友達の家に泊まってくる』と言ってある」

「……」

「おい、無言で俺から距離を取るな。他の理由が思いつかなかっただけだ。最悪、マンガ喫茶にでも泊まるさ」

小町にはまだ、雪ノ下とのことは言ってないが、「ふーん」とか「へぇー」と言いながらも、何も聞かないで送り出してくれた。我が妹ながら良くできている。

「まぁ、いいわ。それよりご飯を食べに行きましょう」

「何で飯を食いに行くのか、全く分からないんだが……」

「何でと言われても……、食べたいのでしょう、ラーメン？」

……こらからお参りに行くときは、聞かれて恥ずかしくない願い事をしよう。

ゆきのフォックス　其之拾陸

自転車は高校生の必需品である。

日本で多くの人間が移動手段として使うものに車がある。長距離を移動できるかつ小回りが利くこともあって、多くの人間が利用しているが、高校生が乗っているようすは見られない。

日本国では十八歳までは車の免許がとれないが、そもそも免許の取得を禁止している高校も多い。ならばバイクはどうだという話になるが、学生の小遣いでは原付でも十分高価であるし、バイトをするならば、残りの時間を遊びに使った方が有意義だろう。

そこで話が出てくるのが自転車である。安価なものなら一万円以下で購入できるとともに、ガソリンもいらない。車検に金をとられることもないし、その気にならば何十キロも走ることができる。

そもそも、公共交通機関が発達していたり、娯楽施設が集合していたりする場合は、バイクや車を使うよりは交通機関を使ったり、自転車を漕いだ方が経済的なメリットが大きい。

故に高校生にとって公私に渡り自転車に乗ることが、最も合理的な選択なのだ。

そんな便利な自転車であるが、大きな弱点が存在する。……疲れるのだ。自転車を漕ぐときに使う筋肉は、日常生活ではあまり使わない部分を使うせいもあり、日常的に自転車に乗っていないと大変な思いをする。普段から腿を上げて運動している運動部の連中ならばともかく、千五百メートル走っただけでヘトヘトになるような俺にとっては、自転車に長時間乗り続けるというのは、かなり筋肉に負担をかけ

ることになった。

どこかの誰かと違って、若さ溢れる俺の場合、筋肉痛は即日中にやってくる。もの凄い速さで並走する阿良々木先輩と、一晩中に渡りあちらこちらで走り続けた俺の筋肉たちは、現在進行形で有給休暇を申請してくるともに、「もう疲れたよ、パトラッシュ」と言って勝手に昇天しそうになっている。もう少し働けよ、俺の筋肉……。まだ十八年しか生きてないが、階段を上るのがこんなにつらいのは初めてだ。

何よりも怖いのが、歩くだけで筋肉が深いところで、「やべぇよ、やべぇよ。オレもう筋肉痛になっちまうよ！」と訴えていることだ。明日どころか、今日の午後が心配である。

おまけにあまり寝てないせいか、頭がふらふらして、廊下や教室が歪んで見えるので、歩きにくいことこの上ない。

満身創痍な身体を引きずりながら、いつもの倍以上の時間をかけて教室に入ると、たくさんの瞳が一斉に俺の方へ向く。

「おい、ヒキタニ来たぞ、ヒキタニ」

「やっぱ、ほら、ヒキタニ君も疲れてるし」

「あの目の腐り具合は、絶対呪われてる。私には分かるね」

「いや、もしかしたらもう死んでいて、今はゾンビかもしれないぞ」

「腐った蜜柑理論によると、ヒキタニ君により、俺たちも腐り始める可能性が……」

「腐った！　ねえ、誰が腐っているの？　そして誰と誰が、マジで恋す

る五秒前なの？　ヒキタニ君？　隼人君？」

……このクラスって、こんなに変な奴が多かったか？　あと俺の名前を正しく言えるやつは居ないのかよ……。

こそこそと話をしているクラスメイトをすり抜けて席に着くと、すぐさま机に突っ伏す。……眠たくて仕方がない、このまま午前の授業は全て寝てしまおう。

「ヒキタニ君、ヒキタニ君」

ヒキタニなんて奴は、このクラスに居ただろうか。ほら、あれだ、アインシュタインと司馬遼太郎とグレゴリウス七世を足して、因数分解したみたいな顔をしている奴だ。ああ、あいつね。この前少しだけ話したが、酒を飲んで、薬をキメてレイブによく行ってたな。パンクロックが大好きで、二十一世紀にパンクなんて時代遅れなんて言ったらぶん殴られて、説教されたな。

「おい、ヒキタニ君」

それにしても、いやな世の中になったものだ。世界は金と暴力にまみれ、嫌なことがあっても何も言えない。戦争はなくならないし、世間は働け、働けとシュプレヒコールをしてくる。その癖働いても、ボロボロに使われて捨てられる。……しかしたら働いて生きるよりも、適当に生きた方が幸せなのかもしれない。女と薬に溺れながら金切り声で歌って、最後にはライブ会場で死ぬ。……嗚呼、最高じゃないか。

「ヒキタニー」

ならばさっそく、バンドを組まなければ。楽器の練習？　そんなも

のはどうでもいい。ロックに必要なのは怒りだ。世間への不満をぶちまけることを第一に考えればいい。だから演奏の巧さなんて二の次だ。俺たちは叫び続けることが大事なんだ。……それでも担当だけは考えた方がいいな。そうなるとやはりベースか。ベースこそバンドの心臓で、曲に血液を送り出す役割だ。こんなに格好いいものはない。とりあえず、そのヒキタニをギターかドラムにしよう。

「おいっ」

首筋に鈍い痛みを感じて顔を上げる。

とりあえず正面を見ると、手を手刀に形に構えた戸部と、どこか呆れた表情の葉山が立っていた。武道館の夢は破れ去ってしまった。

「悪いな、戸部。このバンドのベースは既に埋まっている。ベースがやりたいのなら、どこか別の所へ行け」

「いや、バンドの話なんて全然してねーべ」

どうも意識がはっきりせず、頭の中が浮遊感で満たされている。どうやら寝ぼけているらしい。

「あ？　一緒にバンドを組んで、武道館で楽器をたたき壊す話じゃなかったのか？」

「いやいや、もうその話はいいべ。……それより」

「それより、ヒキタニ君。昨日、あの後、何か変なことでもなかったか」

葉山が戸部の言葉を遮って、俺に聞いてくる。

「変なこと……ね」

あったと言えば、会ったような。垂直跳びで三メートル以上跳ぶ吸血鬼とか、狐に憑かれたのに呑気にラーメン食ってる女とか、ロリコンとか。

「夢で狐に追われたとか、階段から足を滑らせて落ちそうになったくらいだな」

そう返すと、戸部は得心が行ったように「だべ、だべ」と繰り返している。一方で葉山は少し俯きながら「やはり、比企谷もそうか……」と考えに耽っている。

「やっぱヒキタニ君もそうけ？　オレも夢であの白い女の子を見たり、夜中に狐の鳴き声が聞こえてきたり、朝学校に来たら、教科書が血塗れになってたり」

「隼人君や優美子も、同じようなことがあったんだよなー」、戸部はそう続ける。

「特に教科書の方は優美子が怖がっていてな、今は結衣と日菜が付き添って保健室にいる」

三浦には悪いことをしたな。案外打たれ弱いんだよな、三浦は。というか猫を被っているときより、素の方が可愛いのは、女子の宿命なのだろうか？

「比企谷、何か心当たりはないか？」

葉山がその双眸をこちらへ向けて、はっきりとした口調で聞いてくる。

「知らねえよ、あれじゃないのか？　あそこは神様の住処じゃなくて、妖怪の住処だったんじゃねえのか？　だから藪をつついて蛇が出てきたんだよ」

「いや、ヒキタニ君。それは違うんじゃねーの。あそこ神社だったし」

「そうでもないだろ、あそこにあったのは、狐の地蔵だろ。神様だとは限らないわけだ。……そもそも狐なんて悪さしかしないだろ。妖狐なんて、よく言われているもんだし」

割と穴だらけな論理な気もするが、自信を持って言う。

「じゃあ、どうすんべ。マジで呪われてるじゃん、俺たち」

「ほっときゃいいだろ、ほっときゃ。妖怪だって暇じゃないんだ、一ヶ月くらいすれば、自然となくなるだろ。しばらくは不運な出来事が続くぐらいだ、大したことはない」

机から数学の教科書を一冊取り出て開く。適当にぺらぺらとめくっていると、やはりというか、様々なページが血塗れになっている。こうなってしまってはもう数学を学ぶことはできないな。仕方がないな、全く。俺としては受験に向けてこれから数学をしっかり勉強していこうと思っていたが、これではどうしようもない。全くもって残念だ

……まあ、知っていたが。

「ほれ見ろ。絶対やばいって」

「知るか……、悪いがこんなのには、慣れてるんだよ」

そう言って、再び机に突っ伏して眠りに入る。既に脳が睡眠体勢に入っているのか、眠りにつくまでに大して時間はかからなかった。

旨そうな卵焼きのにおいで目を覚ます。

目を開いて状況を確認しようとしたが、強烈な光が射し込んできて、上手く周りを見ることができない。軽く目を細めて目に入る光の量を調整しながら、だんだんと目を慣らしていく。

まだ窓から入る光は強烈なままだったが、それでも教室内を確認が出来るようになってきたので、身体をひねるついでに教室内を見渡す。所々空席があるが、大多数が机をくっつけて、のんびりと弁当を食べている。

どうやら昼休みまで寝ていたらしい。ということは四つほど授業をスルーしたわけだが、授業の挨拶をどうやって切り抜けていたか気になるが、まあいいだろう。

「もう、マジでやばい……。オレら呪われたかもしんねえ」

「いやいや、偶然だって」

「そんなことないべ、普通走り幅跳びで、手首なんて折らないべ」

「いや、そもそも大和は戸部のこととは関係ないだろ」

「だってほら、オレがその話をしたときに大和は大爆笑してたじゃん。きっとあの狐が起こって、大和に祟ったんだべ」

話し声だけで戸部が会話しているのが分かる。話している内容が内容なので、ぼうっとする振りをして見ていると、現場にいるのは二人しかいない。あのでかい奴――ラグビー部の大和がいない。どこかの屋根にでも上っているのだろうか。

「戸部は教科書以外、大したことが起きてないじゃん」

「でもさー、ヒキタニ君見てみ。あれ絶対呪われてる目をしてるよ……」

どうやら大和がけがをしたらしい。……というかちょっと待て、体育があったのかよ。あれ出席しないとそれだけで、マイナスなんだよなー。しかも大体サッカー部が「ヒキタニ君はさぼりましたー」などと言って、勝手に俺の評価を下げてくる。あいつら何であんなに、積極的に人の評価をさげようとするだろうな。しかも体育でサッカーやってると、やたらとキレるし。

「なあ、ヒキタニ君」

戸部たちを眺めていると、葉山が真後ろから声をかけてくる。

別のクラスに顔を出していたのか、教室の入口から歩いてやってくる。ただいつもの葉山と違い、顔に浮かべている笑みが少し疲れているように見える。

「率直に聞くが、今回の件、お前はどこまで噛んでいる？」

話しかけてきたときの気軽さが全く反転した、責めるような言葉で葉山は聞いてきた。

「ほとんど何もやってねえよ。きっかけをつくっただけで、あとは勝手に起こっただけだ」

「……本当だな」

特に葉山を怒らせることを言ったつもりはないのだが、段々と言葉と目つきが険しくなっていく。そんな葉山の様子を察した近くの女子たちが、こちらを見て、ひそひそと話をし始める。

「本当だよ……。お前らが勝手に、良くわからないものを幻視しているだけだ」

「分かった……。だがな、もしそのことが嘘だったら、俺はお前を絶対に許さない」

葉山はきっぱりと、周りに聞こえるような大きさで宣言する。

それだけ言って葉山は、来た道を引き返して廊下に出ようとする。

「最後に一つだけ言っておくぞ。世の中は俺みたいに良い奴ばかりじゃないんだよ。悪い奴もいれば、普通の奴もいる。他人が嫌なことを平気でできる人間や、ばれなければ裏で何かやる人間もいる。お前が思っている以上に、世界は混沌としていて、誰も彼も楽しそうにしている裏で、誰かを疎ましく思っているんだよ」

去りゆく葉山の背中に向かって声を掛けるが、葉山は何も答えずにそのまま廊下へ出て行った。

まあ……、こんなものだよな。俺の場合。

ゆきのフォックス　其之拾陀

四日ぶりに訪れた境内は、あの夜の惨状がまるでなかったかのように整然としていた。

壊れてバラバラになった稲荷地蔵も、根っこから倒れて所々折れてしまった松も、いつの間にか撤去されているとともに、それ以前に境内に散っていた葉っぱも綺麗に清掃されていた。ほとんど忘れ去られていたと思っていたが、それでも管理する人ぐらいはいるらしい。

「それで、君は一体何をしたのかな？」

目の前の雪ノ下が、朗らかに俺に尋ねてくる。

いや、正確には雪ノ下ではない。雪ノ下の身体を借りた白狐さんだ。その証拠というべきか、その顔には人懐っこい笑みが張られている。

そして、この神社と同じように雪ノ下の外見も、四日前とは大きくことなっていた。雪を思わせる真っ白な髪はすべて、この暗闇に染められてしまったかのように、雪ノ下本来の艶やかな黒髪へと戻っている。

ただ一点、雪ノ下の頭に、そのまま純白の狐の耳が残っているだけで、それ以外はほとんど雪ノ下へと身体が戻ってきているのだ。それは雪ノ下と白狐さんが分かれ始めているということだろう。

「いや、特に何もしていませんよ。俺以外の人間が、勝手に動いてくれただけです」

ここには俺と白狐さんしかいない。

そもそも、誰かを誘って、この神社へと来たわけではなく、そこに白狐さんがいると思って、ふらりとここまで来てしまったのだ。

腕時計を確認すると、時計はすでに午前二時を回っている。虫や鳥もすでに寝静まっているのか、ただ、風が吹きすさぶ音だけが境内を通り抜けている。

「そうかもしれないね。ただ、この前から少し体の調子がおかしくて、……私は信仰を取り戻して欲しいと言ったのに、どういうわけか、神様としての力が無くなってきているんだよ」

白狐さんは続ける。

「不思議なことに、私が見たことも声を聴いたこともない人間が、私を認識していてね。君が動いてくれたのかなー、なんてのんきに思っていたんだけど、どうやら私を神様とは思ってくれなかったんだよね」

それから話すことは、白狐さんの個人的な感覚が多かったが、それでもこういうものらしい。

四日前、葉山たちがここへお参りした直後、数は少ないが、白狐さんを畏怖する感情を感じ取ったらしい。それには恐怖が大部分を占めていたそうだが、それでも白狐さんを敬う、つまり神様として扱う感情も混じっていて、白狐さんはそれを美味しく食べていたらしい。

ただその後、おかしな感情が白狐さんの元へと届けられた。怒りや、恐怖、不安、慟哭といった嘆きが白狐さんを包み込んでいったらしい。それこそ、白狐さんが全く心辺りがなく、人間が起こした出来事から派生したものであったものでも。

「つまり君は、世の中の不幸な出来事を妖怪の仕業に仕立て上げたわけだ。狐である私の仕業に」

雪ノ下を白狐さんから解放しなければならない。だからといって、願いを叶えてしまえば、陽乃さんから外面が失われてしまう。ならばどうするか、そもそも白狐さんを神様の座から引きずり降ろして、白狐さんの神様としての力を失わせればいい。

「まあ、そんな感じですね。あなたがもともと妖怪だったことは、全く知らなかったですけれど」

「あらら、それはあの吸血鬼ちゃんから聞いたのかな？」

月を背負いながら話している白狐さんは、どこか儚げで、今にも消えてしまいそうなほど、存在感が薄かった。初めて会ったときよりも落ち着いた話し方をするのも、白狐さんの影響が抜けて、雪ノ下が出てきているからかもしれない。

「それについては、ここに来て初めて分かったらしいですけどね」

最初に疑問に思ったのは、この神社に拝殿がないことだった。神様の住処はしっかりとあるのに、参拝客用の賽銭箱も鈴も用意されていないのは、どこか変だと思っていた。ただ、あの吸血鬼とは違い、俺は変だと思うことしかできなかった。

「忍さんに聞いて、納得しました。この神社も周りを背の高い木で覆って外が全く見えないことや、落葉樹の銀杏ではなく、常緑樹の松が植えてあるのも、この場を変わらないものにするためだったんですね」

どの季節でも変わらない場所というのは、何かを封じるには適した場所らしい。……それもそうだ。変わらない、つまり何も起こらないということだ。出てきてほしくないものを封じるにはもっとも、というわけか。

「その通り、神様になってからは久しいけど、昔はただの狐で、長生きして妖怪に昇格したんだよ」

「……いつから、あなたは神様になったんですか？」

本来ならば聞かなくても良い話だが、思わず聞いてしまった。白狐さんと会うのもこれが最後だと思うと、もう少しだけ話をしたくなったのだ。

……狐耳の雪ノ下を見ることができるのも、これが最後だしな！

「さあねー。君が生まれるよりも大分前だったろうけど、確かに恐れられて封じられたはずなのに、いつからか色んな人間たちが私を奉るようになって来たのはいつだったかな。どうせ何もできないし、するつもりもなかったから無視をしていたんだけど、ある時、誰かが勝手に良いことと私を結びつけたんだよ。そして気付いたら神様になっていたの」

髪をいじりながら、呆れたように、白狐さんは語った。

「白狐さんは、神様と妖怪、どちらが良かったんですか」

「どっちでも変わらないよ。神様だから敬われるとか、妖怪だから迫害されるとか、そういう時代は過ぎちゃったからね。神様だろうと妖怪だろうとひっそり生きていくしかないんだよ」

そう言われると、どう反応していいか分からなくなる。

月の光に照らされた白狐さんが髪をかき上げると、光が反射して銀色に輝いて見えて、その微笑みと相まって、よく分からない感情がどこからか溢れそうになる。

「ねえ、一つ聞いていい？」

「……どうぞ」

「君と一緒に来た子たちが、私と不幸を結びつけたのは分かるんだけど、あの子たち以外の子たちも、私のことを認識しているようなんだよね、しかも凄い早さで。私としてはもう少し時間がかかると思っていたから、びっくりしたの」

「ああ、そのことですか。……人間っていうのは、良いも悪いもひっくるめた生き物でしてね。理由も見つければ、簡単に悪いこともしてくれるんですよ」

学校内で狐の妖怪の噂を拡散させ、不幸な出来事と白狐さんを結びつける。そうすれば勝手に白狐さんを幻視してくれるとともに、その噂を悪い方向で生かす人間が必ず出てくる。人間関係なんてものは、小さな不満で溢れているのだから、火をつけてしまえば、簡単に広がってしまう。

だからこそ、最初に怪奇現象に巻き込まれるのは、葉山のグループでなければならなかった。トップカーストに位置するあいつらが被害に遭うことによって、噂が早く広まるとともに、信ぴょう性が高まる。

そうすれば、誰かを嫌っている奴は噂に便乗して行動を起こすし、

被害に遭った奴も誰かに嫌われているよりは、妖怪のような良くわからないものを理由にした方が都合が良い。たとえそれが現実逃避であっても、誰もがそれを想ってしまう。

本来ならば、こんな方法をとるべきではないのは分かっている。誰もが納得して、誰もが幸せになれるような方法が理想なのは知っている。……だが、俺にはこんな方法しか思いつかなかったのだ。

「なるほど、君は最低だ！」

白狐さんが笑いながら、罵倒をしてくる。

「妖怪に言われる言葉じゃありませんね、まったく」

それにつられて、思わず俺も自虐的な笑いを浮かべてしまう。

「……じゃあ、そろそろこの話は終わろうか。この瞬間も私を恐れる感情がたくさん入ってきているからね。神様ならともかく、妖怪である私が憑いているなら、この子に負担が掛かっちゃうから」

「なら、俺も最後に一つ聞いていいですか？」

「いいよ」

「陽乃さん――こいつのお姉さんの人格なんですけど、ちゃんと元に戻りますね？」

「うーん？　たぶん戻ると思うよ。今回の場合、私の都合で契約不履行になるわけだし、それに私が出てくときと一緒に、この人格も外に出すから、必然的に長年親しんだ所へ戻るんじゃないかしら？」

何とも不安な答えをしてくれる。……仕方がないので、明日の朝一番に陽乃さんに確認するとしよう。

「これで大丈夫かな？　……うん、じゃあお別れだね」

白狐さんがそう言うと、それまで穏やかだった風がいきなり強く吹き始めるとともに、白狐さんの髪が絹のような黒髪から、以前に見た真っ白な髪へと彩られていく。

「君が余りにもこの姿に見蕩れていたから、サービスね。しっかりとその目に焼き付けておきなさい」

この風で目を覚ましたのか、それとも主の帰還を祝福しているのか、それまで静かだった虫や鳥たちが一斉に鳴き始め、境内は喧噪に包まれる。

「私はしばらくここにいるから、暇なときはこの子と遊びにでも来なさい。歓迎するよ」

白狐さんが笑いながら手を振ると、一際大きな風が境内を通り抜ける。迫り来る風に耐えきれず思わず目を閉じる。

すぐに風が止み、目を開けると、いつも通り落ち着いた表情の雪ノ下がそこにはいた。髪も黒へと戻っていて、ここしばらく生えていた狐耳も無くなっている。

「なんか、その姿を見るのも久しぶりだな」

「そうね、一週間ちょっととはいえ、それまであったものが無いというのは、どこか変な感じがするわね」

雪ノ下はぽんぽんと自分の頭を触っていたが、その後に姿勢を正し、俺を真っ直ぐに見つめると、

「比企谷君、私を助けてくれてありがとう」

そう言って丁寧にお辞儀をした。

「……人は勝手に助かるんじゃなかったのか？」

面映ゆくなってしまって、ついつい反論してしまう。

「……そうね、でも今回はあなたに助けられたの。勝手にあなたが助けてくれたの。だから、お礼を言わせて欲しいわ」

こいつは真面目な顔で、自分が何を言っているのか分かっているのか。

「それに互いに助け合う、互いを補い合いながら寄り添っていく、そんな関係も良いのかもしれないわ」

「……そうかもしれないな」

人間関係のことはよく分からないが、一人か二人くらいは、そんな形になっても良いだろう。そして、そんな風になれたら今よりもう少しだけ、優しい世界になるのかもしれない。

そうして、俺たちの間を沈黙が支配する。ただ、不思議とその沈黙が心地良い。雪ノ下もそう思ったのか、何も言わずに風を受け、髪をたなびかせている。

「……帰るか」

「ええ、帰りましょう」

そうして俺たちは帰路につく。ここから雪ノ下のマンションに寄り、家に帰るにはそれなりに距離があるが、まあ問題ない。どうしてか、今はもう少し夜風に当たりたくて、仕方がない。雪ノ下もそう思ったのか、いつもより歩くスピードが遅い。

少し離れて歩いていた俺と雪ノ下であったが、月の光に照らされてできた俺がたちの影は、見事に寄り添っていた。ただ、俺も雪ノ下もそのことを指摘せずにそのまま歩き続ける。。

……まあ、たまにはこんな青春もいいだろう。

ゆきのフォックス　其之拾捌

「あらあら、比企谷君」

登校中に陽乃さんに声をかけられる。

まるで偶然道端で出会ったかのようだが、ここは俺の家の目の前で、俺はちょうど玄関を出たところである。偶然もなにもへったくりもない。

「お久しぶりですね、陽乃さん」

陽乃さんは以前にショッピングモールで会ったときのように、刺激的な格好をしていて、思わず見蕩れてしまう。

すらりと伸びる足は黒のストッキングに包まれ、その足の長さと細さを主張していているが、何よりも上着の白いニットのセーターに目がいってしまう。陽乃さんは肩を大きく開いたセーターをふとももまで伸ばし、ボトムを隠している。おそらくショートパンツかプリーツを履いているだろうが、はたから見ていても全く分からない。

履いているかどうか分からないだけで、こんなにも興奮するとは思わなかった。露出がある肩よりも、肌が見えない部分に目がいくのは不思議な現象である。

何よりその御足を包み込んでいる編み上げブーツが素晴らしい。ハイヒールやローファーには全く心が動かされないのに、ブーツというだけどうして引きつけられるのだろうか。

「んっ？　どうしたの？　何か変な格好だった？」

陽乃さんが自分の身体を動かしながら眺めているので、服の上からでも分かる豊満な胸がより強調される。……すばらしい。

「どうやら人格は元に戻ったようですね。元気になって、何よりです」

「その通り、だから今日は比企谷君にお礼を言いに来たわけ」

その強化外装からするとあまりそういう印象はなかったが、陽乃さん自体は案外律儀な性格なのかもしれない。

「だったら、雪ノ下の所にでも行けばいいじゃないですか？　あいつ、大分気にしていましたよ」

「雪乃ちゃんならもう話したよ。今朝に電話が掛かってきて、改めて謝られたから、しっかりと話して和解したよ」

陽乃さんの声音が一瞬、柔らかくなったことに気付く。その言葉を聞くだけで、色々なものがこみ上げてくる。決して良いことがあったとは言えないが、それでもこの二人が歩み寄ってくれたことが、雪ノ下の友人として何より嬉しい。

「……そうですか、良かったです」

「うん、ありがとう。それとは別に、お姉さんは、嬉しいことがもう一つあったんだよね～」

「はあ、そうなんですか……」

曖昧に返事をする俺に対し、陽乃さんは「こほん」と可愛らしい咳払いを一つすると、

『だから比企谷君、……私と友達になってはくれないかしら』

「はい？」

『お、俺も……、お前と友達になりたい』

「ちょっ」

と、そんなとんでもないことを言った

おい、ちょっとまて。というか今、この段階で、誰かに聞かれてはないだろうな。

思わず辺りを確認すると、幸い近くには誰もいない。ただし、陽乃さんは悪戯をした小学生のような含み笑いをしていた。

「なんでもそれを知っているんですか！」

「なんか良く分からないんだけどね、人格が戻ったときに、少しだけ雪乃ちゃんの記憶が混じってたんだよ。そしたら、こんな可愛らしい記憶が入っていたから、お姉ちゃん嬉しくなっちゃって」

あの狐、立つ鳥が跡を濁してどうするんだよ。いや、狐は鳥じゃないから関係ないのか。

「お姉ちゃん嬉しいなー。雪乃ちゃんにまた一人お友達ができたし、比企谷君も初めて友達ができたからね！」

陽乃さんがにやにやしながらこちらを見ている。その表情は、初めて陽乃さんに会ったときに近いものではあるが、印象はまるで違い、親しみを感じられる。

「すいません、もう学校に行っていいですか？」

「あら、もうそんな時間。……改めてお礼を言うね、比企谷君。今回は雪乃ちゃんを助けてもらって、本当にありがとう」

そうして陽乃さんは、この前俺に見せた屈託の無い笑いをする。その顔を見るだけで、何とかやりきった気分になる。

「うん、じゃあ、またね。可愛い弟君」

そんな不穏な発言を残して、陽乃さんは軽やかに去っていってしまった。

やはりあの人はいつでも、台風のような存在だとしみじみ思ってしまう。

休み時間の間を見て、阿良々木先輩に会いに行く。

すぐ先に受験を控えているからか、それとも単純に年齢の差なのか、三年生は俺たち二年生よりも大分落ち着いていて、そして大人びて見えた。

阿良々木先輩の教室の前まで行き、神経質に勉強している雰囲気に気圧されていると、むこうが気付いてこちらに来てくれる。

「どうも……、雪ノ下の件は、おかげさまで何とかなりました」

「そうか、それはなによりだ」

一言で会話が終わってしまった……。

そういえば、阿良々木先輩とはビジネスライクな会話以外をしたことがない。そんなことを思ったが、そもそもあまり普通の会話を誰かとしたことがなかった。……なら仕方ない。

「結局、阿良々木先輩の依頼を放ってしまって、申し訳ありません。それに加えて、俺たちのことまで手伝ってもらって……なんて言ったらいいか」

「それは別に問題ない。それに、変なおまじないなら、比企谷が流行らせたわけだしな」

阿良々木先輩は冗談めいた口調で言ったが、正直俺の胸に刺さった。

「それについては、本当に悪かったです」

「いや、僕は比企谷を責めたいわけじゃない。今回の件については、お前も僕も同罪だ。比企谷の案を認めて、見逃して、実行をしたのは僕たちだ。ならば、悪いのであれば、僕だって悪い」

阿良々木先輩はさらに加える。

「ただな、これを良い思い出だけにするなよ」

「良い思い出……ですか？」

「比企谷はそれこそ友達ができたし、僕もお前たちと知り合えて良かったと思っている。それでも、僕たちは見ず知らずの誰かを巻き込んで、傷つけたんだ」

阿良々木先輩は一瞬俺から目を離し、自らの影に視線を落とす。そこには影に封じられた吸血鬼が、今もそこに封じられている

「僕たちは後悔し続けなければいけないんだ。雪ノ下を助けることができたからって、僕たちのやったことは消えてなくならない。だから、誤魔化すなよ」

そうして俺は、ようやく阿良々木先輩の強さを知った。

この人は、普通の奴らが簡単に誤魔化して、いつの間にか忘れてしまうことでもしっかりと覚えて、後悔しつづけているのだろう。それこそ、自分の心が擦り切れるくらいに。それは本当に、心が強くないとできないことだろう。

「そうですね。しっかりと覚えておきます……」

それは、そのことだけは、俺もしっかりと背負い続けよう。

「うん、まあ雪ノ下さんと由比ヶ浜ちゃんと仲良くやれよ。……そろそろ授業が始まるな、比企谷もそろそろ教室に戻ったほうがいい」

右手に付けた腕時計を見ながら言うと、阿良々木先輩は背もたれの体勢から姿勢を正して、指を上の階に向ける。

「今回は、本当に助けられました。どこかで時間ができたら、用事が無くても奉仕部に顔でも出してください」

「ああ、戦場ヶ原もつれて、遊びに行かせてもらうよ」

「それでヒッキー、何か私に言うこと忘れてない？」

由比ヶ浜は朗らかに、顔に笑みを浮かべながら言った。

……おかしいな。こんな光景を以前見た覚えがある。これがデジャヴというものか。もしかしたら俺は時間をループしているのかもしれない。

そうやって考えると、この昼休みに響いてくる喧噪や、野球部の一年生がグラウンドを均している風景に見覚えがあるのも、時間を繰り返していると考えれば納得がいく。

机の上に広げている弁当の中身にも、見たことがないものが入っている。これは冷凍食品のグラタンだろうか？

箸で少し摘んで口に入れる。うん、旨い。というか、これはラザニアなのか。ラザニアなんて、少し洒落たレストランでしか食べたことが無かったが、今は冷凍食品で食べることができるのか。冷凍食品もこのレベルまで到達したのか、もしかしたら俺が主夫になる頃には、料理をするのが大分楽になってしまう。

……よし、現実逃避もここまでだ。

目の前に座る由比ヶ浜の表情が、笑った顔から、沈みがちなものへと変わり始めている。すでに罪悪感が振り切れている。

「あんまり期待するなよ。言葉を選ぶのは苦手なんだ」

「言葉自体は期待してないから大丈夫。大事なのは気持ちだよ」

それでも由比ヶ浜は、丁寧に手を膝の上におき、目を輝かせながらそわそわとしている。

……すげえ言いづらいな、これ。

「今まで由比ヶ浜の優しさや、思いやりを突っぱねて悪かった。自分のことを好意的に見てくれる奴なんて居なかったから、勝手に勘違いをして一人で傷つきたく無くて、自分に嘘を吐いていたんだ。だけど、それでも、」

由比ヶ浜は、不器用な俺にここまでしてくれたんだ。だから、俺も変わろうと思う。

「それでも、俺は、由比ヶ浜と友達になりたい」

「嬉しい……」

「はあ……」

由比ヶ浜は瞬きをして、こくりこくりと俺の言葉をしっかり味わうようにしていると、ぽつりとつぶやいた。

「ヒッキーの方から、そんな風に言われて、すごく嬉しい」

そんな優しげな表情をされたら、俺はこれ以上何を言っていいか分からなくなる。

「ヒッキー」

「……何だ？」

「私にも何かあったら、ちゃんと助けてね」

グラウンドにいる野球部が引き上げているのが、視界の隅入ってくる。もしかしたら、そろそろ昼休みが終わるのかもしれない。

「嫌だね」

「ちょっ！　そこでそう言う？」

「お前な、奉仕部はそう簡単に人を助けないんだよ。自分で解決できるなら、自分でやれ。……ただ、どうしても無理そうだったら、俺や雪ノ下にしっかり頼れ」

人は一人で助かるべきだと、今でも思う。ただ、どうしようも無く悩んでしまったら、誰かに頼って、道を照らしてもらうくらいはいいのかもしれない。

「うん、頼りにしてる。……そうだヒッキー、あたし今日は部活に出られない」

「ん？　何か用事でもあるのか？

「優美子たちに、いっぱい迷惑をかけちゃったからね。しばらくは優美子たちと遊ぼうと思うの」

きっとそれが、由比ヶ浜なりの責任の取り方なのだと思う。

「だからね、ヒッキー。ゆきのんに変なことをしちゃダメだよ」

「……しねーよ」

生暖かいが、芯は冷えている風に肌を撫でられ目が覚める。

「あら、起こしてしまったようね」

体を包み込む柔らかな光の先に、雪ノ下が窓を開けているのが見えた。黄蘗色のカーテンと一緒に雪ノ下の髪がふわりと舞い上がる。

どうやら寝てしまったらしい。部室に一人早く着いてしまったのは覚えているが、それから先の記憶がない。昨夜というか今朝だが、雪ノ下を送り届けて家に帰ったのは、朝の四時だった。その時点で眠ると確実に昼まで寝る自信があったため、そのまま起きていたため、放課後に睡魔が襲ってきていたのだ。あーツレーわ、俺マジ寝てないわー。

「悪い、寝ていた」

「いえ、むしろ起こしてしまって、ごめんなさい。そのまま寝てくれていて良かったのよ」

雪ノ下はそのまま席に着くかと思っていたが、ガラス製のポットと陶磁器のティーカップ、電子ケトルを用意始める。俺も手伝おうかと思って腰を上げるが、雪ノ下が視線で諌めるのでそのまま戻る。

「久しぶりの学校はどんな感じだ？」

「なんだが、玉手箱を開けてしまった気分ね。授業を内容は分かるのだけれど、前後の関係がわからないから、困惑してしまったわ」

相変わらずさらりと、凄いことを言ってくれるな、こいつは。

「やっぱそうだよなー。もし逆の立場だったら間違いなく、授業が理解できなくて絶望する」

「安心しなさい。もしそうなったらちゃんと勉強を教えてあげるから」

「……」

少しして、雪ノ下が紅茶を煎れ終わる。紅茶はここでしか飲んだことがないので他の味を知らないが、それでも雪ノ下が煎れる紅茶は旨い。

「砂糖はいつもと同じで大丈夫かしら？」

「ああ、よろしく頼む」

俺の前にカップが置かれ、雪ノ下が席に着く。

「阿良々木先輩が言っていたぞ、俺は後悔し続けなければいけないと」

「そう……、やはりあの人は厳しくて、強い人ね」

「……そうだな」

雪ノ下が口に付けていたカップを、音も立てずに上品に置く。その時の衝撃で紅茶の水面が静かに揺れて波紋を作った。

「それでも、一つ思うの。私も比企谷君も、それこそ由比ヶ浜さんも罪悪感を残しながら生活をしていくのかもしれないけれど、だからと言って、良いことがなかったことにはならないと思うわ。もしかしたら残りの高校生活の間、後悔し続けて、もっと良い選択があったかも

しれないと、探していても、比企谷君や由比ヶ浜さんと仲良くなれたことは、ずっと良い思い出として残ると思うの」

阿良々木先輩はもしかしたら、このことを伝えたかったのかもしれない。悪いことがあったから、良かったことが無くなったり、良いことがあったから、悪いことが無くなるということはないんだと。

「だから私は、比企谷君とこういう関係になれて、本当に良かったと、今も思っているのよ」

そう可愛らしい笑顔で言う雪ノ下を見ながらふと思う。

どうやら、白い狐が幸福を運んでくるというのは本当らしい。

窓から入ってくる風は、より涼しさを増してきている。窓の外を見てみると、街路樹が恥ずかしそうに色づき始めている。もう夏の残り香は、秋の風にかき消され始めていた。

秋はもう、目の前にまで来ている。

終章　ゆきのフォックス

学校生活は変化が乏しいものと、雪乃は常々思っていたが、どうやら認識を改める必要があるらしい。

二週間弱休んでから、復帰して雪乃がまず思ったことは、話の前後が全く分からないということだった。授業にしろ、クラスメイトとの会話にしろ、前提の情報がないため話を上手く掴むことができず、それこそ浦島太郎の気分を味わった。

雪乃はそんなもの憂げな気分で、復帰初日を過ごしていた。担任や静に呼び出され体調の具合や、休んでいた間の連絡事項などを一つずつ丁寧に説明されたため、昼休みもほとんど自由がなかったのも、自身が憂鬱になっている一因だと雪乃は考える。

そして放課後、心配そうに声をかけてくるクラスメイトの誘いを丁寧に断り、教室から出たのは、ホームルームが終わってから二十分程経った後だった。

本来ならば休んでいた分を取り返すために、動くのが適切であろう。実際に担任からは放課後に職員室に来るように言われている。ただ、それでも今日は、今日だけは奉仕部に顔を出したかった。

いつも使っていた道のりを通ると、それまで気付かなかった些細な点が目に入る。掲示板に張られている校内新聞は、雪乃が初めて見るものだったが、刊行数見るとかなりの数を刊行されていて少し驚く。その他にも、何気ない学校の構造や、階段の古びた手すりの、凸凹な感触を楽しそうに眺め、味わっているうちに、雪乃は奉仕部へとたどり着く。

ドアの前に立ち、一度服装の乱れがないかを確認して、大きな深呼吸を一つする。

久しぶりに訪れたこの部屋は、思っていたよりも狭く、黄金色の秋の陽に照らされて、暖かな空気に包まれていた。

ただ、先に部室にいた比企谷八幡が何も反応をしないので、訝しがりながら回り込んで、顔を覗くと、八幡は椅子にもたれ掛かる形で眠りに入っていた。

その穏やかな表情を見て、少し緊張していた自分がなんだか馬鹿らしくなってきて、ふつふつと何かがこみ上げてくる。

それでも、昨夜この少年は夜通し自分のために働いてくれたのだ。ならば、ゆっくりと眠らせて上げよう。

そう思い、静かに席に着き、鞄から本を取りだして開く。

文字を目で追っているものの、頭に入ってこない。本を目の前にしても、考えてしまうのは、この後何をどう話そうとか、どんな過ごし方をしようだとか、そんなことばかりだ。

どうやら自分は、思いのほか会話を楽しみにしているらしい。雪乃はそんなことを思い、小さく笑ってしまう。

ただその前に、この気を抜いてしまったら眠ってしまうような暖かさを、しっかりと味わおうと雪乃は思い、再び本に目を落とす。

相変わらず本へ集中はできないし、比企谷八幡が起きる気配もまったくないが、それでも雪乃は、この教室に流れる空気が嫌いではなかった。